

海 戸 田 遺 跡

菊 川 市

平成 24・25 年度（主）吉田大東線社会資本整備総合交付金
(県道道路改築) 及び平成 26 年度（主）吉田大東線防災・
安全交付金(県道道路改築)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015

静岡県埋蔵文化財センター

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第49集

海 戸 田 遺 跡

菊 川 市

平成 24・25 年度（主）吉田大東線社会資本整備総合交付金
(県道道路改築) 及び平成 26 年度（主）吉田大東線防災・
安全交付金(県道道路改築)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015

静岡県埋蔵文化財センター

序

海戸田遺跡は、JR菊川駅から東北東へ3km程の菊川市吉沢に所在する遺跡です。吉沢地区内を通る主要地方道吉田大東線（県道79号線）が南側に迂回する改良工事が計画され、本遺跡を通過することとなったため、工事に先立ち、平成24・25年度の2か年にわたり、発掘調査を実施しました。

海戸田遺跡の所在する吉沢地区は、北東から南西に流れる菊川とその支流である沢水加川の合流地点付近であり、周辺の丘陵上には多くの遺跡が所在します。海戸田遺跡の東の丘陵上には、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡である赤谷遺跡や弥生時代後期の集落跡である祢宜屋敷遺跡があります。南の丘陵上には、縄文時代後期から晩期の集落跡である石畠遺跡があります。さらに南の牛渕の丘陵上には、平安時代後期から鎌倉時代に操業された皿山古窯跡群があります。また、菊川を挟んだ北西側の丘陵上には、中世の寺院である潮海寺に関連する遺跡が広がっています。

今回の海戸田遺跡の調査では、上層から平安時代末から鎌倉時代のものと考えられる水路や自然流路、自然流路に設けられた水位を調節し取水するための堰等を確認することができました。また下層からは、弥生時代後期や奈良時代の溝等を確認することができました。その中には、弥生時代後期の土器とともに石が多量に出土した溝もありました。

これらの成果から、本地域の古代末から中世に至る土地利用状況の一端を知ることができます。谷口に位置する沖積地であるこの一帯の土地利用を進めるにあたって、水路を構築し、自然流路から取水、各水田等へ配水していた様子がうかがわれます。また、弥生時代後期の土器が多量に出土する溝跡が確認された他、縄文土器や古墳時代から奈良時代の遺物も出土しており、周辺の遺跡の資料と合わせ、本地域周辺での人々の活動の様子を知る手懸りとなるものです。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、静岡県袋井土木事務所ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2015年3月

静岡県埋蔵文化財センター所長
赤 石 達 彦

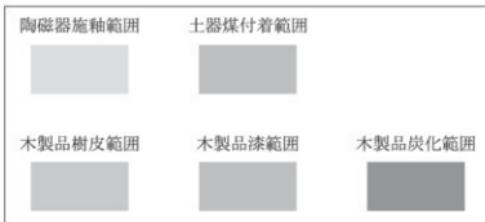
例　　言

- 1 本書は静岡県菊川市吉沢430-4他に所在する海戸田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は平成24・25年度(主)吉田大東線社会資本整備総合交付金(県道道路改築)及び平成26年度(主)吉田大東線防災・安全交付金(県道道路改築)に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県袋井土木事務所の依頼を受け、静岡県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 海戸田遺跡の本調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。
- 本調査 平成24年7月～平成25年3月　　調査対象面積 939m²
　　　　平成25年7月～平成25年10月　　調査対象面積 374m²
- 資料整理 平成25年11月～平成26年3月
　　　　平成26年7月～平成27年3月
- 4 調査体制は以下のとおりである。
- 静岡県埋蔵文化財センター
- 平成24年度(現地調査)
- 所長 勝田順也 次長兼総務課長 八木利眞 調査課長 中鉢賢治
主幹兼事業係長 前田雅人 総務係長 滌みやこ
調査第一係長 富樫孝志 指導主事 福島正志
- 平成25年度(現地調査・資料整理)
- 所長 勝田順也 次長兼総務課長 南谷高久 調査課長 中鉢賢治
主幹兼事業係長 前田雅人 主幹兼総務係長 大坪淳子
主幹兼調査第一係長 及川 司 指導主事 福島正志
- 平成26年度(資料整理)
- 所長 赤石達彦 次長兼総務課長 長谷川明子 調査課長 中鉢賢治
主幹兼事業係長 杉山智彦 主幹兼総務係長 大坪淳子
主幹兼調査係長 及川 司 主査 岩本 貴
- 5 本書の執筆は、第4章第2節の弥生土器部分を岩本 貴が行い、他は及川 司が行った。
- 6 本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。
- 7 外部委託については以下のとおりである
- 遺跡測量業務 株式会社フジヤマ
掘削等業務 (平成24年度)株式会社イビソク (平成25年度)国際文化財株式会社
整理作業・保存処理業務委託 株式会社パソナ
- 8 出土した本製品の樹種同定は、東北大陸と受託研究契約を締結し、実施した。
- 9 発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第VII系を用いた国土座標、世界測地系を基準とした。
- 2 調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。
(X = -136,210.000 Y = -35,410.000) = (1, A)
- 3 出土遺物は3桁～4桁の通し番号(TKT001～TKT1097)を付して取り上げた。報告書中の挿図番号とは同一でない。
- 4 遺構図の縮尺は、図ごとに適当な縮尺とし、それぞれにスケールを付した。遺物については、土器・木製品は1/3を原則としたが、杭については1/6とする等、適当な縮尺としたものもある。
- 5 色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』(農林水産省技術会議事務局監修1992)を使用した。
- 6 土層名は第3章第2節の基本土層図(第5図)に表示した名称を用いる。
- 7 第2章の周辺地形図(第2図)・周辺遺跡分布図(第3図)は、国土地理院発行1:25,000地形図「掛川・下平川・島田・相良」を複写し加工・加筆した。
- 8 遺構記号については、以下のように表記した。
溝状遺構…S D　　流路…S R　　小穴遺構…S P　　不明遺構…S X
遺構番号は、遺構ごとに各区分して付している。なお、S R 0 1内の壠状遺構については特に遺構記号・番号は付していない。
- 9 出土遺物の実測図に入れたトーンは、下記の状況を表現している。



目 次

序

例 言

凡 例

第1章 調査に至る経緯 1

第2章 地理的環境・歴史的環境

　第1節 地理的環境 2

　第2節 歴史的環境 2

第3章 調査の方法と経過

　第1節 調査の方法 7

　第2節 基本土層 8

　第3節 調査の経過 9

第4章 調査の成果

　第1節 検出された遺構 11

　　1 上層の遺構 11

　　2 下層の遺構 22

　第2節 出土遺物 31

　　1 上層の出土遺物 31

　　2 下層の出土遺物 53

第5章 まとめ 64

付 編 海戸田遺跡出土木製品の樹種について 69

写真図版

抄 錄

挿図目次

第1章	
第1図 遺跡位置図	1
第2章	
第2図 周辺地形図	3
第3図 周辺遺跡分布図	5
第3章	
第4図 グリッド配置図	7
第5図 基本土層図	8
第4章	
第6図 2・3区遺構全体図	12
第7図 S D O 1 実測図	13
第8図 S D O 2・S D O 3・S D O 4 実測図	
	14
第9図 S D O 6・S D O 7 実測図	15
第10図 S R O 1・堰状遺構実測図	16
第11図 堤状遺構実測図1	18
第12図 堤状遺構実測図2	19
第13図 1区遺構全体図(上層遺構)	20
第14図 S X O 1 実測図	21
第15図 S D O 5 実測図	23
第16図 1区・2区遺構全体図(下層遺構)	
	23
第17図 S D O 8 実測図	24
第18図 S D I 2 実測図	25
第19図 S D I 0 実測図	26
第20図 S D I 1・S D I 3・S X O 2・ S X O 3 実測図	27
第21図 1区中央部分南北土層状況図	28
第22図 1区南西部部分落ち込み部分実測図	
	29
第23図 S X O 4 焼土遺構・土器出土状況図	
	30
第24図 S D O 1 出土遺物実測図1(土器・ 錢貨)	33
第25図 S D O 1 出土遺物実測図2(木製品)	
	35
第26図 S R O 1 出土遺物実測図1(土器)	
	37
第27図 S R O 1 出土遺物実測図2(土器)	
	39
第28図 S R O 1 出土遺物実測図3(木製品)	
	43
第29図 S R O 1 出土遺物実測図4(木製品)	
	44
第30図 S R O 1 出土遺物実測図5(木製品)	
	45
第31図 上層包含層出土遺物実測図1(土器・ 陶磁器)	
	47
第32図 上層包含層出土遺物実測図2(瓦・土 錘・銅製品)	
	49
第33図 S D I 2 及び下層包含層出土遺物 実測図(須恵器・土師器)	
	54
第34図 S D I 0 出土遺物実測図1(弥生土器)	
	56
第35図 S D I 0 出土遺物実測図2(弥生土器)	
	58
第36図 S D I 1・S X O 3・S X O 4・ 下層包含層出土遺物実測図(弥生 土器・縄文土器・石器)	
	61
第5章	
第37図 海戸田遺跡周辺中世初頭期水路配置 想定図	
	65

挿表目次

第2章

第1表	周辺遺跡一覧表	6
第3章		
第2表	発掘調査工程表	9
第4章		
第3表	小穴遺構(S P)計測表	21
第4表	S D 0 1 出土土器・陶磁器破片数一覧表	31
第5表	S D 0 2・0 3・0 4・0 6・0 7 出土土器・陶磁器破片数一覧表	35
第6表	S R 0 1 出土土器・陶磁器破片数一覧表	36
第7表	上層包含層出土土器・陶磁器破片数一覧表	46
第8表	上層遺構・包含層出土遺物観察表1 (土器)	50

第9表	上層遺構・包含層出土遺物観察表2 (土器・陶磁器)	51
第10表	上層遺構・包含層出土遺物観察表3 (土錐・瓦)	51
第11表	上層遺構・包含層出土遺物観察表4 (銭貨・銅製品)	51
第12表	上層遺構・包含層出土遺物観察表5 (木製品)	52
第13表	下層遺構・下層包含層出土遺物観察表1 (土器)	55
第14表	下層遺構・下層包含層出土遺物観察表2 (土器)	63
第15表	下層遺構・下層包含層出土遺物観察表3 (石器)	63

写真図版目次

図版1 (カラー)

- 1 海戸田遺跡遠景(南西より)
- 2 海戸田遺跡遠景(北東より)

図版2 (カラー)

- 1 3区全景(南西より)
- 2 3区S D 0 1 (北東より)

図版3 (カラー)

- 1 3区S D 0 1 土層堆積状況(東より)
- 2 3区完掘状況(西より)

図版4 (カラー)

- 1 2区全景(西より)
- 2 2区S R 0 1 (南東より)

図版5 (カラー)

- 1 2区S R 0 1 墜状遺構(北東より)
- 2 2区S R 0 1 墜状遺構(西より)

図版6 (カラー)

- 1 2区S D 1 0 (西より)

2 1区S D 1 0 (西より)

- 3 1区下層遺構全景(西より)

図版7 (カラー)

- 1 1区全景(南西より)

2 1区S X 0 4 (焼土遺構)(西より)

図版8 (カラー)

- 1 2区S R 0 1 出土山茶碗集合写真

- 2 上層遺構・包含層出土貿易陶磁器(青磁・青白磁・白磁)

- 3 上層遺構・包含層出土国内産陶器(瀬戸美濃・常滑・志戸呂)

図版9

- 1 3区S D 0 1 土器出土状況(北東より)

- 2 3区S D 0 1 漆椀出土状況(北東より)

- 3 3区S D 0 3 土層断面(南より)

- 4 3区S D 0 4 (北東より)

- 5 3区S D 0 6・S D 0 7北側石列(南東より)
- 6 3区S D 0 6・S D 0 7南側石列(北東より)
- 7 2区S R O 1土器出土状況(南西より)
- 8 2区S D 0 5土層(北東より)

図版10

- 1 2区S R O 1壙状遺構の杭列(東より)
- 2 2区S R O 1壙状遺構(北より)
- 3 2区S R O 1壙状遺構(北西より)
- 4 2区S R O 1壙状遺構(1層目)(東より)
- 5 2区S R O 1壙状遺構(2層目)(東より)
- 6 2区S R O 1壙状遺構(2層目)(南より)
- 7 2区S R O 1壙状遺構(3層目)(東より)
- 8 2区S R O 1壙状遺構(3層目)(南より)

図版11

- 1 1区小穴遺構(S P 1 7~1 9)(東より)
- 2 2区S D 1 0遺物出土状況1(北西より)
- 3 2区S D 1 0遺物出土状況2(北西より)

- 4 1区S D 1 0遺物出土状況3(北より)
- 5 1区S X O 1完掘状況(南西より)
- 6 2区S D 1 2遺物出土状況(北西より)
- 7 1区S D 1 3遺物出土状況(北東より)
- 8 1区S X O 3遺物出土状況(南より)

図版12 出土遺物1(山茶碗・錢貨)

図版13 出土遺物2(山茶碗)

図版14 出土遺物3(山茶碗)

図版15 出土遺物4(山茶碗・陶器・土師器・瓦・土鍤・銅製品)

図版16 出土遺物5(漆椀・農具・曲物・板木製品・杭)

図版17 出土遺物6(杭)

図版18 出土遺物7(杭)

図版19 出土遺物8(土師器)

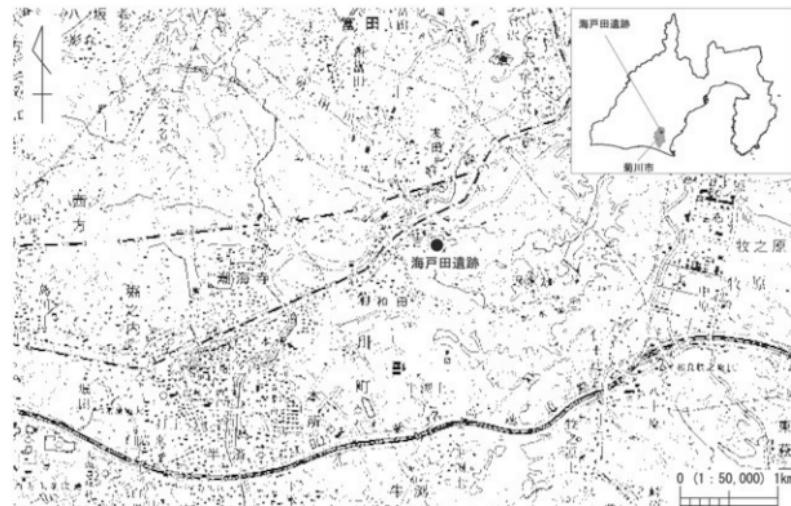
図版20 出土遺物9(弥生土器)

図版21 出土遺物10(弥生土器)

図版22 出土遺物11(弥生土器・縄文土器・石器)

第1章 調査に至る経緯

地方主要道吉田大東線(県道79号線)は、吉田町大幡からJR菊川駅前を通過し、掛川市小貫に至る道路である。平成19年度の県教育委員会文化課(平成22年度より文化財保護課)による開発部局への事業照会において、菊川市吉沢地内の吉田大東線を南側に迂回する工事計画が袋井土木事務所掛川支所から回答された。工事計画路線内には、周知の埋蔵文化財包蔵地である海戸田遺跡が所在していたが、必ずしも遺跡の広がりや性格についてははっきりしていなかった。そのため、試掘確認調査を行ない、その結果を基にその取り扱いを協議することとした。平成21年3月に文化課による試掘確認調査が行われたが、対象区域内に設定された3ヶ所の試掘坑では、わずかな土器片が確認されたのみであった。その後、平成23年1月、文化財保護課による対象区域内の仮設工事の立ち会いを実施するとともに、菊川市教育委員会に依頼し、仮設工事部分の試掘確認調査を行った。工事立ち会いでは、表土下0.25～0.3mで遺物包含層を確認し、菊川市教委の試掘確認調査においても、やはり表土下0.25～0.3mで遺物包含層が確認された。しかし、遺物包含層の広がりは確定できず、畠となっていた西側部分の試掘確認調査も必要とされた。文化財保護課としては、本調査が必要と考え、より細かな確認調査を実施することとし、平成23年6月に対象区域内に8ヶ所の試掘坑を設定して実施した。この確認調査の結果、対象区域の中央部から西側部分にかけては、中世の遺物包含層が広がるとともに、東西に延びる溝状構造を確認、東側部分では、古墳時代の遺物包含層の広がりも確認した。この結果を受けて、袋井土木事務所掛川支所と文化財保護課は協議を行い、平成24・25年度の2か年に亘って、本発掘調査を行うこととし、その実施を静岡県埋蔵文化財センターが行うこととなった。本発掘調査は、調査対象区域を便宜上、東から1区、2区、3区とし、平成24年度は2・3区を、平成25年度は1区を行うこととした。



第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境

海戸田遺跡は、JR菊川駅から東北東2.8km程の菊川市北東部の吉沢地区に所在する。

静岡県中西部に位置する掛川丘陵の栗が岳(標高532m)を源とする菊川は、富田川、沢水加川、西方川、下平川、牛潤川等多くの支流を集めながら、南に向かって流れ、遠州灘へと注ぐ。この菊川の中・下流域の沖積平野に菊川市の市街地が広がる。この沖積平野を廻むように、北には掛川丘陵、東に牧之原台地、西に小笠山丘陵が広がり、それらの丘陵の周辺には、菊川とその支流によって作り出された段丘が所在する。沖積平野部分は、市街地や水田として、段丘上や台地は茶畠や果樹園等、丘陵部は山林等の土地利用がなされてきている。

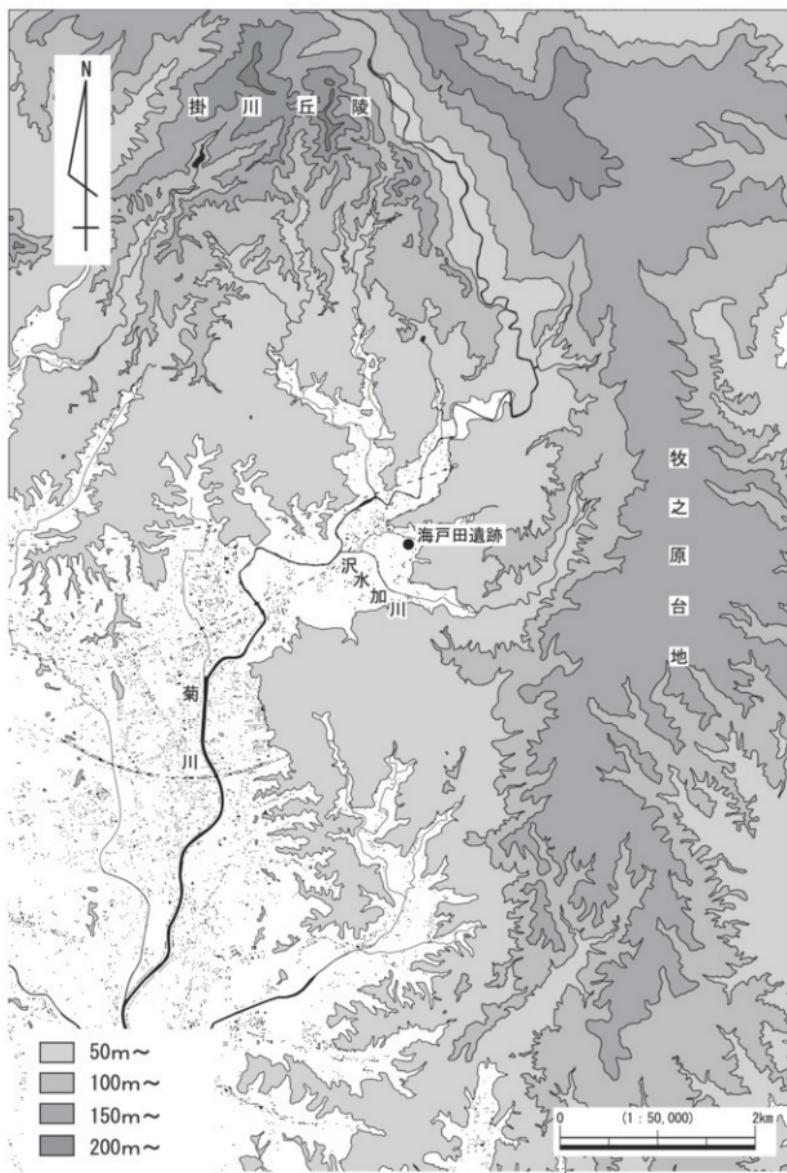
菊川の中流域となる海戸田遺跡が所在する周辺の状況を見てみると、北側には牧之原台地から千駄ヶ原の段丘が延びており、東側には同じく牧之原台地から続く赤谷の段丘が所在する。千駄ヶ原の段丘の南側を沿うように吉沢川が流れ、牧之原台地にその源流をもつ沢水加川が赤谷の段丘の南側を流れるが、これらの川は海戸田遺跡の西方で合流し、その後菊川と合流する。また、沢水加川の南側には、牧之原台地から舌状に長者ヶ原の段丘が東西に延びている。海戸田遺跡は千駄ヶ原と赤谷の丘陵の間の谷口から吉沢川と沢水加川に挟まれた沖積地に広がっているが、現状この付近一帯は水田となっており、周辺の丘陵及び段丘上は、茶畠の景観を呈している。

第2節 歴史的環境

前節でも述べたように、海戸田遺跡は菊川中流域の千駄ヶ原の段丘と赤谷の段丘に挟まれた谷口部分の沖積地に所在するが、周辺には古くから人々の生活の痕跡である遺跡が多く残されている。それらの遺跡の分布状況を概観することにより、海戸田遺跡を取り巻く歴史的環境を述べていくこととする。

縄文時代の遺跡としては、菊川を挟んだ北側の富田地区的丘陵及び段丘上に井上段遺跡(2)、向林遺跡(3)、六反田遺跡(5)、御靈神社遺跡(10)、善福寺遺跡(11)、西原シテト遺跡(14)等が所在する。この中で平成5年河川改良工事により発掘調査された善福寺遺跡では、中期から後期の堅穴住居跡1棟、土坑や溝状遺構が確認されている。海戸田遺跡の北側に延びる千駄ヶ原の段丘上には、秋常段遺跡(6)、千駄ヶ原遺跡(15)、池ヶ谷遺跡(16)、西峯I遺跡(18)、西峯II遺跡(19)、上ノ段遺跡(20)、西福寺遺跡(22)、吉沢段遺跡(23)等が所在する。海戸田遺跡の東側の赤谷の段丘上には、赤谷遺跡(33)、称宜屋敷遺跡(34)が所在する。赤谷遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期の集落であるが、縄文時代の遺物も出土しており、称宜屋敷遺跡では、平成16年度の調査で早期の集石土坑が確認されている。海戸田遺跡の南側に東西に延びる段丘上には、本地域の後・晩期の代表的な遺跡である石畑遺跡(36)がある。昭和57・58年の調査では後期中葉から晩期前半の堅穴住居跡6軒、土坑27基が確認されている。さらに沢水加川を挟んだ南西の低い段丘上には、縄文時代の遺物が採集できる遺跡として、原段遺跡(37)、胡麻塙遺跡(38)が所在する。また、沢水加川の南側に牧之原台地から和田地区に向かって延びる長者原の段丘上には、縄文時代の遺物が散布する上ノ原遺跡(41)が所在する。

弥生時代の遺跡の分布状況をみると、富田地区的丘陵及び段丘上に井上段遺跡(2)、向林遺跡(3)、善



第2図 周辺地形図

福寺遺跡(11)が所在し、沖積地に所在する遺跡として殿前遺跡(13)がある。調査が行われた善福寺遺跡では、弥生時代の堅穴住居跡6、溝状遺構等が確認されている。千駄ヶ原の段丘上では、樽ヶ谷遺跡(17)が所在する。また、赤谷の段丘上には、赤谷遺跡(33)、祢宜屋敷遺跡(34)がある。赤谷遺跡の昭和29年の中学校用地造成の際の発掘調査では、弥生時代後期から古墳時代前期の堅穴住居跡9軒等が検出されている。また、その南西部の農業研修会館の建設に伴う昭和57年の調査では、弥生時代後期から古墳時代前期の堅穴住居跡34軒や掘立柱建物跡5棟等が検出されている。祢宜屋敷遺跡の平成16年のファームボンド建設に伴う発掘調査では、後期の堅穴住居跡11軒等を検出している。また、沢水加川を挟んで海戸田遺跡の南西側に所在する原段遺跡(37)でも弥生時代の遺物が出土している。この時期の遺跡のあり方をみると、菊川右岸部の善福寺遺跡等は比較的低い段丘面に立地し、赤谷遺跡や祢宜屋敷遺跡等は、やや高い段丘上に集落を形成していたと考えられるが、縄文時代の遺跡の数に比べ、その数は少ないものとなっている。この時期の大規模な集落は、菊川ではさらに下流の西方川・上小笠川流域に形成されている。海戸田遺跡周辺のこの時期の遺跡が少ないので、生産の場所である沖積平野の広さも関係しているのであろう。

古墳時代の遺跡の分布をみると、海戸田遺跡周辺の遺跡数はさらに少なくなっている。赤谷遺跡や祢宜屋敷遺跡は一部前期まで続いているが、その後は衰退している。古墳時代後期の遺構が確認された遺跡としては、沢水加川と菊川の合流点の南東部に広がる原段遺跡(37)がある。昭和62年の調査では、後期の堅穴住居跡が5軒検出されている。また、古墳は千駄ヶ原の段丘の先端部に所在する上ノ段古墳(21)、原段遺跡の西側に所在する法明寺古墳(39)、菊川右岸部の潮海寺の段丘先端に所在する下ノ段古墳がある。いずれも円墳と考えられるが、平成20年に道路改良工事のため、墳丘の一部が調査された法明寺古墳は、直径35.5mから36mと推定され、菊川上流域最大級の円墳と考えられている。菊川地域の古墳の分布をみると、下流域にその中心が見られる。地域最古の古墳とされる下平川大塚古墳をはじめ、それに続く菊川市神尾の庚神塚古墳、菊川市高橋の船久保古墳等の前方後円墳が所在する。菊川中流域の前方後円墳としては、菊川市半濟の大徳寺古墳がある。これらの周辺には、古墳時代後半にも古墳群や横穴群が所在する。こうした状況からみると開発の方向は、こうした菊川下流域の広く広がる沖積平野へ向かっていったものと考えられる。

海戸田遺跡周辺の奈良・平安時代の遺跡としては、菊川を挟んだ対岸の沖積平野に広がる堂ノ前遺跡(24)、さらに西方の潮海寺の段丘上に広がる潮海寺門前町遺跡(28)、南側の石畠遺跡(36)等があるが、その状況が明らかにされたものは少ない。石畠遺跡において縄文時代の遺構とともに、奈良・平安時代の堅穴住居跡が確認されているのみである。なお、平安時代の後期になると海戸田遺跡の南方、沢水加川南側の長者ヶ原の段丘南斜面に山茶碗の窯である皿山古窯跡群が大きく操業されはじめめる。

中世段階になると、海戸田遺跡周辺においても、この時期の遺物を出土する遺跡が多くなる。富田地区の丘陵及び段丘上に六反田遺跡(5)、善福寺遺跡(11)、殿前遺跡(13)等が所在する。善福寺遺跡では、中世の掘立柱建物跡7棟が検出されている。千駄ヶ原の段丘上では、千駄ヶ原遺跡(15)、西峯Ⅱ遺跡(19)から中世の遺物が確認されている。菊川を挟んで西の潮海寺の段丘上には、潮海寺の隆盛とともにそれに伴う潮海寺薬師堂跡(25)、潮海寺薬師堂瓦窯跡(26)、潮海寺門前町遺跡(28)等の遺跡が広く展開する。また、潮海寺の段丘下の沖積地に所在する堂ノ前遺跡(24)では、平成12年の調査で、中世の溝状遺構と土器が確認されている。東から南に延びる赤谷の段丘上及びその先の沖積地部分には、後久遺跡(35)、石畠遺跡(36)、原段遺跡(37)、胡麻段遺跡(38)、法明寺古墳(39)等がある。この中で沖積地に所在する後久遺跡では、平成6年の水路工事に伴う調査で、中世の時期の旧路と水田跡を確認している。また、原段遺跡では、平成元年の調査では、中世から近世と考えられる大溝と遺物が確認されている。胡麻段遺跡や法明寺古墳では、中世墓等の遺構を確認している。平安時代後期から操業された山茶碗の窯であ



第3図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	山中遺跡	縄文	35	後久遺跡	中世
2	井上段遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良	36	石畠遺跡	縄文・奈良・平安・中世
3	向林遺跡	縄文・弥生	37	原段遺跡	縄文・弥生・古墳・中世・近世
4	山賊屋敷遺跡	室町・戦国	38	胡麻段遺跡	縄文・中世
5	六反田遺跡	縄文・中世	39	法明寺古墳	古墳・中世・近世
6	秋常段遺跡	縄文・弥生	40	八王子遺跡	中世
7	寺段遺跡	縄文	41	上ノ原遺跡	縄文
8	東峯遺跡	縄文	42	皿山古窯跡群	平安・中世
9	蕨田段遺跡	弥生・中世	43	御免谷古窯跡群	中世
10	御盡神社遺跡	縄文	44	長者屋敷遺跡	中世
11	善福寺遺跡	縄文・弥生・中世	45	長者原遺跡	旧石器
12	富田城跡	室町・戦国	46	仁王辻遺跡	縄文
13	殿前遺跡	弥生・中世	47	山田遺跡	縄文
14	西原シアト原遺跡	縄文	48	仲島遺跡	中世
15	千駄ヶ原遺跡	縄文・中世	49	鳥居塚	中世
16	池ヶ谷遺跡	縄文	50	下本所横穴群B群	古墳
17	柳ヶ谷遺跡	弥生	51	アラコ原遺跡	縄文
18	西峯I遺跡	縄文	52	坊ノ谷古窯跡	中世
19	西峯II遺跡	縄文・中世	53	松木遺跡	縄文
20	上ノ段遺跡	縄文・古墳・平安	54	新井遺跡	古墳
21	上ノ段古墳	古墳	55	古田横穴群	古墳
22	西福寺遺跡	縄文	56	四ツ竹遺跡	弥生・古墳・中世・近世
23	吉沢段遺跡	縄文	57	白坂横穴群	古墳
24	堂ノ前遺跡	奈良・中世	58	下田遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
25	潮海寺薬師堂跡	中世・近世	59	下田横穴群	古墳
26	潮海寺薬師堂瓦窯跡	中世・近世	60	榎下遺跡	奈良・平安・中世
27	堂橋遺跡	縄文・古墳・中世	61	段原遺跡	弥生・平安・中世
28	潮海寺門前町遺跡	弥生・奈良・平安・中世・近世	62	里遺跡	古墳・奈良・平安・中世
29	下ノ段遺跡	弥生	63	神尾原遺跡	縄文
30	下ノ段古墳	古墳	64	行田ヶ谷古窯跡	平安・中世
31	矢田部遺跡	縄文	65	一の坪遺跡	平安・中世
32	海戸田遺跡	今回調査	66	深川横穴群	古墳
33	赤谷遺跡	縄文・弥生・古墳	67	松竹谷遺跡	縄文
34	柿原屋敷遺跡	縄文・弥生			

る皿山古窯跡群(42)は、中世に入ると衰退し、御免谷古窯跡群(43)、坊ノ谷古窯跡(52)等の小規模な窯や他地域へ移動している状況も窺われる。このような中世段階の遺跡の状況をみると、菊川の中流域である海戸田遺跡周辺の沖積平野の土地利用があらためて活発になっていった状況が想定される。

第3章 調査の方法と経過

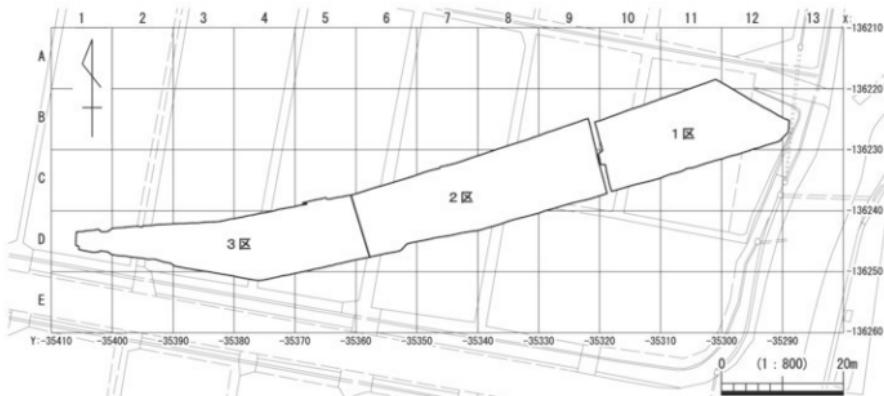
第1節 調査の方法

吉田大東線改良工事に伴う海戸田遺跡の発掘対象範囲は、東西約120m、南北約13.5mとなるが、便宜上3分割して調査を進めることとした。調査区は、東から1区(436m²)、2区(503m²)、3区(374m²)とし、平成24年度に2区・3区の調査を行い、東側の1区は平成25年度に行うこととした。

平成24年度の発掘調査は、入札の結果、掘削業務を株式会社イビソクに、測量業務を株式会社フジヤマに委託して実施した。調査は3区から始め、その排土は調査区内である2区に仮置きした。3区の調査完了後、そこを埋め戻し、2区の排土の仮置き場として、2区の調査を進めた。なお、1区は平成24年度調査の作業ヤードとした。これらの調査は、表土除去を重機により行い、その後人力による包含層掘削・遺構検出・遺構掘削を進めた。また、これらと並行して、調査区への基準杭の設置、個別遺構の実測を最終的にラジコンヘリによる空中写真測量を実施して、1/20の平面図と1/100の全体図を作成した。調査の記録としての写真撮影は、中型カメラ(6×7判)のモノクロネガフィルム及びカラーポジフィルムを基本とし、35mm版小型カメラのカラーポジフィルムを補助としてセンター職員が行った。また、必要に応じて大型カメラ(4×5版)のカラーポジフィルムによる撮影も行った。なお、ラジコンヘリによる空中写真測量時に併せて景観写真的撮影も行っている。現地においては、出土遺物や写真記録類の基礎整理作業も併せて実施している。

平成25年度の発掘調査は、入札の結果、掘削業務を国際文化財株式会社に、測量業務を株式会社フジヤマに委託して実施した。調査は1区を対象とし、前年度調査を完了している2区を排土仮置場、3区部分を作業ヤードとして行われた。調査方法は、平成24年度と同様である。なお、平成25年度は、資料整理の一部を株式会社パソナに委託して実施している。

平成26年度は、資料整理作業と出土遺物の保存処理作業を株式会社パソナに委託して実施した。



第4図 グリッド配置図

第2節 基本土層

確認調査の結果等を基に、調査区の基本土層を次のように把握して、調査を進めた。

第1層…盛土

第2層…田畠耕作土、にぶい黄褐色砂質シルト層である。

第3層…鉄分を含む灰黃褐色(10YR4/2)粘質シルト層である。

第4層…鉄分を少量含む灰黃褐色(10YR4/2)粘質シルト層である。

第5層…鉄分を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルト層である。

第6層…鉄分と部分的に黄色土塊・黒褐色土塊を含む暗褐色(10YR3/3)粘質シルト層である。

第4～6層を、中世の遺物包含層として把握したが、第5層は3区から1区の北側に広がり、第6層は、3区に広がっている。SD01やSR01の遺構はこれらの層の下から検出している。

第7層…鉄分を含む黒褐色(10YR3/2)粘質シルト層である。鉄分の量により分層可能。aは鉄分が多く、bは鉄分が少量含まれる。

第8層…鉄分を含む褐色(10YR4/4)粘質シルト層である。

第9層…鉄分を少量含む暗褐色(10YR3/3)粘質シルト層である。

第10層…褐色土混じりの灰黃褐色(7.5YR5/4)シルト層である。

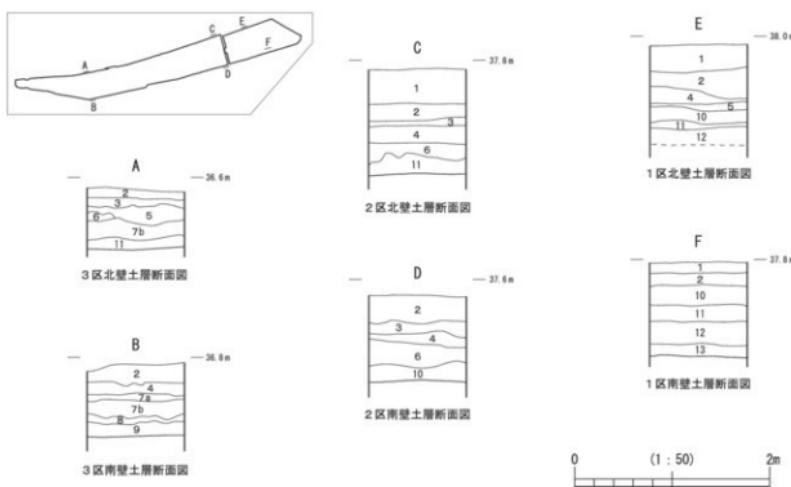
第7～9層は3区部分を中心に広がり、また第10層は1区を中心に広がり、古墳時代から奈良・平安時代の遺物を包含する層である。

第11層…暗褐色土塊及び少量の鉄分を含むにぶい黄褐色(7.5YR5/4)粘質シルト層である。

第12層…黄褐色(7.5YR5/4)粘質シルト層である。

第13層…暗褐色(7.5YR3/3)粘質シルト層である。

第11～13層は無遺物層となり、第13層は1区のみで確認されている。



第5図 基本土層図

第3節 調査の経過

1 平成24年度

3区の調査

7月6日(金)

3区重機による表土除去。

7月9日(月)～8月5日(月)

作業員を導入し、排水溝掘削とともに上層の包含層掘削を進める。

8月6日(火)～8月8日(木)

遺構検出作業を実施し、SD01・SD02・SD03・SD04等の上層遺構を確認。

8月9日(月)～10月1日(月)

SD01等の遺構掘削を進める。

10月2日(火)

上層遺構全体の空中写真撮影及び空中写真測量を実施。

10月9日(火)・10月10日(水)

下層の包含層掘削を行い、SD05を検出。遺構掘削を行い、その後実測作業を実施。

10月12日(金)・10月15日(月)

3区の埋め戻しを行う。

2区の調査

10月15日(月)・10月16日(火)

2区重機による表土除去。

10月22日(月)～11月21日(水)

排水溝掘削と合わせ、上層の包含層掘削を実施する。試掘調査時の試掘坑を再掘削とともにトレンチを設定し、掘削する。

11月22日(木)～11月30日(金)

SD01・SD05・SD06・SD07等の遺構を検出、遺構掘削を進め、SD06の実測を行う。

12月3日(月)～12月5日(水)

SD06・SD07を含む包含層を掘削する。

12月17日(月)～12月26日(水)

自然流路(SR01)を検出、壌状遺構の一部を確認。壌状遺構の状況を見ながら、SR01の遺構掘削を行う。

1月7日(月)～1月29日(火)

SR01の遺構掘削を進めながら、並行してSD01及びSD05の遺構検出、遺構掘削を行う。

2月5日(火)～3月12日(火)

下層の包含層を掘り進め、SD08・SD10を検出。それぞれの遺構掘削を進めるとともに、SD10の遺物出土状況を記録。並行してSR01の壌状遺構の検出と解体を進める。

第2表 発掘調査工程表

作業工程	平成24年度				平成25年度				平成26年度			
	4月	5月	6月	7月	4月	5月	6月	7月	4月	5月	6月	7月
地盤調査	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
【3区】	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
表土削除	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
包含層削除	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
遺構検出	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
遺構削除	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
測量・遺構実測	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
【2区】	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
表土削除	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
包含層削除	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
遺構検出	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
遺構削除	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
測量・遺構実測	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
【1区】	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
表土削除	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
包含層削除	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
遺構検出	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
遺構削除	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
測量・遺構実測	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
資料整理	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
報告書作成	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
出土遺物保存処理	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

3月13日(水) 2区の全景写真撮影、完掘状況の空中写真測量を実施。

3月15日(金)・3月16日(土) 重機による埋め戻し。

なお、現地作業と並行して、遺物水洗・注記等の基礎整理作業を実施した。

2 平成25年度

1区の調査

8月7日(水)・8月8日(木) 重機による表土除去作業。

8月19日(月)～8月30日(金) 排水溝掘削及び上層の包含層掘削。

9月3日(火)・9月4日(水) 上層の遺構、小穴及びS X 0 1を検出し、遺構掘削作業を進め、個別実測を行う。

9月6日(金)～9月13日(金) 下層の包含層掘削。

9月17日(火)～10月2日(水) 遺構検出を行い、S D 1 0 の続き、S D 1 1・S D 1 3等の遺構を確認、遺構掘削を進めるとともに、個別実測を行う。

10月3日(木)～10月10日(木) 南西部の落ち込み部分の調査を進め、焼土遺構を含むS X 0 4等を検出、遺構掘削、遺構実測を進める。

10月18日(金) 完掘状況の空中写真撮影、空中写真測量を実施。

10月22日(火)・10月23日(水) 重機により埋め戻し。

このあと、静岡県埋蔵文化財センターにて平成25年11月から平成26年3月に資料整理作業を一部実施した。

3 平成26年度

静岡県埋蔵文化財センターにて、資料整理作業・報告書刊行作業、木製品等の保存処理作業を進めた。



写真1 包含層掘削作業（3区）



写真2 遺構検出作業（2区）



写真3 遺構掘削作業（2区 S R O 1）



写真4 資料整理（土器接合）

第4章 調査の成果

第1節 検出された遺構

1 上層の遺構

(1) 遺構の検出状況

今回の調査では、上層の遺物包含層である基本土層の第4層(鉄分を少量含む灰黄褐色粘質シルト層)・第5層(鉄分を含むにぶい黄褐色粘質シルト層)・第6層(鉄分と部分的に黄色土塊・黒褐色土塊を含む暗褐色粘質シルト層)下から検出された遺構を上層遺構とした。3区の調査では、SD01、SD02、SD03、SD04等の溝状遺構を検出している。また、2区の調査では、西端部に3区から続くSD01を、中央部には南北に延びる自然流路と考えられるSR01を検出した。SR01内には杭列と丸太の横木、細かい枝木によって構築された遺構を検出している。なお、SR01の東側に石列を伴う溝状遺構であるSD06・SD07を検出した。2区東端部から1区にかけて北東方向に向かって徐々に高くなっているが、径0.2~0.5mの小穴遺構(SP)を検出した。これら的小穴遺構の一部は、下層の遺物包含層を外した段階で検出したものもあるが、その形状や埋土の状況から上層の遺構と考え、まとめて記述している。以下、各遺構の状況について述べていく。

(2) 各遺構の状況

SD01 3区D2グリッド南半部から2区D7グリッド南半部に上層の遺物包含層である暗褐色粘質シルト層(基本土層6層)下より検出された東西に延びる溝状遺構である。延長60m程を確認したが、それぞれの先は調査区外に延びている。幅3.0~3.6m、検出面からの深さは0.8~1.0mを測るしっかりとした溝である。断面形状は、底部が平底を呈する逆台形に近い形を呈している。土層は、基本的に上層から①鉄分を少量含む黒褐色粘質シルト②灰黄褐色粘質シルト③鉄分・黄色土塊を含む黒褐色粘質シルト④褐色粘質シルト⑤白色土塊・細礫を含む黒褐色砂質シルト⑥黒褐色粘質シルト⑦褐色砂質シルト⑧褐色砂(最下層に1cm以下の礫を含む)となっている。底部に砂が認められることから、この溝には、水が流れていたものと考えられる。また、底部のレベルは、東から西に向かって、わずかではあるが、低くなっている。

SD01内からは、山茶碗、陶磁器、灰釉陶器、土師器、須恵器、漆椀、曲物の一部、農具と考えられる木製部材、板材、錢貨など多くの遺物が出土している他、下層の遺物包含層から混入したと考えられる古墳時代の土師器や弥生土器が見られる。弥生土器の中には、完形に近いものもあり、単純にその時期の遺物包含層と考えるより、今回の調査では確認することができなかったが、下層にその時期の遺構があったのかもしれない。出土遺物の主体をなすものは、山茶碗であり、その特徴から東遠の窯(皿山古窯跡か?)の製品と考えられるものである。時期的には、12世紀末から13世紀初頭と考えられるものが、下層から出土しており、SD01もその時期に構築されたものと考えられる。

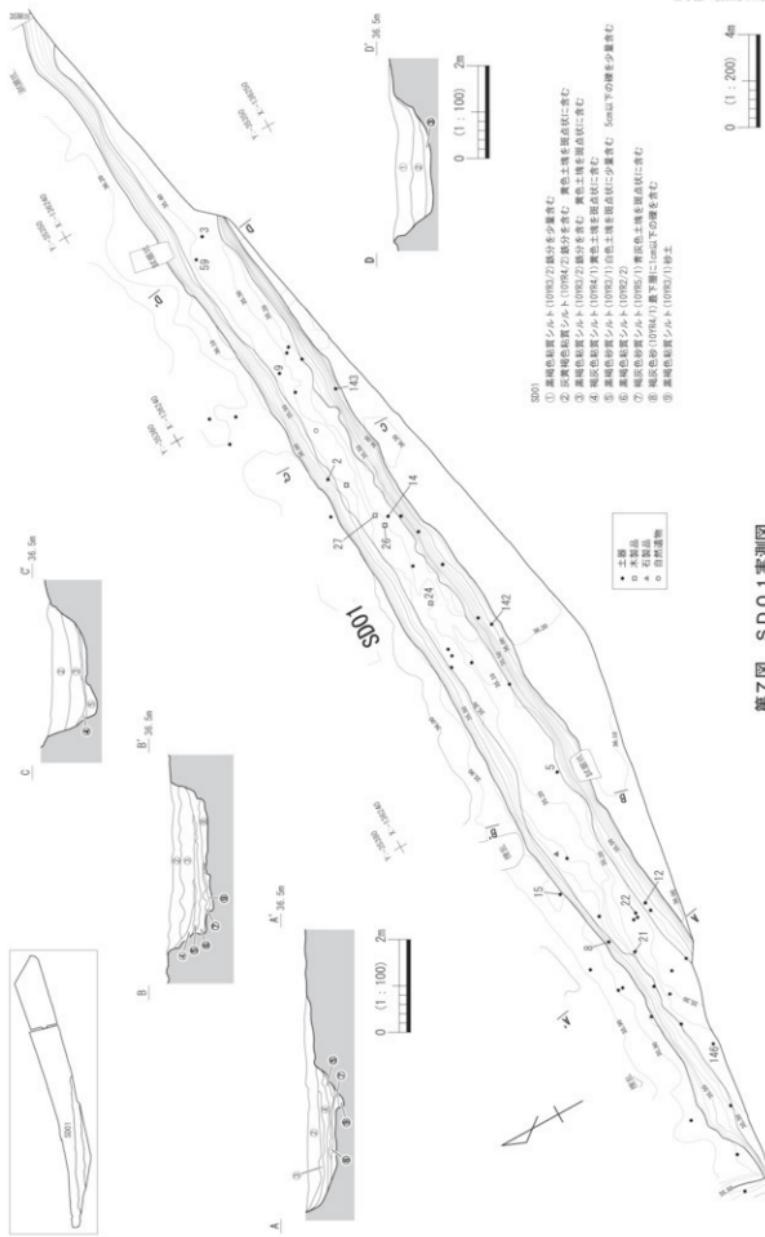
SD01は、前述のように土層の状況、底部に砂が見られることから、水が流れていたと考えられ、また、幅3mというその規模やしっかりとした構造から、この一帯に水を配水する基幹的水路ではないかと考えられる。

SD02 3区D2グリッド西半部に確認された南北に延びる溝状遺構である。調査区北壁付近での幅3.5m、南壁付近での幅5.7m、深さ0.1mと検出された範囲で、平面台形を呈する幅の広い非常に浅い溝状遺構である。覆土は灰黄褐色砂質シルトの1層であり、SD01を切る形となっており、SD01よ

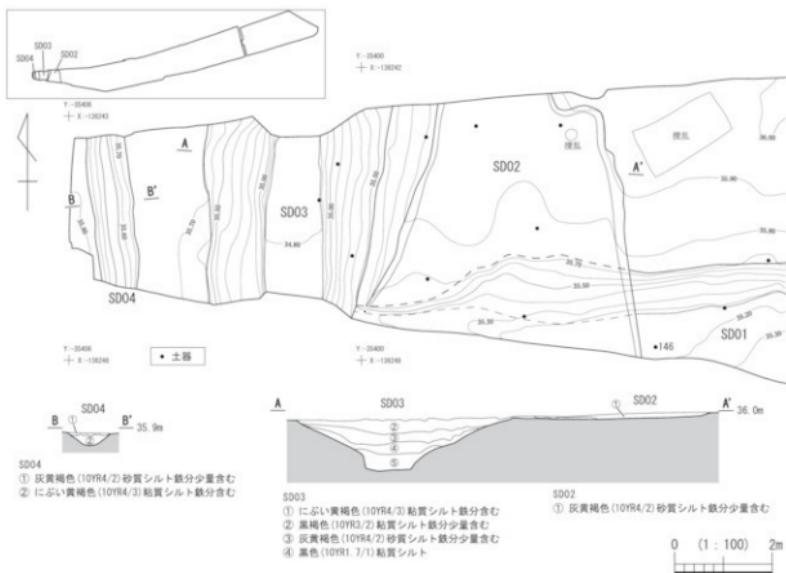


第6図 2・3区遺構全体図

第1節 採出された遺物



第7図 SD01実測図

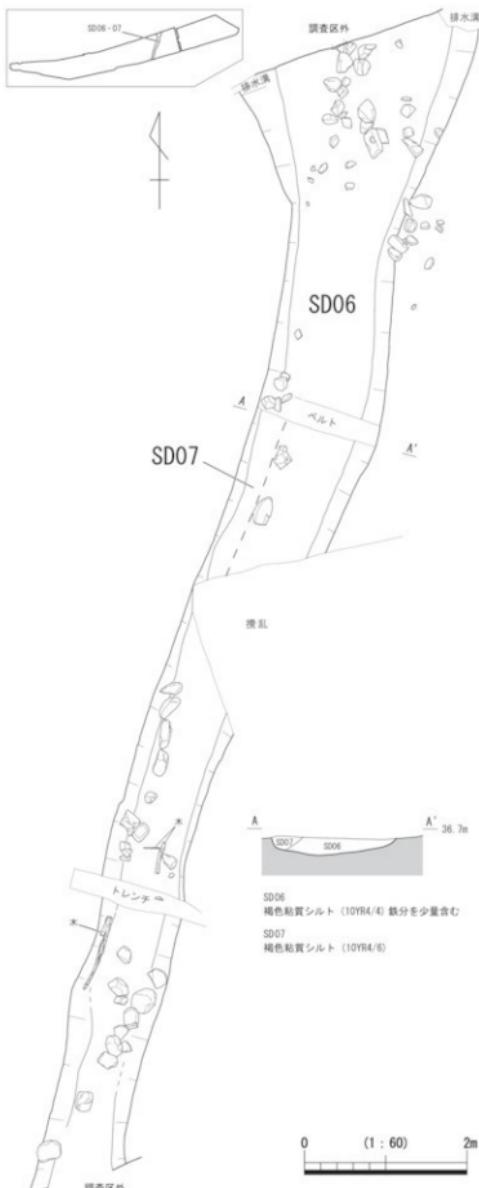


第8図 SDO2・SDO3・SDO4実測図

り新しい時期のものと考えられる。いずれも小破片ではあるが、東遠型の山茶碗、土師器、叩き目のある須恵器等の腹部片が出土している。その性格は不明である。

S D O 3 3区D1 グリッド東半部に検出された南北方向に延びる溝状遺構である。検出面での幅は、調査区北壁付近で3.7m、南壁付近で3.0mを測る。深さは検出面から1.0mを測る。底部は箱型に掘り込まれ、その後直線的に開き、断面形は逆台形に近い形を呈する。覆土は、上層から①にぶい黄褐色粘質シルト②黒褐色粘質シルト③灰黄褐色砂質シルト④黒色粘質シルトとなっており、自然堆積の状況を呈する。出土遺物は、いずれも小破片であるが、山茶碗、かわらけ、土師器(伊勢鍋と考えられるものも含む)等とともに、流れ込みと考えられる土師器球胴甌片や高坏片、縄文土器片等も出土している。その位置関係は、ほぼ直角に交わるものとなっている。調査区外のため、明確には確認することはできなかったが、調査段階では S D O 1 に切られる形となっており、時期的には、S D O 1 よりやや古い時期、12世紀末頃のものと考えられるが、それほど違わない時期と考えられる。全体としてしっかり掘り込まれた溝であり、S D O 1 と同様の水路の性格をもつ溝であると考えられるとともに、その位置関係から、ある段階では、S D O 1 の支線的なものであった可能性も考えられる。

S D O 4 3区D1グリッド、SD03の西側に検出された溝状遺構である。SD03とはわずかに方向を逆えており、北に向かってやや開く形となっている。検出面での幅は0.8~0.9m、深さは0.25mを測る。底部は丸底を呈し、断面形状は半円形を呈する。覆土は、①灰黄褐色砂質シルト②にぶい黄褐色粘質シルトとなっている。覆土中から、山茶碗の小破片などが出土しており、時期的にはSD03等と同時期と考えられるが、その新旧関係は不明である。この溝の性格は、SD03等と比べ小規模なことから、水路というよりは、ある意味での区画溝ではないかと考えられる。

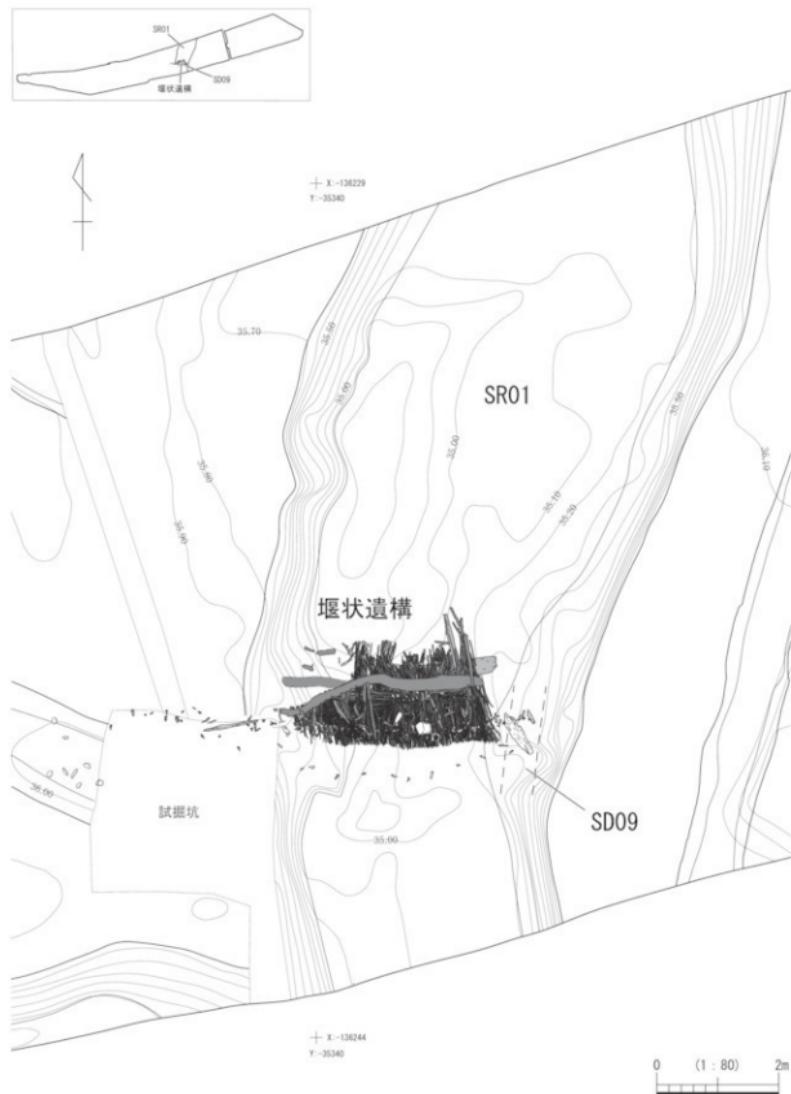


第9図 SD06・SD07実測図

SD06・07 2区B8グリッド
南西隅からD8グリッド中央北部に南南西から北北東へとわずかに屈曲して延びる溝状遺構であり、中世の遺物包含層と考えた層の途中で検出されている。SD07は、SD06がある程度埋まった段階で、SD07に沿うように掘られた溝状遺構である。SD06は、南壁部分での幅0.95m、北壁部分では幅3.0mを測る。北に向かって徐々に幅を広げ、北壁部分で大きく開く形の平面形を呈する。深さは0.2mと浅い溝であり、底部は緩やかな丸底となる。

SD06の西側にSD07が確認されたわけであるが、土層断面からの確認であり、その平面プランは必ずしも明確ではない。土層断面から測った幅は0.35m、深さ0.15mと細い溝となっている。SD06の覆土は、褐色粘質シルトであり、鉄分を少量含む。SD07の覆土は、SD06と同様の褐色粘質シルトであるが、鉄分は含まない。SD06の覆土中からは、叩き目のある須恵器甕や茶碗の細片が出土している。SD06・SD07には、15～25cm大の河原石が一部並ぶ形で検出されており、またSD06の西側部分に木杭がまばらに検出されているが、その性格は明確ではなく、あるいは土留め等の機能をもつものと考えられる。こうした石列や木杭は、SD06に伴うものもあると考えられるが、SD07に伴うものもあると考えられ、明確ではない。

SD06・SD07の性格であるが、石列を伴う点等を考慮した場合、あるいは何らかの区画溝かと考えられる。時期的には、その検出層位からSR01やSD01等よりも新しい時期のものと考えられる。

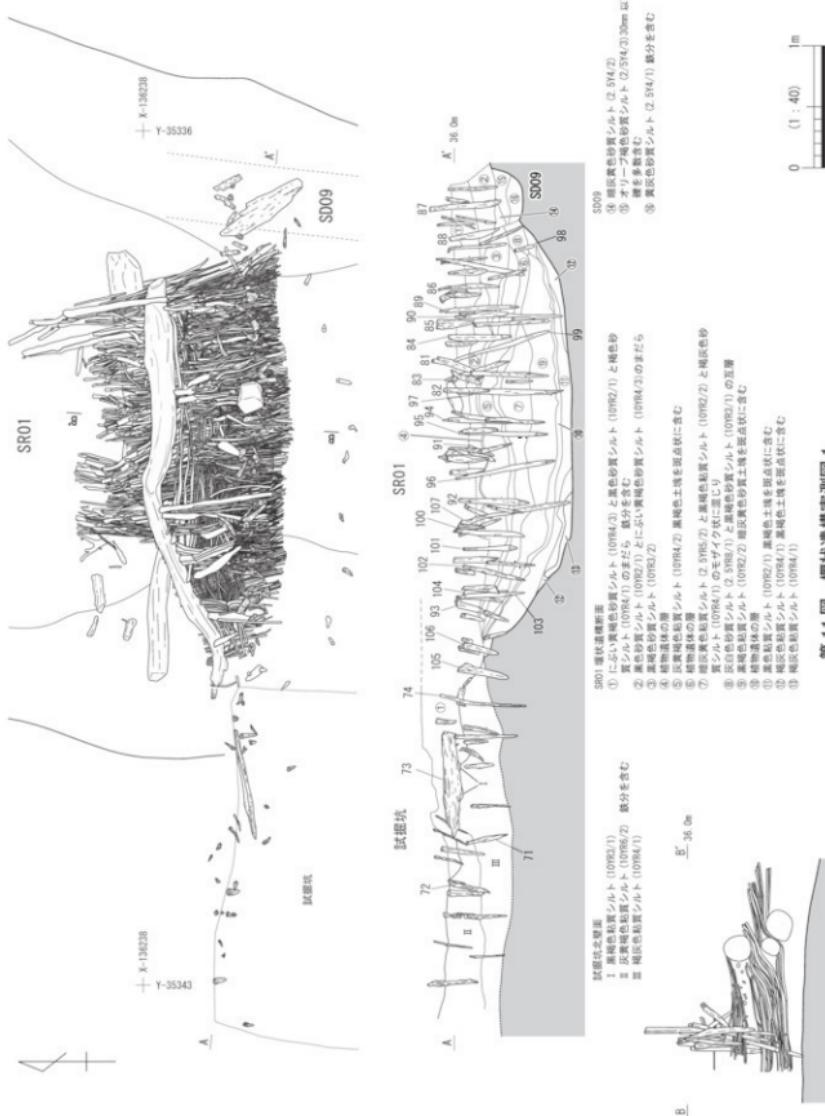


第10図 SR01・堰状遺構実測図

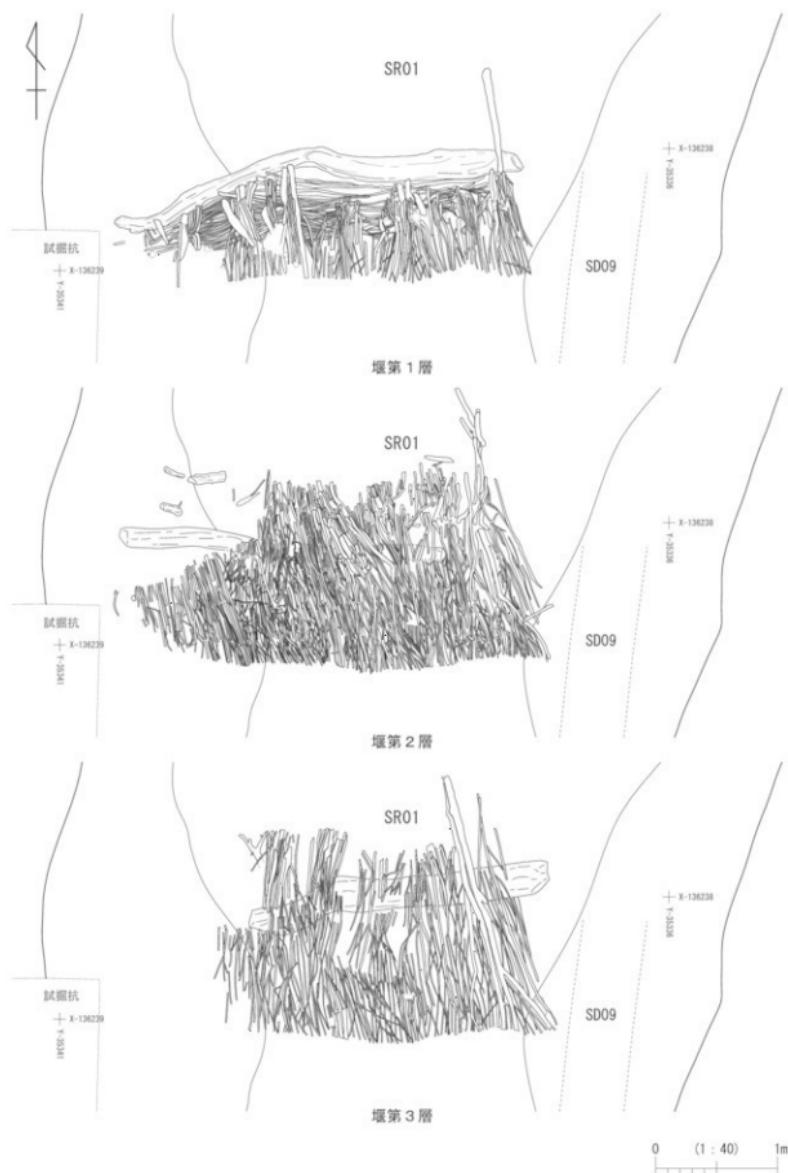
S R O 1 2区中央部のC・D 8グリッドに検出された南北に延びる自然流路である。平面プランは、途中で緩やかに東に振れる形であり、北側に広がる形となっている。調査区北側部分での幅は6.4m、オーバーフローする部分の幅は約11mを測る。南側部分の幅は4.8mである。深さは北側部分で1.2m、南側部分で1.1mと後述する堰状遺構の北と南ではわずかに北が深くなる。底部は礫層となり、底部近くには、砂利が堆積している部分も見られた。S R O 1の断面形は、そこが丸底を呈する半円形を呈する。深さ等から考えて、南から北に向かって流れる流路と考えられる。このS R O 1からは豊富な遺物が出土しており、山茶碗・叩き目のある須恵器甕、陶磁器、灰釉陶器等がある。特に川底近くから完形の山茶碗が多く出土している。遺物の主体をなすのは山茶碗であるが、それらはS D O 1出土のものよりやや古い様相を示すものも含まれ、12世紀後半から13世紀前半の年代が考えられる。このS R O 1は、古代から中世の時期にこの一帯に形成された小河川であり、北に向かって流れ、現在の吉沢川に合流するものかと考えられる。前述のようにS R O 1の川底近くからは、完形の山茶碗が多く出土しているが、単に廃棄されたものか、あるいは何らかの意図をもってそこに投げ込まれたものか定かではない。後述する堰状遺構や前述のS D O 1等を考え合わせると、水利等と関係する祭祀かもしれない。

堰状遺構 その検出状況をまとめてみると、当初はS R O 1を横断する形で杭列を検出している。この杭列は西の試掘坑部分にも延びていた。杭列の北側には径25cm程の丸太が横倒しになっており、その上に細かな枝木が被さる状態であった。また、木杭列の南側には、木の葉が大量に重なり合って埋まっていた。これらの枝木や木の葉については、調査時に流木や流れ込んだものと判断して、その一部については除去した。その後枝木は重層的であり、杭列はこれらの枝木に打ち込まれていると判断された。構造的には、枝木の層を3層確認することができた。現地では、堰あるいは築の遺構ではないかと想定され、当センター発行の考古通信等では、築遺構であるとの見解で報告した。しかし、後述する理由から築ではなく、堰であると考え、堰状遺構として記載する。

次に、堰状遺構の構造について見ていくこととする。前述するようにS R O 1を横切る形で径10cm程の杭が2列に打たれ、一部は西側の試掘坑部分まで延びている。杭列前方(南側)には、木の葉が集中していたが、この遺構に伴うものか、流れ込んで溜まったものははっきりしない。また杭列の後方には、丸太の横木と細かい枝木を並べたものが、間に土を挟む形で3層認められた。上から第1層とするが、第1層は径15~25cm、長さ3.4m程の丸太を横にし、細かい枝木を一部横木と平行に置き、その上に横木と直行する形に幅3.2m程に並べている。第1層と第2層の間には、黒褐色土塊を斑点上に含む灰黄褐色シルト質土がある。第2層目は、やはり径18cm、長さ2.7m程の丸太を横木とし、それを枕にするように細かい枝木を直交する方向で幅3.2m程並べている。枝木は元を北側にする形で、枝先を南側にするように並べられている。第2層と第3層との間には、暗灰黄色粘質シルトと黒褐色粘質シルト、褐灰色砂質シルトがモザイク状に混じる層と暗黄灰色砂質土塊が斑点状に混じる黒褐色粘質シルト層が挟まれている。第3層についても、径23cm、長さ2.4m程の丸太を横木とし、それを枕とするように細かい枝木を幅2.6mの範囲に並べている。これらの枝木の層は、横木を枕にする形の分、北側が高くなつておらず、流れに対して斜めとなっている。また、北側の杭列であるが、これらの枝木の層を突きぬく形で打ち込まれており、これらの枝木の層が構築されたのちに打ち込まれたものと考えられる。なお、枝木については特に蔓や縄状のもので編まれているという状況は確認されていない。これらの構築物について、3層あることから3時期にわたって構築されたというより、間の土層も含めて1度に構築されたものではないかと考えられる。堤や堰等を強固に構築する工法として、細かい枝木や木の葉等と土を交互に積み重ねて盛土していく「敷葉工法」という古くからの工法があるが、今回発見された構築物が一体のものであると考えれば、この「敷葉工法」が使われていると考えられる。この構築物が、川の流れを堰き止めて、その水位をコントロールするための堰と考えた場合、流れに対して強固なものにするため、



第11回 墓状遺構実測図 1



第12図 塙状遺構実測図2

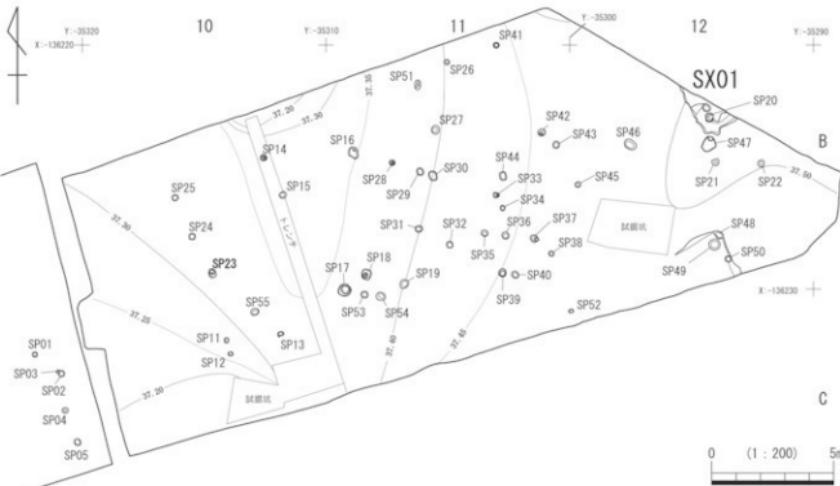
渡来人がもたらしたとされるこの伝統工法がとられたものと考えられる。

なお、当初検討した築という可能性については、以下の観点から、はずすこととした。

- ・ S R O 1 自体、それほど大きな河川ではなく、流れもそれほど速いものではなかったと考えられ、そうした小河川を全面的に塞ぎ、築を構築することは考えられず、流れをコントロールして魚を誘導する施設も見られない。
- ・ この遺構を築とした場合、少なくとも3時期全く同じ箇所に間の堆積土を除去することもなく、新たな築を構築したことになり、築を通して水が流れにくい状況となる。
- ・ S R O 1 の南西に延びる S D O 1 を水路と考えた場合、その位置関係から見て、この S R O 1 から取水していた可能性は高く、この構築物は取水のための水位調節を行う堰と考えた方の妥当性が高い。

今回この堰とした構築物に用いられた材は、残念ながら加工痕のある杭のみしか取上げておらず、枝木や木の葉については、サンプリングしてこなかった。そのため、樹種同定を行ったのは、杭のみであるが、その結果は極めて興味深いものとなっている。このような構築物を構築する際は、ある程度材を選別しているのではないかと考えたが、結果は多種多様の材を使っていることが判明した。詳細については、付編の東北大学植物園鈴木三男先生の樹種同定報告を見ていただきたいが、同定された樹種は集落近くの雜木林を構成するものであり、そうした場所からさまざまな木々を伐採して、この堰状遺構の構築材としたと考えられる。このような状況から考えると、海戸田遺跡で確認された S D O 1 やこの堰状遺構等の水利施設の建設は、大規模に行われたというよりは、この一帯の開発集団によるものと考えられる。海戸田遺跡の上層の包含層からは、古代末から中世の遺物が豊富に出土しており、その中に青磁等の貿易陶磁もある。そのことから考えると、周辺にそうした集落等が展開するのかもしれない。

S D O 9 S R O 1 の堰状遺構が構築された後に東側法面部分に掘り込まれた溝状遺構である。幅0.5m、深さ0.2mを測るが、あくまでも土層断面で確認されたものであり、独立するものか、あるいは堰状遺構に伴うものなのか、不明である。



第13図 1区遺構全体図（上層遺構）

S X O 1 1区B12グリッド北側、調査区端で、中世の遺物包含層である基本土層第5層を掘り下げた段階に検出された遺構。その大半が調査区外に広がっており、全容は明確ではないが、検出された部分から平面方形を呈するものと考えられる。覆土は暗褐色シルトと黄褐色シルトが混じったものであり、炭化物がブロック状に混入する。検出された範囲では、特に床面状を呈する状況は見られず、壁際がやや深くなっていた。一部に中世の小穴遺構(S P 2 0)が掘り込まれている。覆土中から山茶碗・弥生土器の小破片が出土している。中世段階の遺構と考えられる。



第14図 S X O 1実測図

第3表 小穴遺構(S P)計測表

No.	遺構名	網目	調査区	グリッド	種類	層位	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形状	覆土	備考
1	S P 0 1	第13回	2区	C 9	第9層下	0.22	0.22	0.13	円形			
2	S P 0 2	第13回	2区	C 9	第9層下	0.22	0.22	0.13	円形			
3	S P 0 3	第13回	2区	C 9	第9層下	0.16	0.14	0.05	楕円形			S P 0 2に切られ心
4	S P 0 4	第13回	2区	C 9	第9層下	0.26	0.22	0.14	楕円形			
5	S P 0 5	第13回	2区	C 9	第9層下	0.28	0.25	0.07	楕円形			
6	S P 1 1	第13回	1区	C 20	第5層下	0.22	0.21	0.08	円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・炭化物混じり		
7	S P 1 2	第13回	1区	C 20	第5層下	0.2	0.17	0.23	楕円形	暗褐色シルト質上、黒灰色・縦縫い部分が上層	山茶碗・土陣器片	
8	S P 1 3	第13回	1区	C 20	第5層下	0.25	0.17	0.32	タガメ形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・炭化物混じり		
9	S P 1 4	第13回	1区	B 30	第5層下	0.28	0.25	0.23	楕円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・炭化物混じり		
10	S P 1 5	第13回	1区	B 30	第5層下	0.3	0.28	0.47	楕円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・炭化物混じり		
11	S P 1 6	第13回	1区	B 31	第5層下	0.5	0.4	0.16	楕円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・炭化物混じり		
12	S P 1 7	第13回	1区	B + C 11	第5層下	0.52	0.49	0.44	楕円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・炭化物混じり		
13	S P 1 8	第13回	1区	B 11	第5層下	0.42	0.39	0.23	扇丸形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・炭化物混じり		
14	S P 1 9	第13回	1区	B 11	第5層下	0.4	0.35	0.16	楕円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・炭化物混じり		
15	S P 2 0	第13回	1区	B 12	第5層下	0.37	0.33	0.32	扇形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・炭化物混じり		
16	S P 2 1	第13回	1区	B 12	第5層下	0.3	0.29	0.24	円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・炭化物混じり		
17	S P 2 2	第13回	1区	B 12	第5層下	0.29	0.26	0.13	楕円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・炭化物混じり		
18	S P 2 3	第13回	1区	B 10	第10層下	0.38	0.3	0.35	楕円形	暗褐色シルト質上、褐色土・泥じり		
19	S P 2 4	第13回	1区	B 10	第10層下	0.27	0.25	0.21	楕円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・泥じり		
20	S P 2 5	第13回	1区	B 10	第10層下	0.25	0.25	0.21	円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・泥じり		
21	S P 2 6	第13回	1区	B 12	第10層下	0.23	0.21	0.22	楕円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・泥じり		
22	S P 2 7	第13回	1区	B 11	第10層下	0.35	0.32	0.21	楕円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・泥じり		
23	S P 2 8	第13回	1区	B 11	第10層下	0.24	0.22	0.24	楕円形	暗褐色シルト質上、黒褐色シルト質上		
24	S P 2 9	第13回	1区	B 11	第10層下	0.32	0.28	0.12	楕円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・泥じり		
25	S P 2 0	第13回	1区	B 11	第10層下	0.42	0.33	0.16	楕円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・泥じり		
26	S P 3 1	第13回	2区	B 11	第10層下	0.3	0.28	0.09	円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・泥じり		
27	S P 3 2	第13回	2区	B 11	第10層下	0.26	0.25	0.09	楕円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・泥じり		
28	S P 3 3	第13回	2区	B 11	第10層下	0.28	0.25	0.17	円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・泥じり		
29	S P 3 4	第13回	2区	B 11	第10層下	0.23	0.2	0.14	楕円形	暗褐色シルト質上、褐色土・炭化物混じり		
30	S P 3 5	第13回	2区	B 11	第10層下	0.29	0.26	0.16	楕円形	暗褐色シルト質上、褐色土・炭化物混じり		
31	S P 3 6	第13回	2区	B 11	第10層下	0.3	0.28	0.21	円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・泥じり		
32	S P 3 7	第13回	2区	B 11	第10層下	0.35	0.3	0.21	楕円形	暗褐色シルト質上、黒褐色シルト質上		
33	S P 3 8	第13回	2区	B 11	第10層下	0.23	0.2	0.2	楕円形	暗褐色シルト質上、土質背景色ブロッケ風じり		
34	S P 3 9	第13回	2区	B 11	第10層下	0.32	0.3	0.22	円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・泥じり		
35	S P 4 0	第13回	1区	B 11	第10層下	0.3	0.26	0.2	楕円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・泥じり		
36	S P 4 1	第13回	1区	B 11	第10層下	0.25	0.23	0.12	楕円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・泥じり		
37	S P 4 2	第13回	1区	B 11	第10層下	0.3	0.3	0.29	円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・泥じり		弥生土器片
38	S P 4 3	第13回	1区	B 11	第10層下	0.3	0.28	0.2	円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・泥じり		弥生土器片
39	S P 4 4	第13回	1区	B 11	第10層下	0.34	0.27	0.16	扇丸形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・泥じり		弥生土器片
40	S P 4 5	第13回	1区	B 12	第10層下	0.25	0.22	0.12	楕円形	暗褐色シルト質上、F褐色鉢色土・泥じり		弥生土器片
41	S P 4 6	第13回	1区	B 12	第10層下	0.26	0.38	0.09	楕円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・泥じり		弥生土器片
42	S P 4 7	第13回	1区	B 12	第10層下	0.65	0.6	0.13	楕円形	暗褐色シルト質上、土質背景色ブロッケ風じり		
43	S P 4 8	第13回	1区	B 12	第10層下	0.4	0.27	0.16	楕円形	暗褐色シルト質上、褐色土・泥じり		
44	S P 4 9	第13回	1区	B 12	第10層下	0.47	0.44	0.17	円形	暗褐色シルト質上、褐色土・泥じり		
45	S P 5 0	第13回	1区	B 12	第10層下	0.25	0.25	0.11	円形	暗褐色シルト質上、褐色土・泥じり		
46	S P 5 1	第13回	1区	B 11	第10層下	0.39	0.24	0.26	楕円形	暗褐色シルト質上		
47	S P 5 2	第13回	1区	C 12	第10層下	0.2	0.16	0.06	楕円形	暗褐色シルト質上、黃褐色鉢色土・泥じり		
48	S P 5 3	第13回	1区	C 11	第10層下	0.3	0.28	0.09	楕円形	暗褐色シルト質上、褐色土・黄褐色土・泥じり		
49	S P 5 4	第13回	1区	C 11	第10層下	0.4	0.33	0.3	楕円形	暗褐色シルト質上、褐色土・黄褐色土・泥じり		
50	S P 5 5	第13回	1区	C 10	第10層下	0.31	0.26	0.19	楕円形	暗褐色シルト質上、黄褐色土・泥じり		

小穴遺構(S P 0 1～S P 0 5、S P 1 1～S P 5 5)

径0.2～0.5mの平面プランが円形ないしは梢円形の穴を小穴遺構(S P)としてまとめた。これらは2区東側のC 9グリッド東側で検出されたS P 0 1～S P 0 5の他、主として1区のやや高くなった微高地上に検出されている。2区で検出されているS P 0 1～S P 0 5については、下層の包含層である暗褐色粘質シルト層(第9層)を掘削した段階で、検出しているが、形状等から1区の小穴遺構と同様、上層遺構を下層の段階で、確認したものと考えた。1区のものを見ると、B 11グリッド付近にやや集中している状況が窺われる。1区の小穴遺構で、中世の包含層と考えた鉄分を含むにぶい黄褐色粘質シルト層(第5層)を除去した段階で検出されたのが、S P 1 1～S P 2 2の11基である。S P 2 3～S P 5 5は、褐色混じりの灰黄褐色シルト層(第10層)を除去した段階で検出している。1区の中世の包含層下は、後世の耕作痕により、遺構を検出するのが難しい状況であった。そのため、S P 2 3～S P 5 5については、下層の包含層を外した段階で確認できた状況であった。これらの小穴遺構の埋土は、基本的には暗褐色シルト質土に黄褐色土ないしは褐色土が混入し、一部のものには炭化物の混入も認められる。また、これら的小穴遺構には、山茶碗、土師器、弥生土器の細片が出土しているものもある。弥生土器片については、付近の包含層からの混入と考えられる。これらの小穴遺構について、多少大きさにばらつきもあるが、微高地部分に広がるものは、あるいは建物の柱穴と考えたい。しかしながら、建物としてまとまるものはなかった。時期的には山茶碗の細片が混入している点から中世段階のものと考える。個々の状況については、第3表にまとめたので参照していただきたい。

2 下層の遺構

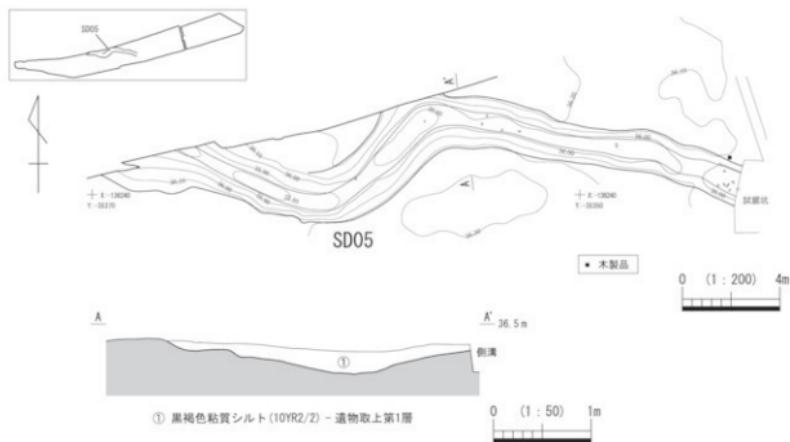
(1) 遺構の検出状況

古墳時代から奈良・平安時代の遺物包含層と考えた第7層(鉄分を含む黒褐色粘質シルト層)、第8層(鉄分を含む褐色粘質シルト層)、第9層(鉄分を少量含む暗褐色粘質シルト層)、第10層(褐色土混じりの灰黄褐色シルト層)の下から検出された遺構であり、小穴遺構を除くS D 0 5、S D 0 8、S D 1 0、S D 1 1、S D 1 2、S D 1 3等の溝状遺構、S X 0 2、S X 0 3、S X 0 4等がある。主として2区から1区にかけて検出されている。なお、これらの遺構のうち、出土した遺物等から、S D 0 5は、古墳時代、S D 0 8、S D 1 2は奈良・平安時代のものと考え、他のS D 1 0、S D 1 1、S D 1 3、S X 0 2、S X 0 3、S X 0 4は弥生時代のものと考えた。

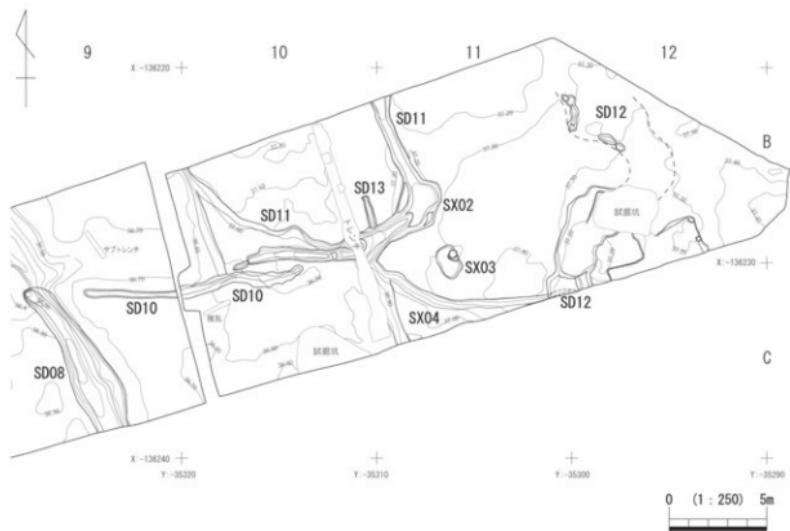
(2) 各遺構の状況

S D 0 5 古墳時代から奈良・平安時代の包含層と考えた鉄分を含む黒褐色粘質シルト層(第7層)を取り除いた段階で検出された遺構であるため、下層遺構として扱った。3区C 5グリッド南半部分から2区D 7グリッド北半部へ途中屈曲しながら、平面プランが緩い「S」の字状を呈して伸びる溝状遺構である。幅1.5～2.4m、深さ0.25mを測る、広く浅い溝である。覆土は、黒褐色粘質シルトであり、遺物としては、土師器の細片とともに、古墳時代の高坏の脚部と思われるものも出土している。東端は試掘坑に当たり、西端は調査区外に延びている。他の遺構との関係も不明であり、特に試掘坑北壁に確認された杭列や横木との関係がはっきりせず、S D 0 5に伴うものなのか、あるいはS R 0 1の壙状遺構に伴うものなのか、明確にすることはできなかった。そうした状況からこの溝の性格も明らかにできなかった。時期的にはその検出状況や出土遺物から、古墳時代のものかと考えられる。

S D 0 8 2区C 9グリッドに検出された溝状遺構である。古墳時代から奈良・平安時代の包含層と考えた暗褐色粘質シルト層(第9層)下で確認されている。最大幅2.5mを測り、南南東方向から北北西方向に延びて、北端部分は丸く納まり、消失する。南端部は調査区外へと延びている。深さ0.3m程度黄褐色粘質土に分けることができる。S D 0 8からは、細かい叩き目のある須恵器壺の口縁部及び胴部

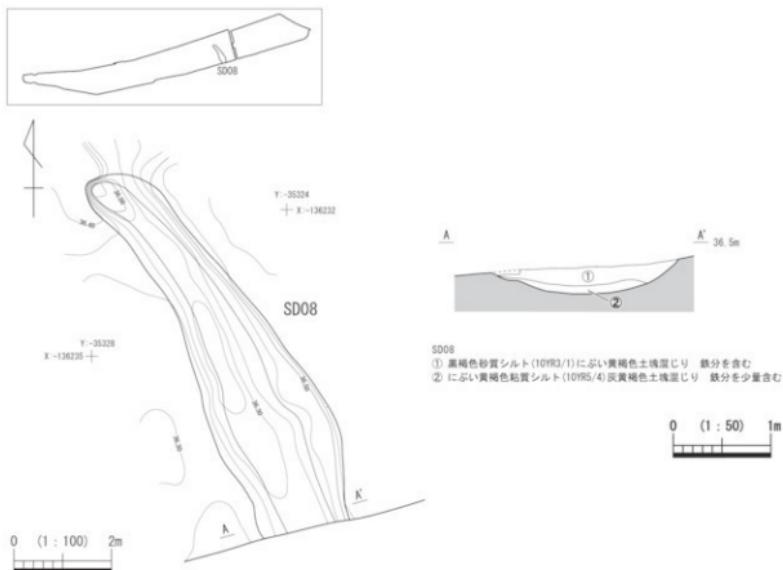


第15図 SD05実測図



第16図 1区・2区遺構全体図 (下層遺構)

片や長頸壺の頸部及び底部片、土師器の細片等が出土している。また、細片ではあるが、深鉢の口縁部と考えられる縄文土器が出土している。このSD08の性格は明確ではないが、第9層下で検出された

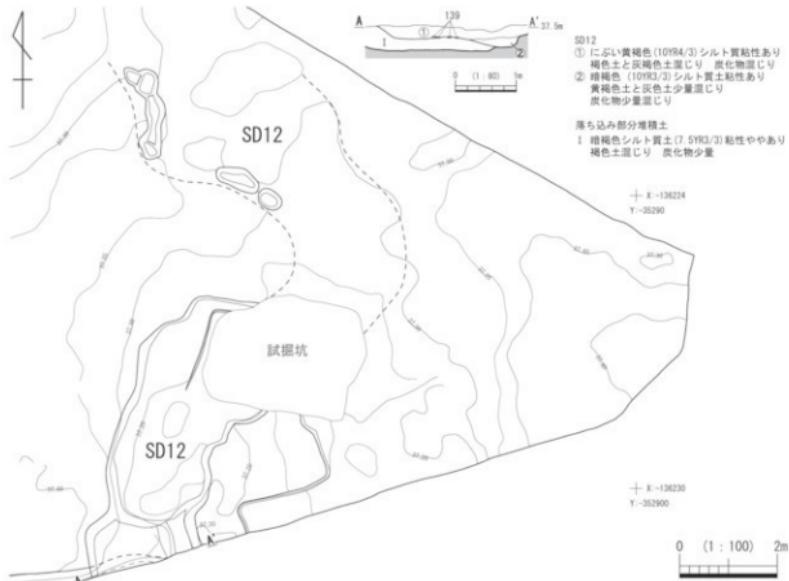


第17図 SD08実測図

遺構ではあるが、覆土内の遺物の状況から見ると、中世まではいかないと考えられ、奈良・平安時代の遺構ではないかと考えられる。

S D 1 2 C11～C12グリッドの調査区南壁の土層を検討する中で確認された遺構。断面に土器が所在しており、その北側のB11～B12グリッドに土器が点在して確認されたことから、南北に蛇行する形の溝状遺構があったのではないかと想定したものである。南壁の土層断面から幅2.6m、深さ0.3m程の溝と考えられる。覆土は、上層が褐色土・灰褐色土・炭化物の混じるにぶい黄褐色シルト質土、下層が黄褐色土・灰色土・炭化物が少量混じる暗褐色シルト質土である。土層断面での遺物は、上層下部から出土している。しかしながら、調査区内では、断面に近いC12グリッド北西隅部分で、ある程度プランを追うことができたが、他の部分では必ずしも明確にそのプランを検出することはできず、掘り過ぎによってなくなってしまったか、あるいは溝として連続したものではなかった可能性もある。また、その想定されるプランからみると、溝というより流路に近いものである可能性もある。点在する形で出土した遺物は、土師器や弥生土器の破片であり、土層断面で見つかった土師器は、口縁部が横方向に開く奈良時代の長胴壺であった。弥生土器片には、台付壺の脚部に近い部分のものもあった。遺物の時期は、弥生時代後期から古墳時代、奈良時代のものであり、遺構の時期としては、奈良から平安時代のものと考えられるが、遺構の性格については、不明である。

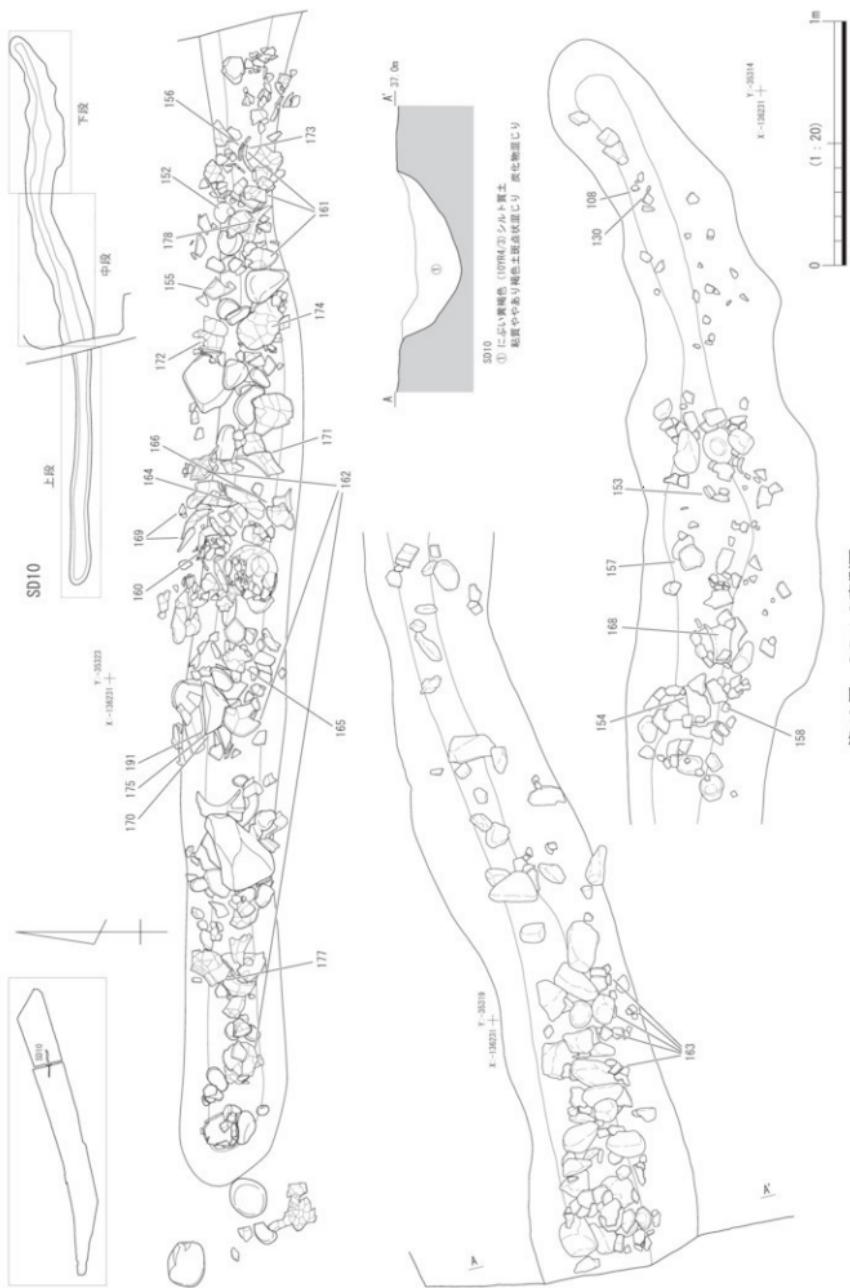
S D 1 0 2区C9グリッド北側部分から1区C10グリッド北側部分にはば東西方向に延びる溝状遺構である。このSD10内には、弥生土器が割れた状態で20～30cm大の河原石とともに密集する形で確認された。2区の調査時は、周囲の遺物包含層を掘り進める中で、弥生土器や石を確認することとなつたが、その時点では溝のプランを確認することができず、弥生土器と石が並ぶ状態のみ確認されている。1区の調査時は、溝のプランの確認を最重点に行った結果、1区の南西部に広がる暗褐色シルト層の落

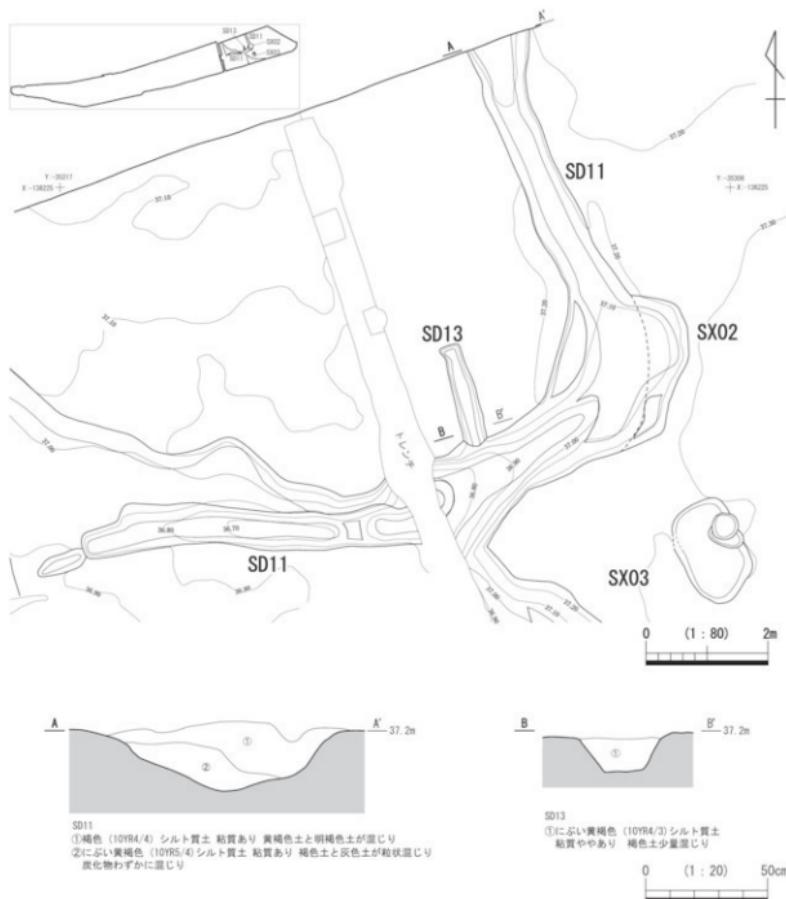


第18図 SD12実測図

ち込みに掘り込まれていることが明らかになった。溝としての全長は、11.5m程であり、C9グリッド部分では、ほぼ東西に直線的に延び、C10グリッド部分では、わずかに「S」の字状に屈曲して延びている。その両端は、徐々に浅くなり消失している。1区部分で確認された幅は0.5～0.7m、深さ0.3m程を測る。覆土は褐色土・炭化物混じりの暗褐色粘質シルト質土の1層である。遺物及び石の出土状況をみると、溝の西半部の方が東半部よりもその密集度は高く、東端部はほとんど疎らとなっている。なお、遺物や石の出土位置は、覆土上部であり、溝がある程度埋まった段階でそこに置かれた、あるいは棄てられたものかと考えられる。出土状態をみると、土器はかなり細かく割れた状態であり、その上や間に石が見られる。あるいは、土器を先に廃棄し、さらに石を投げ込んで人为的に細かく碎いている可能性もある。SD10から出土した遺物は、弥生土器のみで、器種としては、壺や台付壺であり、中には、ミニチュア土器と思われる壺も見られる。出土した段階では、かなりまとまっており完形に近い状態と考えられたが、なかなか完形に近い状態まで接合できるものは少なかった。時期的には、いずれも弥生時代後期中葉頃のものであり、この地域に分布するいわゆる菊川式土器と呼ばれるものである。溝としての性格ははっきりとはしないが、ミニチュア土器がある点やその出土状態から見ると、何らかの祭祀に使用された土器をこのSD10に廃棄し、それを石で破壊するような行為が行われたのかもしれない。SD10の遺物が祭祀に使われたものとすると、そういう祭祀が行われた場所はどこであろうか。また、どのような目的の祭祀が、どのような集団によって行われていたのであろうか。海戸田遺跡という沖積地に所在する遺跡のSD10等のこの時期の遺構については、海戸田遺跡の東側の段丘上の同時期の集落である赤谷遺跡や桜宜屋敷遺跡等との関連を踏まえ、この時期のこの一帯の開発状況と合わせて検討していく必要があろう。

第19図 SD10 実測図





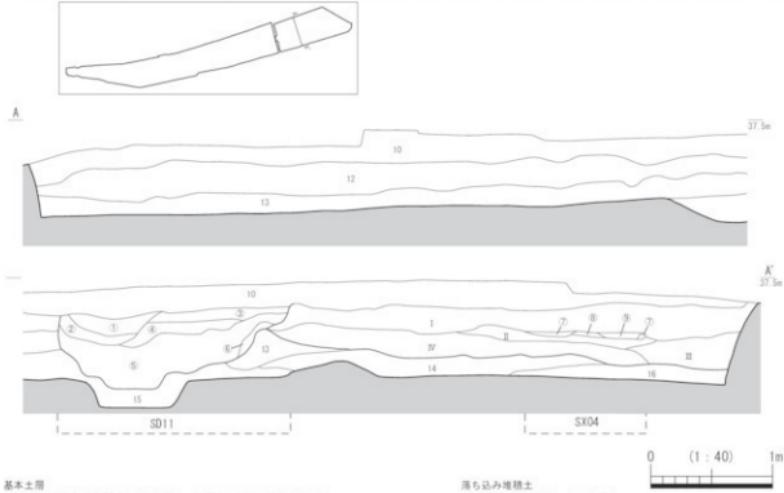
第20図 SD11・SD13・SX02・SX03実測図

SD11 B11グリッドから南南東に向かって延び、途中で大きく方向を変え、西に向かって延びる溝状遺構であり、その西端はSD10の北側部分に達する。SD10と同様、その西側部分は、1区南西部の落ち込み部分に掘り込まれている。調査区北壁部分では、幅10m、深さ0.3mを測り、西に屈曲して延びる先のトレンチとの交差部分では、幅1.85m、深さ0.6mとなっている。北壁部分から南に向かう部分は、幅0.8～10mと比較的幅が狭く、屈曲して西に向かう部分は、幅も広くなり深さも深くなる。覆土は、東側の微高地部分では、①褐色シルト質土②にぶい黄褐色シルト質土となっており、トレンチ交差部分では、①暗褐色シルト質土②褐色シルト質土③にぶい黄褐色シルト質土④暗褐色シルト質土⑤黒褐色シルト質土⑥にぶい黄褐色シルト質土に分けられる。SD11からは、台付甕等の弥生土器片が出土している。時期的には、SD10で出土している遺物とほぼ同時期のものであり、SD11の時期

はSD10とはほぼ同時期のものと考えられる。その形状からみてなんらかの区画の溝と考えられる。あるいは微高地から低地に向かってSD11の底の部分が低くなっていることから、排水関係の遺構の可能性もある。いずれにしてもSD11について考えた場合、この溝の微高地側に何らかの施設があつた可能性もある。微高地と低地部分の境に祭祀に使われたと考えられる土器が廃棄されたSD10があり、それとの関係も考慮すれば、祭祀等の場が所在した可能性も考えられる。

SD13 1区B10グリッド南東部に検出された溝状遺構である。SD11の屈曲部分の西側部分で、SD11から分岐して北に延びている。幅0.4m、検出面からの深さ0.12m、延長1.6mを測る。底部が平底を呈する逆台形の断面形となっている。覆土はにぶい黄褐色シルト質土であり、遺物は弥生土器の小片が出土している。このSD13は、その位置から考えて、区画溝あるいは排水溝かと考えたSD11に付随するものであり、排水等の機能を有していたものではないかと考えられる。前述の微高地側の何らかの施設からSD11に繋がるものであった可能性も考えられる。

SX02 SD11の屈曲部を掘り進める段階で、遺物が出土する範囲を追いかけていった結果、円形の土坑状を呈するものとなった。平面プランは、2.6m×2.0m程の楕円形を呈する。深さはSD11からはずれた部分で、0.2m程である。SD11を掘り上げた後に検出されたことから、SD11より古い時期のものと考えられる。出土した弥生土器は甕や壺が見られるもののはほとんどが細片であり、時期



基本土層

- 10 にぶい黄褐色 (10YR3/3) シルト質土 粘質少々あり 黄褐色土混じり
- 12 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト質土 粘質あり 黄褐色土と灰色土かく混じり
- 13 棕褐色 (7.5YR3/3) シルト質土 粘質少々あり 黄褐色土混じり
- 14 宅地色 (7.5YR4/2) シルト質土 粘質少々あり 黄褐色土少量混じり 褐灰色土混じり
- 15 棕褐色 (10YR5/1) シルト質土 粘質少々あり 黄褐色土ブロック状混じり
- 16 棕褐色 (10YR4/1) シルト質土 粘質あり

落ち込み堆積土

- I 棕褐色 (10YR3/3) シルト質土 粘質少々あり 黄褐色土混じり
- II 棕褐色 (10YR3/3) シルト質土 粘質少々あり 黄褐色土と灰色土が混じり 褐化物少量混じり
- III 棕褐色 (7.5YR3/3) シルト質土 粘質少々あり 黄褐色土筋状混じり
- IV 棕褐色 (7.5YR3/3) シルト質土 粘質少々あり 黄褐色土少量混じり

- SD11
- ① 棕褐色 (10YR3/4) シルト質土 粘質少々あり 黄褐色土状混じり
黄褐色土少量混じり 褐化物少量混じり
 - ② 棕褐色 (10YR4/4) シルト質土粘質あり 黄褐色土と褐色土が粒状混じり
灰化物少量混じり
 - ③ にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト質土 粘質あり 黄褐色土混じり
 - ④ 棕褐色 (10YR3/3) シルト質土 粘質あり 黄褐色土ブロック状混じり
 - ⑤ 黑褐色 (10YR3/2) シルト質土 粘質少々あり 黄褐色土少量混じり
 - ⑥ にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト質土 粘質あり 黄褐色土少量混じり
- SD11の②とSD11の③の間に「遺物取上」の記載がある。
- SX04
- ⑦ 棕褐色 (10YR2/1) シルト質土 粘質少々あり 黄褐色土混じり 褐化物少量混じり
 - ⑧ 棕褐色 (2.5Y5/8) シルト質土 粘質少々あり 黄褐色土ブロック状混じり
 - ⑨ 赤褐色 (2.5YR4/6) シルト質土 粘質少々あり 黄褐色土混じり
- SX04の⑧とSX04の⑨の間に「遺物取上」の記載がある。

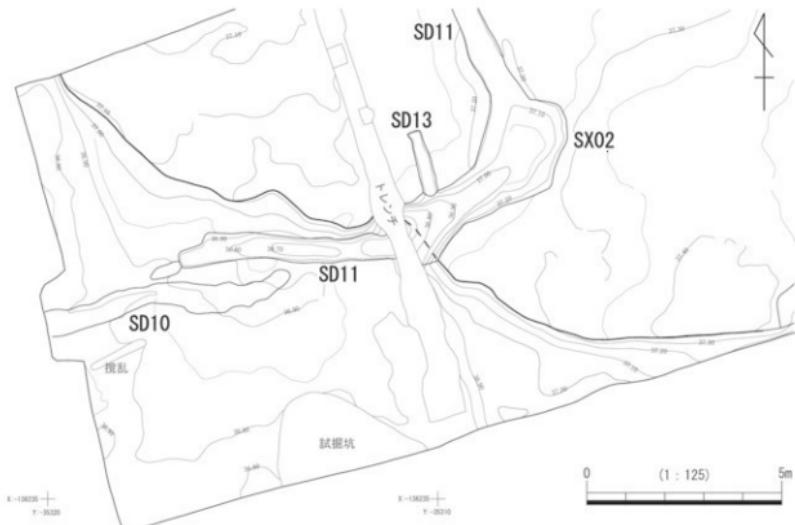
第21図 1区中央部分南北土層状況図

的にはSD11のものとほとんど時期差はないものと思われる。

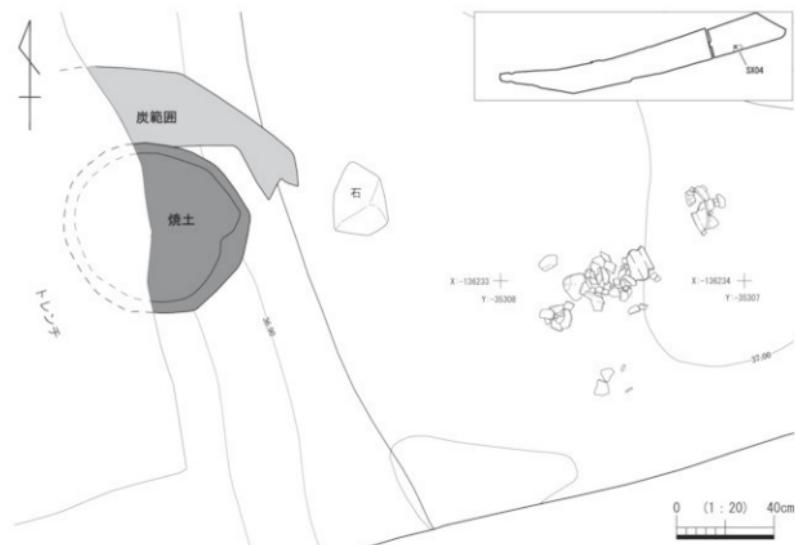
SX03 1区B11グリッドとC11グリッドの境付近に検出された遺構である。当初は、包含層に遺物がわずかに顔を出しているものと思われたが、それらを追っていくと土坑状を呈する遺構となった。平面プランは、17m×11mの隅丸長方形に近い形を呈する。SX03からは、弥生土器が集中して出土しているが、磨滅したものが多く、形がわかるものが少なかった。時期的には、弥生時代中葉ないしこれに前後する時期のものであり、遺構自体もその時期と考えられる。性格的には、SD10等の祭祀的なものと関連する遺構と考えられ、SX02も同様のものかと考えられる。

1区南西部落ち込み 1区の南西、B10グリッド南半からC10・C11グリッド北半にかけて、南西方向に斜めに落ち込んでいる状況が確認された。SD10やSD11が、この落ち込み部分に掘り込まれており、時期的には、それらの遺構よりも古いものとなる。南北トレンチで観察されたこの落ち込みの堆積土は、I…褐色土混じりの暗褐色シルト質土、II…褐色土と褐灰色土・炭化物が混入する暗褐色シルト質土、III…褐色土が筋状に混じる暗褐色シルト質土、IV…褐色土が少量混じる暗褐色シルト質土となつておらず、緩やかに南西方向に下がっている。こうした落ち込みが自然に形成されたものであるのか、あるいは人為的なものであるかは、不明である。これらの堆積土中からは、弥生土器片が出土しているが、細片で磨滅しており、その時期は判然としない。弥生時代後期には、低湿地となっていたのであろうか。この付近が弥生時代の微高地と低湿地との境であり、北東方向に高く、南西方向に低くなっていたと考えられる。なお、2区の南東部でもこの堆積を確認しているが、古墳時代包含層との分層が明確でなく、錯綜している部分もある。

SX04 1区の落ち込みのC11グリッド付近の堆積層上部に、焼土の塊を確認した。それを覆う形となる落ち込みの堆積土Iを取り除いたところ、焼土の集中個所と土器の集中が確認された。焼土については、一部をトレンチによって掘ってしまったが、残された部分をみると、0.76m×0.7mのはば円形の



第22図 1区南西部分落ち込み部分実測図



第23図 S X 0 4 焼土遺構・土器出土状況図

プランであり、厚さは3～6cmで堆積していた。明黄褐色ないしは赤褐色を呈する。その厚さをみると、かなりの期間この場所で火が焚かれていたのではないかと考えられる。焼土の周辺には焼土の混じる炭化物が広がっている。焼土のすぐ東側には、約30cm大の石があり、さらに東側には、土器が集中して出土している。この焼土及び石、土器が一体のものである確証はないが、何らかの遺構であろうと考え、S X 0 4とした。出土している土器は、弥生土器の甕であり、その時期は後期中葉ないしはこれと前後する時期と考えている。出土した遺物から見た場合、SD10、SD11、SX03とこのSX04は、遺構の切り合い関係から見て、新旧関係はあるにしても、それほど時期差はないものと考えられる。そうした観点で見ていくと、それぞれの遺構は、同じような、例えば祭祀関連というような性格をもつものではなかろうか。焼土の状況をみると、かなりの期間と頻度で火が焚かれたようであり、この場所が生活の場所とは考えられないといえば、その行為はやはり祭祀的なものではなかったかと考えられる。微高地から低湿地の境にあたる周辺で、明確ではないが、祭祀的様相を窺うことができる遺構と遺物の出土状況が見られるということになる。その当時の状況を考えると、低湿地は稲作等の生産の場所となっていたと考えられ、そうしたものに対する豊作の祈り、感謝する行為もあったと考えられる。弥生時代後期中葉ないしその前後の時期と考えられるこれらの遺構は、その痕跡を表すものと考えてみた。

第2節 出土遺物

1 上層の出土遺物

(1) 遺物の出土状況

上層の遺構としたSD01、SD02、SD03、SD04、SD06、SD07及び自然流路であるSR01から遺物が出土しているが、特にSD01及びSR01から山茶碗を中心として豊富な遺物が出土している。また、上層の遺物包含層とした第4層(鉄分を少量含む灰黄褐色粘質シルト層)、第5層(鉄分を含むにぶい黄褐色粘質シルト層)、第6層(鉄分と部分的に黄色土塊・黒褐色土塊を含む暗褐色粘質シルト層)から中世以降の陶磁器も含めて、豊富な遺物が出土している。

(2) 各遺構の出土遺物

SD01 (第24・25図)

地元の東遠産の山茶碗を中心に、灰釉陶器、須恵器壺、土師器等の土器類、貿易陶磁や国内産陶器、漆椀、曲物や板材等の木製品、錢貨等豊富な遺物が出土している。土器・陶磁器については、第4表に破片数と個体数一覧を示した。しかしながら、土師器については、後述する古墳時代の土師器も含めて、磨滅した細片がほとんどであり、古代末から中世のものとそれ以前のものとなかなか判別がつかなかつた。そのため破片数は、明らかにこの時期のものと考えられる破片数のみ、表示している。

また、現地調査では、覆土を以下のように分け、遺物を取り上げている。①鉄分を少量含む黒褐色粘質シルト層…遺物取上げ第1層、②灰黄褐色粘質シルト層、③鉄分・黄色土塊を含む黒褐色粘質シルト層…遺物取上げ第2層、④褐灰色粘質シルト層、⑤白色土塊・細礫を含む黒褐色砂質シルト層…遺物取上げ第3層、⑥黒褐色粘質シルト層…遺物取上げ第4層、⑦褐灰色砂質シルト層、⑧褐灰色砂層…遺物取上げ第5層である。

なお、SD01では、古墳時代の土師器や弥生土器がかなりまとまった形で出土しているが、遺構の部分でも述べたように、下層の遺物包含層もしくは今回確認はできなかった遺構からの混入と考えられる。それらについては、下層の包含層の遺物として扱い、後述する。

以下、古代末から中世の遺物として図示したものについてその概要を述べる。

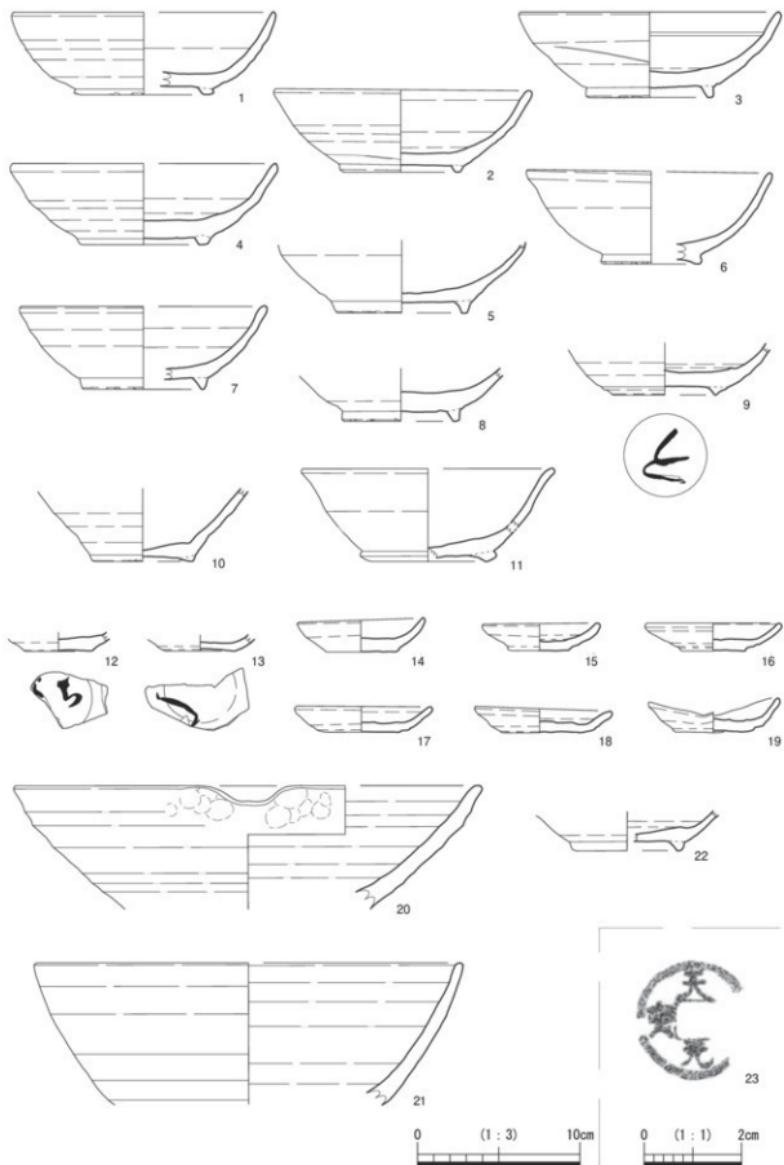
山茶碗(1~21) 1~11は山茶碗の碗である。1は推定口径16.0cm、器高5.1cmを測る。口部部は内湾気味に外上方に立ち上がる。高台は断面方形の低いものであり、下端部には粉殻痕が見られる。底部外

第4表 SD01出土土器・陶磁器破片数一覧表

	地元産山茶碗					知多半島産 山茶碗	渥美・湖西産 山茶碗	灰釉陶器	須恵器	貿易陶磁	国内産陶器			土師器
	陶	小陶	小瓦	跡	壺						陶口・米通	窯道	その他	
第1層														
破片数	92		19	10		5		1	13	1	1	3		5(伊勢鏡)
個体数	17		8	2		1		1						
第2層														
破片数	54		9			2	6	9	22					
個体数	18		5					1						
第3層														
破片数			5	1				2						
個体数			4	1				1						
第5層														
破片数	27		1	2				3						
個体数	10		1											

面には回転糸切り痕が見られる。全体に回転ナデ調整であり、高台に貼り付けのナデが見られる。灰色を呈する。2は口径15.4cm、器高5.0cmを測る。口体部は内湾気味に外上方に開くように立ち上がる。断面逆台形の高台が貼り付けられ、下端部に初期痕がわずかに見られる。底部外面には回転糸切り痕が見られる。全体に回転ナデ調整である。焼成やや不良でにぶい黄褐色を呈する。3は口径15.8cm、器高5.2cmを測る。口体部は緩やかに内湾して立ち上がり、途中わずかに屈曲して外上方に開く。高台はやや高く外に開く形で貼り付けられ、下端部には初期痕が見られる。底部外面にはわずかに糸切り痕が見られる。全体に回転ナデ調整であり、灰色を呈する。4は推定口径16.2cm、器高5.0cmを測る。口体部は緩やかに内湾気味に立ち上がり、途中わずかに屈曲して外上方に開く。断面逆台形の低い高台が貼り付けられており、その下端部には初期痕が見られる。底部外面には回転糸切り痕が見られる。全体に回転ナデ調整であり、灰色を呈する。口縁部内面に斑点状に自然釉が見られる。5は口縁部を欠くものである。体部が緩やかに内湾して立ち上がり、途中わずかに屈曲する。断面三角形に近い高台が貼り付けられており、下端部には初期痕が見られる。底部外面には回転糸切り痕が見られる。全体に回転ナデ調整であり、灰色を呈する。6は推定口径14.8cm、器高5.6cmを測る。口体部は内湾気味に外上方に向かって立ち上がる。高台は断面扁平な外に向かって開く形のものであり、下端部には初期痕が見られる。全体に回転ナデ調整であるが、口体部内面には斑点状に自然釉が分厚く付着している。内面褐色、外側黃灰色を呈する。7は推定口径15.2cm、器高5.1cmを測る。口体部は内湾気味に外上方に向かって立ち上がる。断面三角形を呈する高台が貼り付けられており、下端部には初期痕が見られる。全体に回転ナデ調整であり、灰色を呈する。8は底部片であるが、体部がわずかに内湾気味に立ち上がる。断面逆台形に近い高台が貼り付けられ、下端内側に初期痕が顕著に認められる。底部外面には回転糸切り痕が認められる。全体に回転ナデ調整で、体部内面に自然釉が付着している。灰色を呈する。9は底部片であるが、体部が内湾気味に立ち上がる。断面低い逆三角形を呈する雑な高台が貼り付けられている。底部外面に回転糸切り痕が残り、墨書が確認される。ひらがなの「と」に近いものである。内面にも墨状のものが付着している。灰白色を呈し、全体に白っぽいものである。1から9は、いずれも須恵器質の焼成であり、地元の皿山窯のものと考えられる。口径が16cm前後の1・3・4と15cm前後の2・6・7があるが、高台や全体の形状や作りから見て、1~4がいわゆる山茶碗Ⅱ期のものと考えられ、12世紀末~13世紀初頭頃のものかと考えられる。5~9は、高台も華奢で雑なものとなっており、山茶碗Ⅲ期のものあり、13世紀前半頃のものかと考えられる。10は知多窯産の山茶碗であり、体部が直線的に外上方に開き、断面扁平な逆三角形の高台が貼り付けられている。高台下端には、初期痕かと考えられる痕跡が見られる。胎土は密であり、内外面灰白色を呈する。体部内面には自然釉が付着している。こうした特徴から尾張型の第7形式にあたるものと考えられる。11は、渥美湖西窯産の山茶碗である。図示したものは、同一個体と考えられる口縁部と底部を復元実測したものである。口体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部が外反して開く。扁平な逆台形に近い断面形の高台がつけられており、高台周辺から底部外面はナデされている。細かい白色砂粒を含む胎土であり、内面褐色、外側灰白色を呈する。口体部内面には、自然釉が付着する。渥美湖西窯編年でいえば、碗B 4に当たるものと考えられ、第Ⅲ期a段階のものと考えられる。

12から19は小皿である。12と13は、いずれも底部片であり、底部外面に墨書がある。12は、ひらがなの「ち」もしくは「ら」に近いものであり、13は、はっきりしない。いずれも底部外面に糸切り痕を有し、灰白色を呈するものである。底部外縁に段差がなく、小皿B類と考えられる。14は口径7.6cm、器高2.0cm、底径4.3cmを測る。口体部が短く内湾気味に立ち上がる。底部外面には回転糸切り痕が見られ、底部外縁にわずかに段差を持つ。全体に回転ナデ調整であり、灰色を呈する。15は口径7.3cm、器高1.7cm、底径3.7cmを測る。口体部が短く内湾気味に立ち上がる。底部外面には回転糸切り痕が見られ、底部外



第24図 SDO 1出土遺物実測図1 (土器・錢貨)

縁に段差を持つ。全体に回転ナデ調整で、灰白色を呈する。16は推定口径8.4cm、器高1.7cm、推定底径4.0cmを測る。口部が短く、わずかに内湾して立ち上がる。底部外面には、回転糸切り痕が見られ、底部外縁に段差を持つ。全体に回転ナデ調整が施され、薄手である。灰色を呈する。17は口径8.5cm、器高1.6cm、底径4.8cmを測る。口部が短くわずかに内湾気味に立ち上がる。底部外面には回転糸切り痕が見られ、底部外縁にわずかに段差が見られる。全体に回転ナデ調整が施されるが、やや扁平な器形である。灰色を呈する。18は口径9.4cm、器高1.6cm、底径4.9cmを測る。口部が短くわずかに外反気味に立ち上がる。底部外面には回転糸切り痕が見られ、底部外縁に段差をもたず、底部中央がわずかに窪む。全体に回転ナデ調整であり、扁平な器形である。灰色を呈する。19は焼き重みで大きくゆがんでいる。口径8.1～9.0cm、器高1.1～2.2cm、底径5.0cmを測る。口部は短くわずかに内湾気味に立ち上がる。底部外面には回転糸切り痕が見られ、底部外縁に段差が認められる。全体に回転ナデ調整であり、内面の一部に自然釉が付着している。灰色を呈する。これらの小皿は、碗同様、須恵器質の焼成であり、地元の皿山窯のものと考えられる。口径が7cm代のものと8cm代のものが見られるが、14～17と19が底部に段差を持つものであり、18は底部が扁平になるものである。時期的には、口径が大きく、底径の小さい16・17が山茶碗Ⅱ期、他は山茶碗Ⅲ期のものと考えられる。

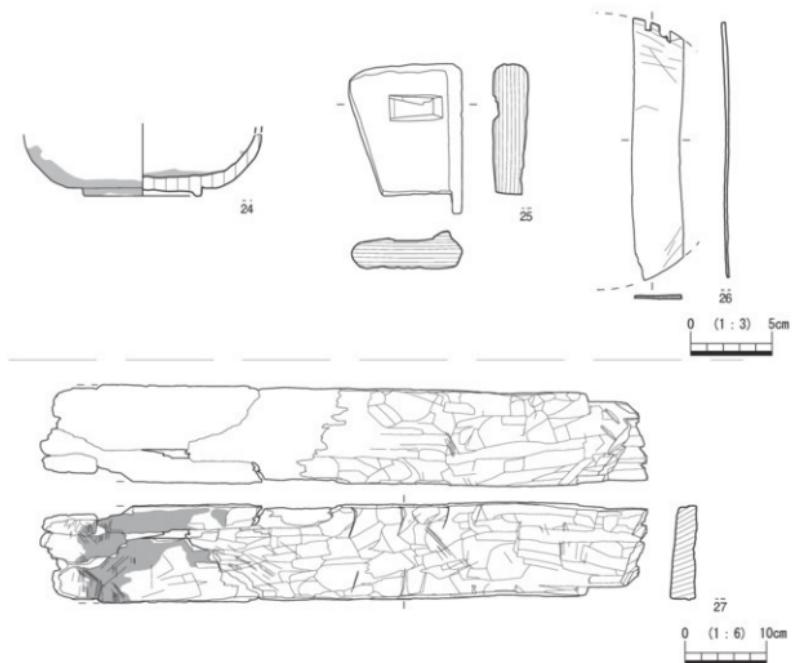
20は片口鉢である。全体の15%残存の口部部片である。推定口径28.6cmを測る。口部はわずかに内湾して外上方に立ち上がる。口縁の一端に注口が作り出され、製作の際の指頭圧痕が見られる。全体は回転ナデ調整であり、色調は灰色を呈し、須恵器質の焼き上がりである。21は鉢である。口部の約25%の破片である。推定口径26.4cmを測り、口部はわずかに内湾して立ち上がり、口縁端部は丸く納められている。体部下半外面には回転ヘラケズリ調整が見られ、他は回転ナデ調整である。色調は内面灰黄色、外側黄灰色を呈し、須恵器質の焼き上がりである。いずれも碗などと同様、皿山窯で焼かれたものかと考えられる。

灰釉陶器(22) 22は灰釉陶器の碗の底部片である。断面逆台形のやや外に開く形の高台を持つ。底部外面にはかすかに糸切り痕が残る。焼成は良好であり、全体に灰白色を呈する。内外面に部分的に黒色の斑点状の釉が認められる。

銭貨(23) 23は右側部分を欠いているが、残された文字から天聖元寶と考えられる。天聖元寶は、北宋銭であり、北宋の天聖元年(1023年)に始鑄された銭貨である。隸書体のものと真書体のものがあるが、今回出土したものは、真書体のものである。直径2.5cm、厚さ0.1cmであり、かなり磨滅しているものであり、いくつかに割れていたが、右側部分を欠いている。

漆器(24) 24は遺物取り上げ第3層としたSD01の中位から出土した漆椀である。体部から底部の2/3程が残存している。体部が内湾して立ち上がり、底部には断面逆台形の高台が挽き出されている。高台部径7.2cm、体部の厚さ0.8cmを測る。内面の見込み部分及び体部及び高台の外面に漆の塗膜が残るが、内外面とも黒漆である。木地の木取りは縱木取りであり、樹種はケヤキである。

木製品(25～27) 25～27はいずれも漆椀と同様、SD01の中位から出土している。25は現状台形に近い形を呈するが、図の右側及び下側を欠損する。下側には四角状に切り込みが入れられ、上部には長方形を呈する抉りこみが見られる。上側と左側側面は使用によると思われる磨減痕が見られる。抉りこみの面は材を割った面が残り、対面にはケズリ痕が残る。残存長9.2cm、残存最大幅7.0cm、厚さ2.3cmを測る。材の樹種は杉である。どんな製品かははつきりしないが、農具の一部かと考えられる。26は曲物の底板の断片かと思われる。両端に円弧を呈する縁辺部が残る。残存長32.2cm、残存幅6.4cm、厚さ0.5cmを測る。想定される径は34cmである。一方の端部には、欠損が見られるが、端部には特に段差は見られず、「クレゾコ」のものと考えられる。材の樹種はスギと同定されている。27は残存長99.7cm、幅16.7cm、厚さ4.3cmを測る板材である。一方の端部は折損しており、一部が腐食、また部分的に炭化が認められる。



第25図 SD01出土遺物実測図2（木製品）

他方の端部は、刃物により切断されている。表面全体に、手斧状の工具によるものかと 考えられる幅2.5～5.0cmほどの粗く雑な感じの加工痕が残る。板材と考えられるがその用途ははつきりとしない。樹種はイヌマキ属の樹木と同定されている。

第5表 SD02・03・04・06・07出土器・陶磁器破片数一覧表

	地元産山茶碗				知多平島産 山茶碗	渥美・瀬戸産 山茶碗	灰釉陶器	磁器	質造陶器	国内産陶器			土器
	柄	小瓶	小皿	鉢						裏口・米通	常滑	その他	
SD02													
破片数	1				1				1				
製体数	1				1				1				
SD03													
破片数	12												2 (かわらけ 伊勢鍋合)
製体数	2												
SD04													
破片数	3												
製体数													
SD06													
破片数	4								1				
製体数													
SD07										2	8		
破片数	23												
製体数	1												

S D O 2

13世紀代のものと考えられる地元産の山茶碗の口縁部片、知多窯産の山茶碗の底部片、叩き目のある須恵器壺の胴部片の他、土師器の細片が出土している。

S D O 3

山茶碗の破片及び土師質土器と考えられる破片、伊勢鍋と思われる破片が出土している。出土している山茶碗の底部片をみると、わずかに高台が付けられているものであり、地元産の13世紀前半のものと考えられる。

S D O 4

わずかに山茶碗の細片が出土している。

S D O 5

山茶碗の細片、叩き目のある須恵器壺の破片が出土している。

S D O 7

須恵器壺の口縁部片と叩き目のある胴部片、山茶碗片の他、灰釉陶器の細片が出土している。山茶碗は、内湾して立ち上がるるものである。底部片をみると低い高台であり、初殻痕が残るものである。

以上の S D O 2 ~ S D O 4 · S D O 6 · S D O 7 の出土土器の破片数については、第5表にまとめた。

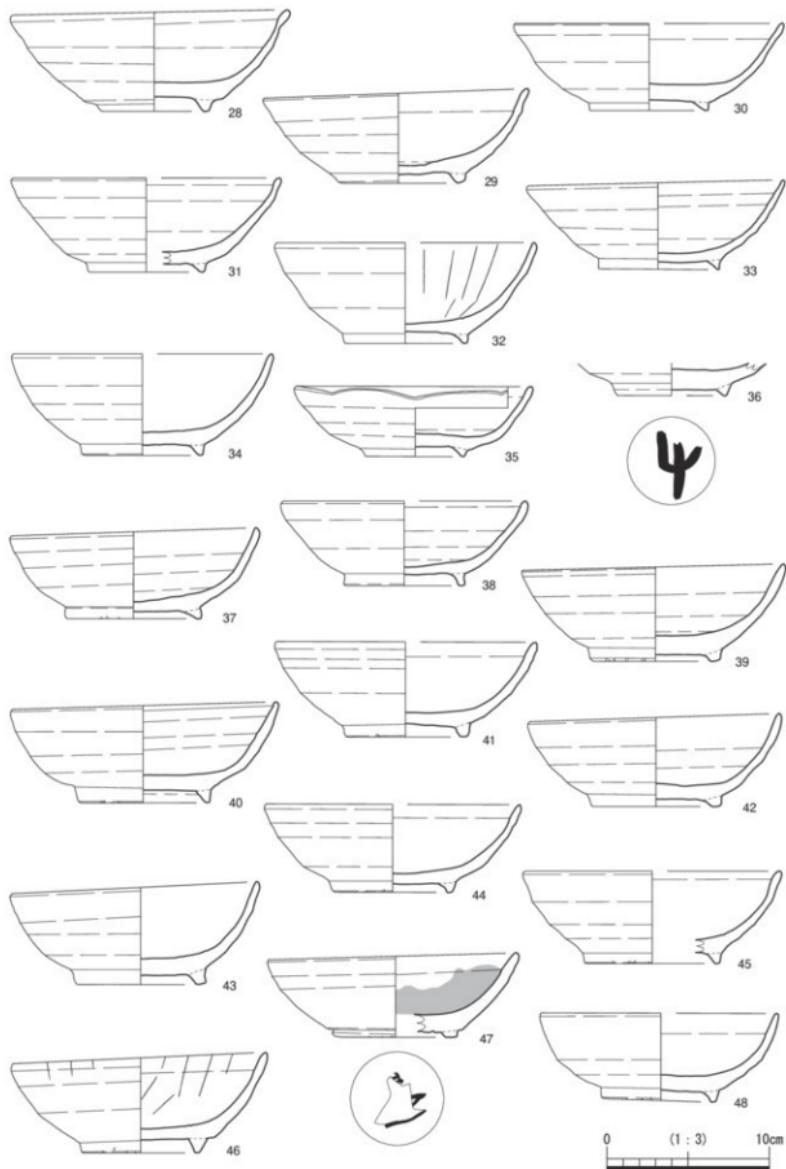
S R O 1 (第26~30図)

自然流路である S R O 1 からは、かなり豊富に遺物が出土している。現地での遺物の取上げについては、上位を遺物取上げ第1層、下位を遺物取上げ第2層としている。山茶碗を主体に、灰釉陶器、須恵器壺、常滑産の壺、伊勢鍋の他、土師器の細片が出土している。これらについて、その出土した破片数について、第6表に示してある。S D O 1 と同様、土師器については、明らかに古代末から中世と考えられるもののみ破片数を示している。また、S R O 1 から出土した木製品として、漆椀及び曲物と壇状遺構の杭を取上げている。以下、図示したものについて、その概要を述べる。

山茶碗(28~67) S R O 1 の底近くで完形の碗が多く出土している。28は碗であり、口径16.9cm、器高6.1cmを測る、やや大型のものである。体部は緩く内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反気味に開く。底部外面には、回転糸切り痕が残り、その後断面逆台形を呈する高台が、底部外面やや内側に貼り付けられている。高台の造りはやや雑である。焼成はやや甘く、灰白色を呈する。29も碗であり、口径16.1cm、器高5.5cmを測る。体部は緩く内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反気味に開く。口縁端部はやや肥厚する。底部外面には回転糸切り痕が残り、その後断面逆台形の高台がやや外に開く形で貼り付けられている。全体に回転ナデ調整であるが、内面底部中央が窪むようにナデされている。焼成はやや甘く、灰白色を呈する。30は口径16.5cm、器高5.4cmを測る全体にやや扁平な碗である。体部は僅かに内湾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反して開く。底部には回転糸切り痕が残り、その後断面三角形に近い高台が貼り付けられる。丁寧な作りの高台である。焼成は良好で、須恵器質の灰色を呈する。31は推定口径16.6cm、器高5.8cmの碗である。体部は僅かに内湾して立ち上がり、口縁部は短く僅かに外反して開く。

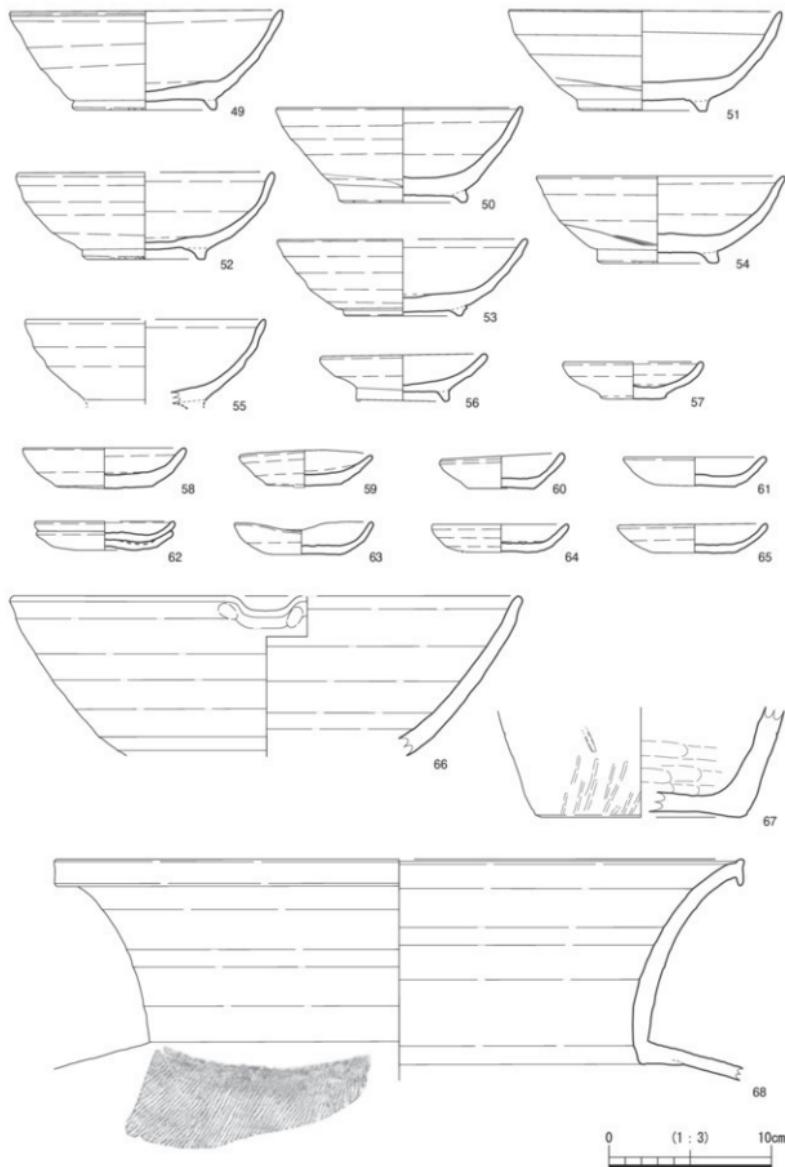
第6表 S R O 1 出土土器・陶磁器破片数一覧表

	地元産山茶碗					知多季島産 山茶碗	瀬美・瀬西産 山茶碗	灰釉陶器	須恵器	貿易陶器	国内產陶器			土師器
	壺	小壺	小瓶	鉢	壺						壺	壺	壺	
第1層														
破片数	91		9			1				7	21			14 (伊勢鍋)
製作数	28		2							2				
第2層														
破片数	76	1	23	5	5	1				1	16			2 (壺)
製作数	53	1	12	1	1									



第26図 SR O 1出土遺物実測図1 (土器)

底部は断面逆台形の高台が貼り付けられ、高台周辺及び底部外面をナデている。焼成は部分的に不良で、黄灰色を呈し、全体に磨滅している。32は推定口径15.8cm、器高6.2cmとやや深い碗である。体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部は直線的に開く。底部外面には、回転糸切り痕が残り、断面逆台形の高台が貼り付けられるが、一部初穀痕かと考えられる痕跡が見られる。全体に回転ナデ調整であるが、内面にヘラ状のものでナデたような痕跡が見られる。口縁部には、自然釉が掛かる。焼成は良好で、灰色を呈する。33は口径15.7cm、器高5.4cmを測る碗である。体部は緩やかに内湾気味に立ち上がり、口縁部は直線的に外上方に向く。底部外面には、静止糸切り痕状の痕跡が残り、断面三角形の高台が貼り付けられる。全体に薄手の造りである。焼成は良好であり、灰色を呈する。34は推定口径15.4cm、器高6.3cmを測るやや深い碗である。体部から口縁部へ内湾して立ち上がり、全体に断面半円形に近い形を呈する。底部外面には回転糸切り痕が見られ、断面逆台形の高台がやや外に開く形で貼り付けられている。高台の端部は平坦になっている。焼成はやや不良であり、灰白色を呈する。35は口径14.7cm、器高4.3cmを測る碗である。体部が僅かに内湾して立ち上がり、口縁部が直線的に開くが、口縁部の片側は、3カ所が窪む形の波状を呈するように削りとられており、この部分の口縁は薄くなっている。底部外面には、糸切り痕が見られ、断面三角形の華奢な高台が貼り付けられている。焼成は良好で、須恵器質の固い焼き上がりとなり、灰色を呈する。焼成後何らかの用途を持つものとして、加工がなされたものと考えられる。36は碗の底部である。底部外面は回転糸切りであり、断面三角形に近い高台が貼り付けられているが、一部潰れて逆台形を呈するところがある。焼成は良好であるが、にぶい橙色を呈する。底部外面には、「 Ψ 」の墨書があるが、文字であるのか記号であるのか、不明である。37は口径15.4cm、器高5.4cmを測る碗である。体部が途中わずかに屈曲し、内湾気味に立ち上がり、口縁部は直線的に外上方に向く。底部外面には回転糸切り痕が残り、断面逆台形でやや外に開く形の高台が貼り付けられる。高台の下端部には、初穀痕が顕著に見られる。全体的に回転ナデ調整が施されるが、内面底部中央が丸くナデされている。焼成は良好で、内面黄灰色、外側灰色を呈する。38は推定口径15.2cm、器高5.2cmを測る碗である。体部は僅かに内湾しながら立ち上がり、口縁部はさらに内湾気味となる。口縁端部はやや肥厚する。底部外面には糸切り痕が残り、断面逆台形のやや高い高台がやや開く形で貼り付けられる。高台下端部には初穀痕が部分的に顕著に認められる。焼成は良好であり、灰色を呈する。39は口径16.3cm、器高5.8cmの碗である。体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がり、全体として断面半円形を呈する。口縁部がやや肥厚する。底部外面には糸切り痕が残り、断面低い逆台形の高台が貼り付けられる。高台下端部には、初穀痕が顕著である。底部には、亀裂が生じている。焼成は良好であり、内面黄灰色、外側灰色を呈する。40は口径16.2cm、器高6.0cmを測る碗である。体部は下位でやや屈曲し、その後直線的に外上方に向く。口縁端部内側が僅かに窪み、丸くなる。底部は底径が大きく、全体としてはやや扁平な形を呈する。底部外面には回転糸切り痕が見られ、断面三角形に近い高台がやや開く形で貼り付けられている。高台下端部に初穀痕が見られる。全体に回転ナデ調整が施されている。焼成は良好であり、特に口縁部外面が良く焼けている。41は推定口径15.8cm、器高5.9cmの碗である。体部から口縁部に内湾して立ち上がり、全体として半円形の断面形となる。底部には回転糸切り痕が見られ、断面逆台形に近い形の高台が貼り付けられるが、高台下端部には部分的に初穀痕が見られる。内面見込み部には重ね焼きの痕跡が見られる。底部には亀裂が入っている。焼成は良好であるが、灰白色のやや白っぽい焼き上がりとなっている。42は口径15.7cm、器高5.5cmを測る碗である。体部下半にわずかに屈曲が見られるが、全体に内湾気味に立ち上がる。底部外面には糸切り痕が残り、断面扁平な逆台形の高台が貼り付けられる。高台の一部は剥がれており、その下端部には初穀痕が見られる。焼成は良好であり、灰色を呈する。43は口径15.4cm、器高6.0cmの碗である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部はそのまま上方に延びる。底部外面には糸切り痕が残り、断面逆台形の高台がやや外に開いて貼り付けられている。高台下端部には、



第27図 SR O 1出土遺物実測図2（土器）

初殻痕が顕著に認められる。内面に部分的に灰かぶりの自然釉が見られる。内面中央に炭化物が付着している。焼成は良好で灰色を呈する。44は推定口径15.6cm、器高5.4cmのやや扁平な碗である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部はそのまま直線的に外上方に延びる。底部外面には回転糸切り痕が残り、爪型に近い形の高台が貼り付けられる。高台下端部には初殻痕が見られる。焼成は良好であり、灰色を呈する。45は推定口径15.6cm、器高5.7cmを測る碗である。体部は内湾気味に立ち上がり、途中弱く屈曲、口縁部はやや外反して外上方に開く。口縁部はわずかに肥厚する。残された底部外面には、回転糸切り痕が認められ、断面逆台形の高台が貼り付けられる。高台下端部には初殻痕が見られる。焼成はやや不良であり、灰色を呈する。46は口径15.5cm、器高5.9cmを測る碗である。底部は平たく、やや大きい。口体部はわずかに内湾しながら、外上方に立ち上がる。底部外面には回転糸切り痕が見られ、断面三角形の高台がやや内側に貼り付けられる。高台下端部には初殻痕が認められる。口体部外面は回転ナデ調整であるが、内面にはナデの後、ヘラ状の工具でナデたような痕跡と重ね焼き痕跡が認められる。焼成は良好で、灰色を呈する。47は口径15.2cm、器高5.0cmを測る碗である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部が僅かに外反する。底部外縁のやや内側に扁平な高台が貼り付けられる。高台下端部には初殻痕が顕著に認められる。底部外面には墨書が認められるが、中央部を欠損しており、どういう字か不明である。48は推定口径14.4cm、器高5.3cmとやや小ぶりな碗である。体部は内湾して立ち上がり、そのまま直線的に口縁部となる。底部外面には回転糸切り痕があり、断面逆台形の高台が貼り付けられる。高台下端部には初殻痕が顕著に残る。49は口径16.6cm、器高6.1cmを測るやや大ぶりの碗である。体部は僅かに内湾して立ち上がり、口縁部は直線的に開く。口縁部の内側が僅かに肥厚する。底部外面には回転糸切り痕が見られ、断面逆台形に近い高台がやや外向きに貼り付けられる。高台下端部には初殻痕が見られる。焼成は良好であり、灰色を呈する。50は口径14.9cm、器高5.9cmとやや小ぶりの碗である。口体部は僅かに内湾して外上方に開く。口唇部内側に弱い沈線が見られる。底部外面には回転糸切り痕が見られ、断面逆台形の高台が外に開く形で貼り付けられる。高台下端部には、初殻痕が認められる。焼成は良好で、灰色を呈する。51は口径16.6cm、器高6.2cmとやや大ぶりの碗である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部が僅かに屈曲して、直線的に開く。底部外面中央部には糸切り痕が見られ、外縁には断面逆台形の高台が貼り付けられる。高台下端部には初殻痕が見られる。焼成はやや不良で、灰白色ないし灰色を呈する。52は推定口径15.6cm、器高5.3cmを測るやや扁平な碗である。体部はやや内湾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反して外上方に開く。底部外面には回転糸切り痕が残り、断面逆台形の高台が貼り付けられる。高台下端部には初殻痕が見られる。焼成は良好であり、灰色を呈する。53は推定口径15.1cm、器高4.7cmを測るやや扁平な碗である。体部から口縁部にかけて僅かに内湾して外上方に開く。底部外面には回転糸切り痕が残り、断面三角形に近い矮小化した高台が貼り付けられる。底部内面には丸くナデられて窪む形となる。焼成はやや不良で、全体にぶい黄灰色を呈する。54は推定口径15.1cm、器高5.3cmを測るやや扁平な碗である。体部がやや内湾して立ち上がり、口縁部が僅かに外反気味に短く開く。底部外面には回転糸切り痕が残り、断面逆台形の高台がやや開く形で貼り付けられる。高台下端部には初殻痕が残る。焼成は良好であり、灰白色を呈する。55は推定口径14.6cm、器高5.1cmの碗である。体部は内湾気味に低く立ち上がり、口縁部は僅かに外反して外上方に開く。底部が残存しているのは一部であるが、やや膨らみをもっている。外面はヘラ削りかと考えられ、外縁はナデされている。口縁部外面に自然釉が付着している。焼成は良好であり、灰色を呈する。28から55の碗は、焼成がやや不良なものと除いて、いずれも須恵器質の焼き上がりを呈しており、いわゆる東遠型の山茶碗である。ほとんどのものが地元の皿山窯産のものと考えられる。28～31の碗は、口径が16.0cmを大きく超える大型のものであり、口縁部が弱く外反する形のものである。高台部にわずかに初殻痕と考えられるものも見られる。32～34・37の碗は、口径15.5cm前後の口体部が内湾して立ち上がり、断面半円形を呈するタイプのもの

のである。33の高台は華奢な三角の高台である。38の碗は、口径15cm程とやや小型で扁平なものであり、口体部が内湾してやや開き気味に立ち上がるタイプのものである。高台部の粗穢痕は顕著である。39～44の碗は、口径16cm前後の扁平なものであり、口体部が内湾して丸く立ち上がるタイプのものである。高台部は粗穢痕が顕著であり、雑なものが多い。45の碗は、全体に扁平で口縁部がやや外反して開くタイプのものである。46・47の碗は、扁平で口体部が僅かに内湾して開く、厚手のタイプのものである。48の碗は、小型のものであり、口体部が内湾して立ち上がるタイプのものである。49と50の碗は、口径16.6cmと14.9cmと大きさは異なるが、口体部が直線的に開くタイプのものである。51の碗は、体部が直線的に立ち上がり、口縁部が僅かに屈曲するタイプのものである。52の碗は、扁平なものであるが、口縁部が僅かに屈曲し外反して開くタイプのものである。35・53の碗は、扁平なものであり、口体部が僅かに内湾して開くタイプのものである。高台部がかなり矮小化している。54の碗は、扁平で口縁部が僅かに外反するタイプのものである。これらの碗については、28～32・34・37～46・49～52・54・55が山茶碗Ⅱ期のもので12世紀後半から13世紀初頭の時期が考えられるが、その中でも28～31は割と口径も大きく、口縁部が僅かに外反する等、やや古い様相が窺える。矮小化した高台がつく33・35・47・48・53は山茶碗Ⅲ期のもので13世紀前半のものと考えられる。

56は、口径9.9cm、器高2.8cmを測る小皿である。口体部は僅かに内湾して、外上方に開き、口縁端部は丸く納められている。底部外面は糸切り後ナデられており、断面逆台形の高台がやや開く形で貼り付けられている。口体部内面に自然釉がみられ、見込み部分と高台下端部に重ね焼きの痕が見られる。須恵器質の焼成であり、灰色を呈する。皿山古窯跡群の山茶碗Ⅰ期のものと考えられる。

57は口径8.6cm、器高2.3cmの小皿であり、口体部は短く内湾して開き、口唇部は丸く納められている。底部外面には糸切り痕が残り、底部外周の段差が顕著に見られる。焼成は良好であり、灰色を呈する。58は口径9.8cm、器高2.5cmの小皿であり、口体部が短く内湾気味に開く。底部外面には回転糸切り痕が見られ、底部外周の段差が僅かに認められる。焼成は良好であり、灰色を呈する。59は口径8.2cm、器高2.0cmの小皿であり、口体部が短く僅かに内湾して開く。底部外面に糸切り痕が残り、底部外周に僅かに段差が認められる。底部中央に大きな疊状のものがあり、割れ目を生じている。焼成は良好で、灰色を呈する。60は口径7.7cm、器高2.0cmの小皿であり、口体部が直線的に開く。底部外面には回転糸切り痕が見られる。焼成は良好であり、灰色を呈する。61は口径8.6cm、器高1.8cmの扁平な小皿である。口体部は短く直線的に開き、口縁端部は丸く納められる。底部外面に糸切り痕が残り、やや窪む。焼成は良好で、灰白色を呈する。62は口径8.6cm、器高1.3cmの扁平な小皿が2枚重なった状態のものである。いずれも口体部が短くやや内湾して開くものあり、下のものの底部外面には糸切り痕が認められ、やや窪む形のものかと考えられる。外面に自然釉が見られ、重ね焼きの状態で融着したものである。焼成は良好であり、内面灰色、外面黄灰色を呈する。63は大きく歪んだ状態で、口径8.5～9.3cm、器高1.4～2.0cmの小皿である。口体部が短く内湾して立ち上がる。底部外面には糸切り痕が残る。内面には自然釉が付着している。焼成は良好で、灰色を呈する。64は口径8.4cm、器高1.7cmの扁平な小皿であり、口体部が短く直線的に開く。底部外面には糸切り痕が認められ、やや窪む。口縁部外面に自然釉が付着する。焼成は良好で、黄灰色を呈する。65は口径9.3cm、器高1.8cmの扁平な小皿である。口体部が僅かに内湾して開く。口縁端部は丸く納められる。底部外面には糸切り痕が認められる。焼成は良好で、灰色を呈する。57～65の小皿は、いずれも須恵器質の焼き上がりのものであり、地元の皿山窯産のものと考えられる。57～60がいわゆる小皿Aであり、61～65が小皿Bにあたるものである。57～59が山茶碗Ⅱ期のものであり、60～65の小皿は、山茶碗Ⅲ期のものと考えられる。

66は、推定口径31.5cmを測る片口鉢である。口体部は僅かに内湾して開き、口縁部が僅かに外反する。底部は欠損する。口縁の一端を方形に近い形でつまみだして、注口部を作り出している。注口部の両脇

には、指頭圧痕が認められる。体部下半外面は回転ヘラ削り調整であり、他は回転ナデ調整である。焼成は良好で、灰白色ないし黄褐色を呈する。

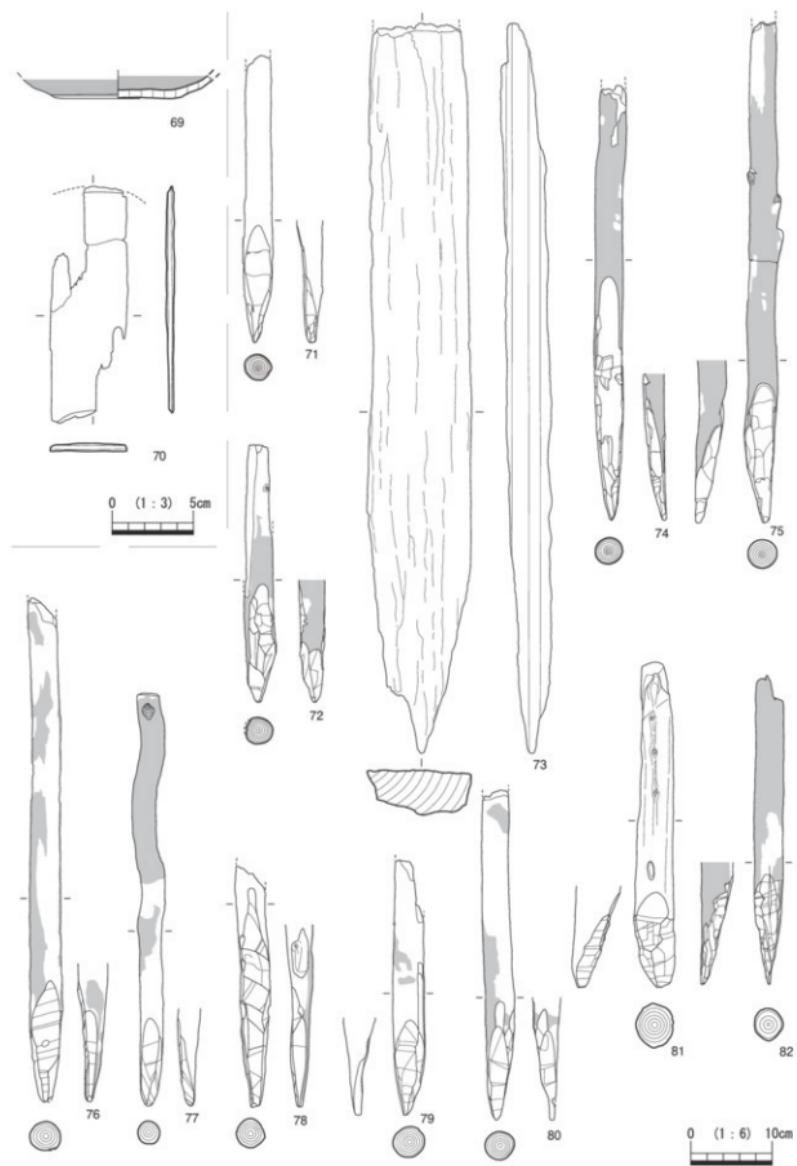
67は底径13.0cmの壺の底部と考えられるものである。平底でやや窪む形のものであり、内面は指頭によるナデであり、指頭圧痕が見られる。外面はナデ調整であり、底部近くはヘラ状のものによるナデである。

須恵器(68) 68は須恵器の大甕であり、推定口径42.2cmを測る。口縁部から肩部付近まで接合、復元できたが、破片の大半は包含層からの出土となっている。口縁部は大きく外反してラッパ状に開き、口縁端部は上下に挽き出されている。口縁部内外面は、回転ナデ調整であり、肩部外面には平行叩き目が見られる。焼成は良好であり、内面は灰白色、外面は青灰色ないし灰白色を呈する。

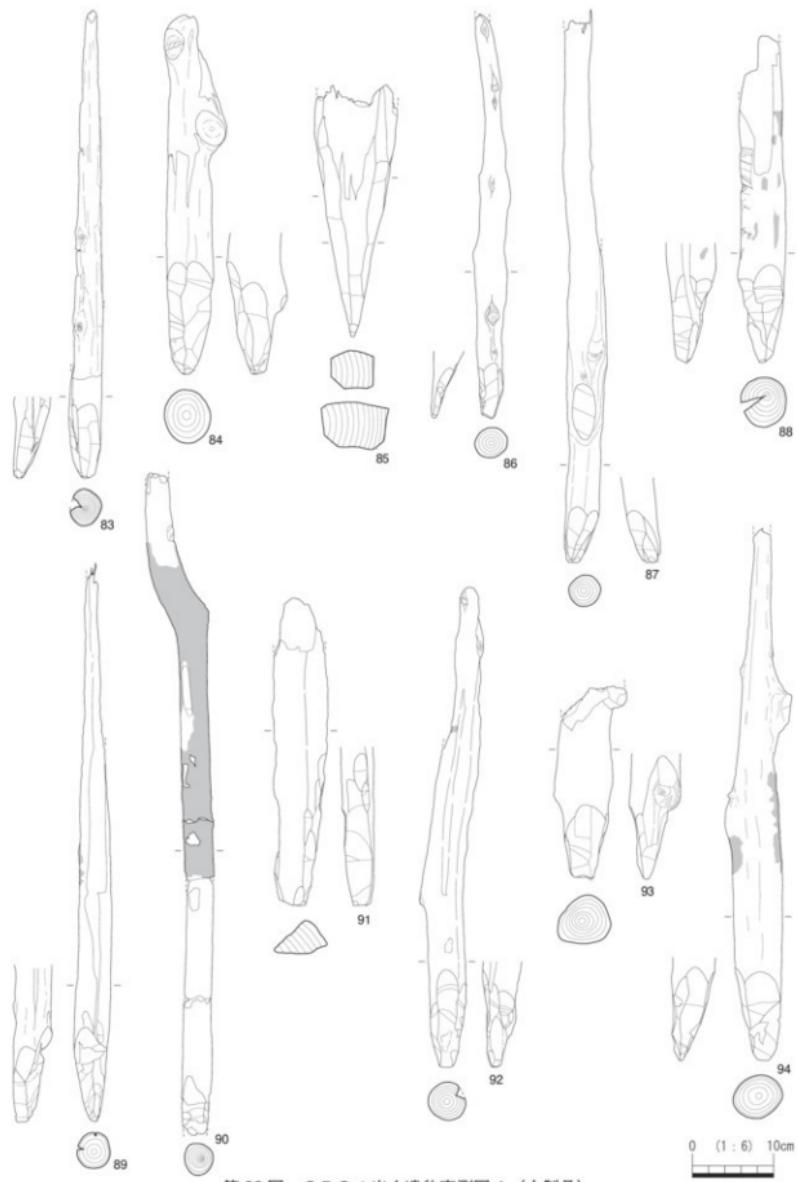
漆器(69) 69は漆塗りの椀である。底部のみの残存であり、底径8.0cmを測る。底部外縁が僅かに盛り上がり、中央部が僅かに窪んでいる。本地は緞木取りであり、本地の樹種はケヤキである。内外面に黒漆の塗膜が残っている。

曲物(70) 70はS R O 1の壺状遺構の杭列に沿った形で出土しているが、杭として使われていたものなのか、あるいは流れついたものなのか不明である。現存長14.6cm、現存最大幅4.8cmの板状のものである。一方の端部は円弧状を呈し、段状に作り出されている。他方は小さな円形を呈する形で斜めに加工されており、穴があけられていたものと考えられる。「カキゾコ」の曲物の底板の一部と考えられる。

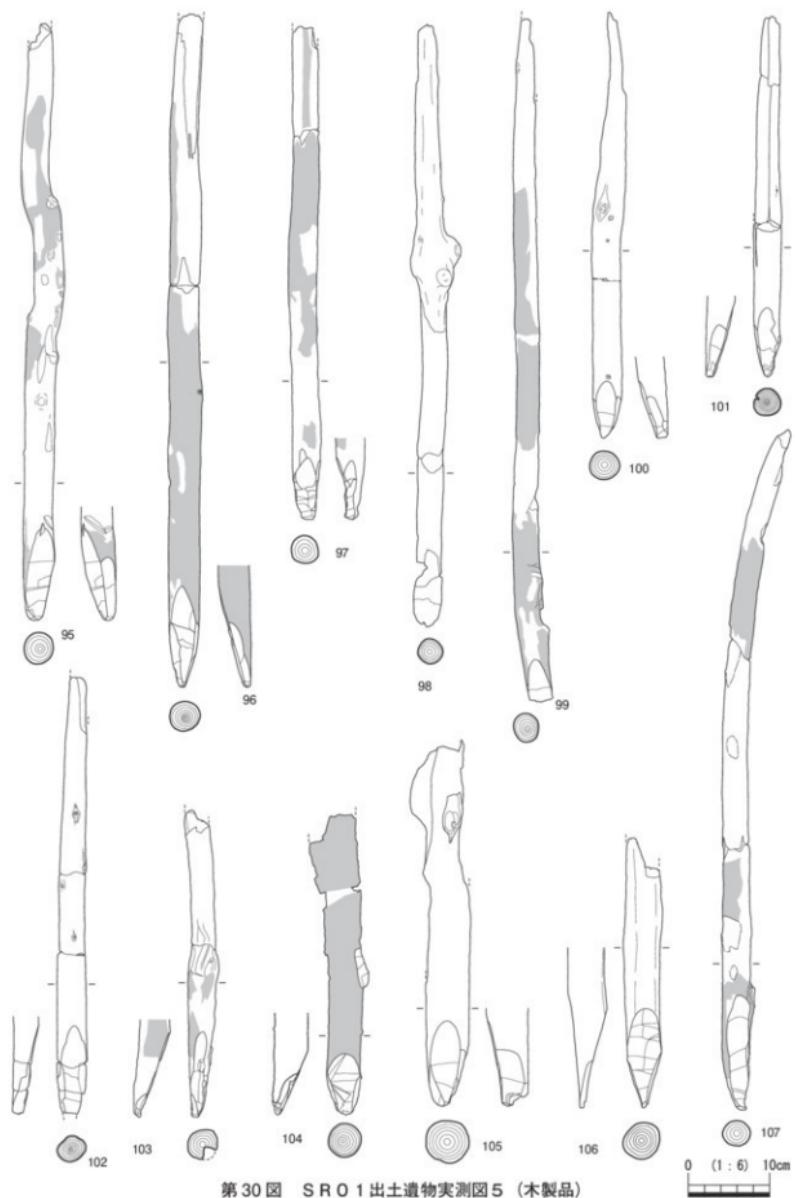
杭・板状木製品(71～107) 71～74は壺状遺構西側の試掘坑北壁部分の杭列の一部である。71は径3.2cm×3.7cm程の丸太材であり、上部を欠損、下端部の片側を鋭い刃物で斜めに削り、その後両脇を小さく削って尖らせ、杭の先端としている。樹種はクヌギ属である。72も同様、径3.2cmの細い丸太材である。下端部片側を斜めに削り、その先端部の両脇を小さく削り、杭としている。上部は欠損し、一部樹皮が残る。樹種はサカキである。73は杭列の中の横棒である。みかん割による割材であり、一方は腐食により欠損しており、他方は側面を斜めに加工し先端を尖らせているが、加工痕は明瞭ではない。樹種はクリである。74は径3.4cm×4.0cmの丸太材であり、下端部の片側を長く斜めに削り、その後先端近くの両側を削り、杭としている。上部を欠損するが、樹皮はほぼ残っている。樹種はクスノキ科Bとなっている。75～80は壺状遺構の前側の杭列のものである。77を除き、いずれも径3.5～3.9cmの丸太材である。77は径2.8cmと細い丸太材である。いずれも上部を欠損しており、75は下端部の片側を斜めに削り、その後左脇を削って、杭としている。部分的に枝を切断した個所が見られ、樹皮も残る。樹種はアワブキである。76は下端部片側を斜めに削り、両脇を小さく削って杭とするが、先端部がやや太くなるため、材の元の方を削って杭にしていると考えられる。樹皮が部分的に残る。樹種は75と同じアワブキである。77は下端部の片側を短く斜めに削り、その後右側を削って杭としている。材には樹皮が残り、部分的に屈曲する。樹種はクスノキ科Aである。78は先端部しか残されていないが、下端部の片側を長く斜めに削り、その後両脇を削って、杭としている。一部樹皮が残る。樹種はクスノキ科Aである。79は下端部の両側を短く斜めに削り、その後片側の両脇を小さく削っている。一部樹皮が残る。樹種はネジキである。80は77と同様な形で先端部を作っている。一部に樹皮が残る。樹種は77・78と同じクスノキ科Aである。81～107は壺状遺構の細かい枝木の部分に打ち込まれていた杭列のものである。85と91を除き、いずれも丸太材の一方の片側を斜めに削って尖らせ、杭としている。81・87・89・92・94・98・101・105は、径3.1～6.1cmのやや細いものからやや太いクリの丸太材で、いずれも上部を欠損する。枝を払った痕が見られるものや割れが入っているものが多い。82・106は径4.0cmと4.5cmのシャシャンボの丸太材である。82は先端部分を細かく削っており、樹皮が残る。106は下端部を両側から斜めに削っている。83・86・88・97・100はスダジイの丸太材を削って杭にしている。88が径6.1cmとやや太いが、他は径3.4～4.5cmのものである。枝を払った節の部分が見られるものが多く、部分的に樹皮が残る物があ



第28図 S R O 1 出土遺物実測図3（木製品）



第29図 S R O 1 出土遺物実測図4（木製品）



第30図 S R O 1 出土遺物実測図5（木製品）

る。84は上部を欠損するが、大きな節があり、枝を払った痕が見られる。樹種はトリネコである。85は先端部のみが残存しているが、断面長方形の削材である。4面が削面を持ち、片面の両角を斜めに削り、杭としている。樹種はクリである。90は径3.9cmの丸太材であり、途中から屈曲する。細かい枝木を払った跡があり、樹皮が残る。樹種はサカキである。91は断面三角形の削材である。樹皮の剥けた自然面を斜めに削り、杭としている。樹種はコジイである。93は径6.0cm×6.5cmのやや太い丸太材であり、大きな節が見られる。樹種は二葉松類である。95は途中屈曲する径3.6cm×3.9cmとやや細い丸太材である。樹皮が一部残り、枝を払った痕がある。樹種はクスノキ科Aである。96と107は径3.4～3.7cmの細いアワブキの丸太材である。ともに樹皮が残り、上部を欠損している。99は径3.0cm×3.6cmとやや扁平な断面の細い丸太材である。下端部の片側を斜めに鋭く削って、杭先端としている。樹種はクスノキ科Bである。103は径3.6cmほどのコジイの丸太材である。枝を払った節も見られ、一部に樹皮が残る。割れが入っている。104は径4.1cmのヤマザクラの丸太材である。枝を払った切削痕が見られ、樹皮が一部剥がれながらもよく残っている。

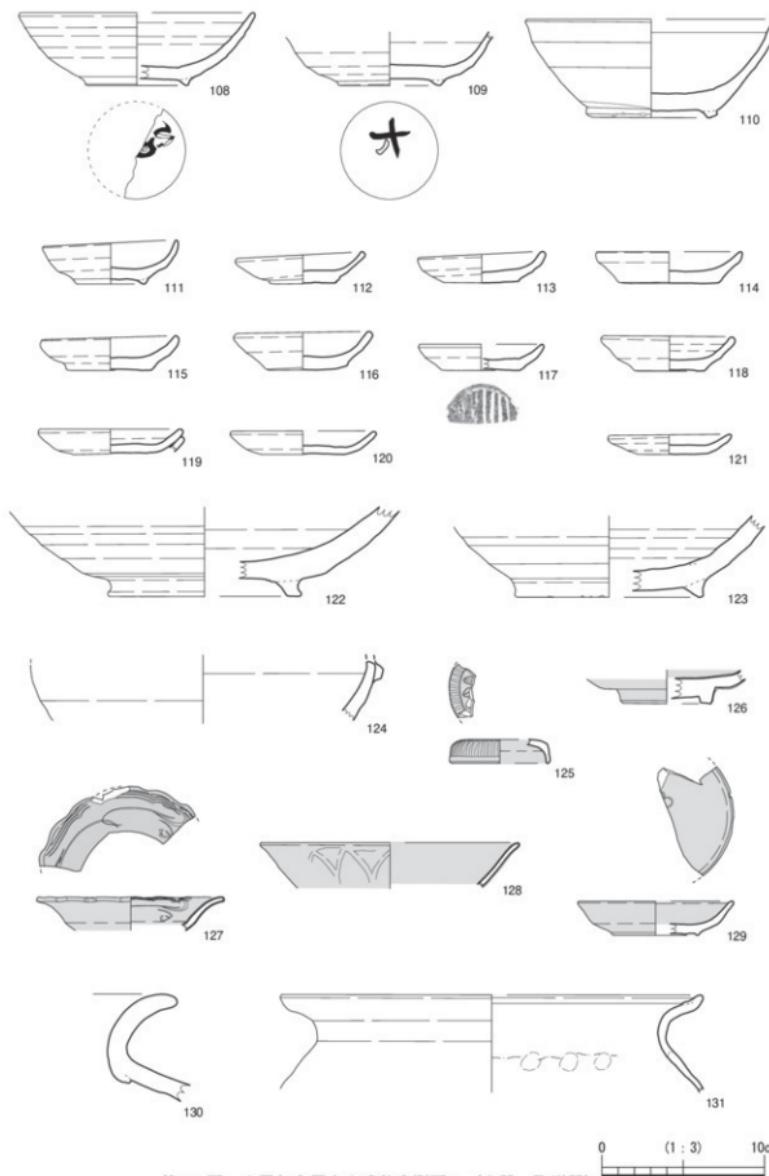
このように堰状遺構に打ち込まれた杭をみると、実に多彩な樹種のものがある。近くに生えているそれほど太くはない雑木を切り出し、枝木を払ってだけで、先端を尖らせて杭として使用している状況である。付編でも述べられているが、必ずしも堰という水利施設に適した材ばかりでなく、手近にあったものを加工して使っている様子が窺われる。

(3) 上層包含層出土の遺物

上層の遺構以外でも中世の包含層とした第4層・第5層・第6層から多くの遺物が出土している。その中には、下層からの混入と考えられる弥生土器や土師器片も見られる。こうした包含層からは、地元の皿山窯のものと考えられる山茶碗を主体に、知多窯産山茶碗(碗)、灰釉陶器(碗等)、叩き目のある須恵器甕片、青磁(碗、皿等)・青白磁(合子、碗)・青磁(碗)等の貿易陶磁、瀬戸美濃や常滑、志戸呂等の国内産陶器が出土している。瀬戸美濃のものには、天目・香炉・皿・壺・鉢等があり、古瀬戸段階のものから大窯に入る時期のものも見られる。常滑のものは、壺・壺などがある。また、志戸呂のものと考えられる天目・壺・擂鉢等がある。これらの陶磁器は細片のものが多く、形がわかるものが少なかった。この他に土師器片が多く出土しているが、細片で磨滅したものがほとんどで、あきらかに中世段階のものであると確認できるものがすくなかった。以上の古代末から中世の遺物について、破片数を第7表に区ごとにまとめてみた。包含層が厚かった2区に多くの遺物が出土していることがわかる。前述のように、土師器については、あきらかに中世段階と考えられる数を載せている。また、陶磁器については、近世以降のものも出土しているが、それらは表からはずしている。なお、個体数については、底部片の数等から推定したものである。その他、土器・陶磁器以外に包含層からは、瓦・土錐・銅製品も出土している。以下、これらの遺物の中から抽出していくつか図示したが、それらの概要について述べていく。

第7表 上層包含層出土土器・陶磁器破片数一覧表

	地元産山茶碗				知多半島産 山茶碗				渥美・浜西産 山茶碗				灰釉陶器		須恵器		貿易陶磁		国内産陶器 常滑		その他の 土器		
	碗	小碗	小皿	鉢	壺	裏	山茶碗	山茶碗	山茶碗	山茶碗	山茶碗	山茶碗	山茶碗	山茶碗	山茶碗	山茶碗	山茶碗	山茶碗	山茶碗	山茶碗	山茶碗		
3区																							
破片数	331	2	41			1	2						31	7	6	14	6	3	30かわら17 1羽茎				
個体数																							
2区	38	2	6																1				
破片数	1,036	2	136	1	26	151							47	149	16	13	9	5	38かわら11 30伊勢鏡				
個体数	124	2	46		2	3																	
1区																							
破片数	64		43		1	5							2	19			1						
個体数	12		10																				



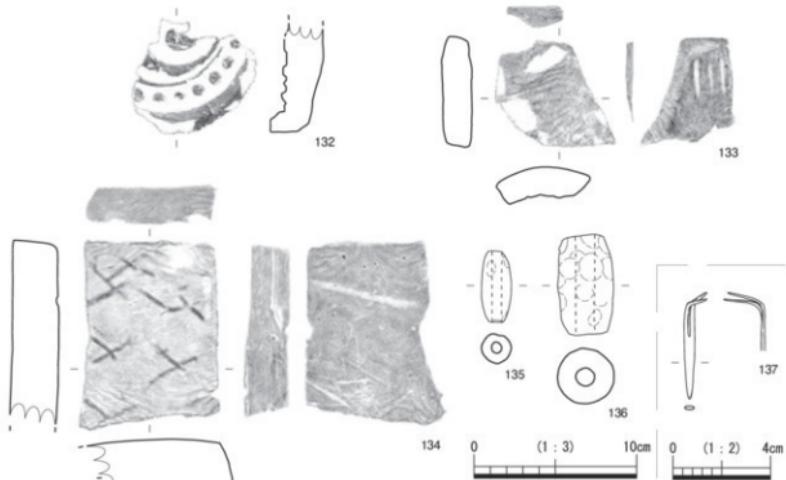
第31図 上層包含層出土遺物実測図1（土器・陶磁器）

包含層(第31・32図)

山茶碗(108～123) 108は推定口径14.3cm、器高4.5cmの碗である。体部から口縁部は僅かに内湾して外上方に立ち上がる。底部外面には糸切り痕が見られ、断面三角形の矮小化した高台が貼り付けられる。底部外面には墨書が認められ、2文字程度と思われるが、何の字であるかはっきりしない。109は碗の底部から体部下半である。体部は内湾気味に立ち上がり、底部外面には糸切り痕が認められる。断面扁平な三角形の矮小化した高台が貼り付けられている。底部外面には墨書が認められるが、一部墨痕が薄くなっている。「大」のような字であるがはっきりしない。108・109は、地元の皿山窯産のものと考えられ、山茶碗Ⅲ期にあたるものであり、13世紀前半代の時期が考えられる。110は推定口径15.2cm、器高6.0cmを測る碗である。底部は厚く、体部が直線的に立ち上がり、口縁部が僅かに外反して開く。底部外面には糸切り痕が認められ、断面方形で扁平な高台が貼り付けられる。低い割にはしっかりと造られた高台であり、下端部には粗粒痕が残る。内面見込み部分には重ね焼き痕が残る。やはり地元の皿山窯のものであり、山茶碗Ⅱ期のもので、12世紀末から13世紀初頭のものかと考えられる。111は口径8.1cm、器高2.5cmの小碗である。体部下半部は短く直線的に立ち上がり、途中屈曲して口縁部は内湾して上方に立ち上がる。底部外面は糸切り後ナデられており、断面三角形の華奢な高台が貼り付けられる。皿山窯産のものであり、山茶碗Ⅰ期の新しい段階のものかと考えられる。112～121は小皿である。112は口径7.6cm、器高1.8cmを測るものであり、口体部が短く開き、口縁端部がやや肥厚する。底部外面には糸切り痕が残り、やや厚くなり外縁が段状を呈する。113は口径7.5cm、器高1.8cmを測るものであり、口体部が短く内湾気味に立ち上がる。底部外面には糸切り痕が見られ、やや厚くなり外縁がわずかに段状を呈する。114は推定口径8.8cm、器高2.0cmを測るものである。底部外面に糸切り痕が残り、底径が比較的大きい。外縁の段差は明瞭ではない。115は口径8.5cm、器高2.0cmのものであり、口体部は短く内湾気味に屈曲して立ち上がる。底部外面に糸切り痕が見られ、底部が厚く外縁が段状を呈する。116は口径8.1cm、器高2.3cmを測るものであり、口体部は僅かに内湾して短く立ち上がる。底部外面に糸切り痕が見られ、外縁が僅かに段状を呈する。117は推定口径7.5cm、器高1.6cmを測るものであり、口体部がごく短くかすかに内湾して開く。底部にはスノコ状の痕跡が残る。118は口径7.8cm、器高2.2cmを測るものであり、口体部は短く直線的に開き、口縁端部は丸く納められる。底部外面には糸切り痕が見られ、底部はやや厚く外縁が僅かに台状を呈す。119は口径8.5cm、器高1.5cmのものであり、口体部は短く開く扁平な器形である。底部外面は糸切り痕が見られ、底部と体部の境ははっきりしない。重ね焼きの他の個体片が付着する。120も口径9.0cm、器高1.4cmのものであり、口体部は短く内湾気味に低く立ち上がる扁平な器形である。底部外面に糸切り痕が見られ、底径が広いものとなっている。121は口径7.4cm、器高1.2cmのもので、口体部はごく短く直線的に開く扁平な器形である。底部外面に糸切り痕が残る。112～121の小皿は、いずれも灰白色ないしは灰色を呈する須恵器質のものであり、地元の皿山窯産のものと考えられる。112～116・118が山茶碗Ⅱ期のものと考えられるが、112・113・116がやや新しいものかと考えられる。117・119～121は山茶碗Ⅲ期のものと考えられる。122は鉢の底部である。底部から体部下半にかけて内湾気味に開く。底部外面には断面方形の高台が貼り付けられるが、端部がやや外に開く。全体に回転ナデ調整であるが、体部下半外面に回転ヘラ削り調整が見られる。灰色を呈する須恵器質の焼き上がりであり、地元の皿山窯のものと考えられる。123の鉢の底部片であるが、底部から体部下半にかけて内湾気味に開く。底部には断面三角形を呈する高台が貼り付けられる。灰白色ないし灰色を呈する焼き上がりがあり、やや大きな白色砂粒を含む胎土である。知多窯産のものと考えられる。

灰釉陶器(124) 124は一応灰釉陶器としたが、破片であり器形がはっきりとしないものである。一方の端部外面には箱型の突起があり、一部穿孔されたように端部が成形されている。

貿易陶磁(125～128) 125は青白磁の合子の蓋である。推定口径6.2cm、器高1.5cmのものであり、外面



第32図 上層包含層出土遺物実測図2(瓦・土器・銅製品)

天井部には葉状の文様が、また側面には縦の平行線の文様が浮彫にされている。126は青磁の碗の底部である。断面方形の高台が削り出されており、底部外面を除き、灰オリーブ色の釉薬が厚く施される。127は口径11.6cm程の青磁の皿の口縁部である。口縁部は外反して開き、口縁端部は波状を呈する。口縁部内面には、三条の線が施され、さらにその下には刻花文状の文様が見られる。外面にくすんだオリーブ灰色の釉が施される。128は青磁の碗の口縁部である。口部は直線的に開き、口縁端部が僅かに外反する。外面には連弁文が施されている。外面にオリーブ灰色の釉が施される。

国内産陶器(129・130) 129は瀬戸美濃産の端反皿であり、推定口径9.6cmを測る。口部は体部下半で屈曲し、口縁部は外反して開く。底部にはごく小さな高台が作られている。浅黄色を呈する釉薬が薄く施されており、内面中央に花かと思われる文様が見られる。時代的には新しく大窯第1段階のものと考えられる。130は常滑産の甕の口縁部である。大きく屈曲して開き、口縁端部は丸く納められている。口縁部外面には、横方向に刷毛状の筋が見られ、外面に暗オリーブ色の釉がかかる。他に肩部と考えられる同一個体が出土しているが、それには「回」の字状や平行文状の叩き目が見られ、やはり暗オリーブ色を呈する釉がかかっている。

土器(131) 131は伊勢系鍋の口縁部片である。口縁部は外反して開き、口縁端部は折り返して押さえられ、内上方に屈曲する。外面には煤が付着している。南伊勢系鍋第1段階頃のものと考えられる。

瓦(132～134) 132は巴文の軒丸瓦の瓦当部分の破片である。巴文の尾は長く延び、外縁部内側が斜めに削られている。133は丸瓦の破片である。全体的に磨減しておりはっきりしないが、凸面及び側面はケズリ調整と思われる。134は平瓦であるが、凸面に斜格子状の叩き目痕が残る。

土錘(135・136) 135は長さ4.4cm、最大径1.8cmで、指頭圧痕が確かに認められる。136は長さ5.2cm、最大径3.4cmのもので、指頭圧痕が顕著である。須恵器質の焼成である。

銅製品(137) 137はピン状のもので、中央から二股となり、他方の端部は尖った形となる。

第8表 上層遺構・包含層出土遺物観察表1（土器）

種別 番号	国版 番号	調査 区	グリッド	遺物名	部位	種類	形態	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	器高 (cm)	色調	備考
24-1	番号	3区	D-4	S001	遺構第3層	山茶碗	碗	35%	(16.0)	(9.6)	5.1	N6~灰		
24-2	122	3区	D-5	S001	遺構第3層	山茶碗	碗	95%	15.4	7.7	5.0	10Y37/3	にじみ黄緑	
24-3	123	2区	D-6	S001	遺構第2層	山茶碗	碗	80%	15.8	7.2	5.2	N6~灰		
24-4	-	3区	D-4.5	S001	遺構第1層	山茶碗	碗	30%	(16.2)	7.8	5.0	N6~灰		
24-5	-	3区	D-3	S001	遺構第5層	山茶碗	碗	50%	-	8.2	(4.3)	5Y6/1	灰	
24-6	-	3区	D-5	S001	遺構第5層	山茶碗	碗	30%	(14.8)	(6.2)	5.6	25Y6/1	黄灰	
24-7	-	3区	D-4	S001	遺構第3層	山茶碗	碗	10%	(15.2)	(7.5)	5.1	5Y6/1	灰	
24-8	-	3区	D-3	S001	遺構第1層	山茶碗	碗	40%	-	6.8	(3.0)	NS~白		
24-9	-	3区	D-5	S001	遺構第1層	山茶碗	碗	40%	-	6.2	(3.2)	7.5Y6/1	灰白	悪善
24-10	124	3区	D-5	S001	遺構第1層	山茶碗	碗	15%	-	(6.2)	(4.5)	N7	灰白	
24-11	-	3区	D-2	S001	遺構第2層	山茶碗	碗	15%	(15.6)	(8.3)	5.8	10Y88/1	灰白	
24-12	-	3区	D-3	S001	遺構第1層	山茶碗	小皿	30%	-	4.1 (0.8)	(1.1)	10Y7/1	灰白	悪善
24-13	-	3区	D-4.5	S001	遺構第1層	山茶碗	小皿	30%	-	(4.4)	(1.0)	N7	灰	悪善
24-14	125	3区	D-5	S001	遺構第2層	山茶碗	小皿	99%	2.6	4.3	2.9	N6~灰		
24-15	126	3区	D-3	S001	遺構第2層	山茶碗	小皿	100%	7.3	3.7	1.7	7.5Y7/1	灰白	
24-16	-	2区	D-6	S001	遺構第2層	山茶碗	小皿	50%	(8.0)	(4.0)	1.7	N6~灰		
24-17	127	3区	D-2	S001	遺構第3層	山茶碗	小皿	80%	8.5	4.8	1.6	5Y6/1	灰	
24-18	128	3区	D-5	S001	遺構第1層	山茶碗	小皿	99%	9.4	4.9	1.6	N6~灰		
24-19	129	3区	D-5	S001	遺構第5層	山茶碗	小皿	95%	8.1 ~ 9.0	5.0	1.1 ~ 2.2	N6~灰		
24-20	1210	3区	D-3	S001	遺構第3層	山茶碗	片口鉢	5%	(28.0)	-	(7.6)	N6~灰		
24-21	1211	3区	D-3	S001	遺構第5層	山茶碗	鉢	(20%)	(26.4)	-	(8.7)	25Y6/1	黄灰	
24-22	-	3区	D-3	S001	遺構第2層	山茶碗	鉢	30%	-	(6.7)	(2.4)	10Y88/1	灰白	
26-28	1213	2区	C-8	S001	遺構第1層	山茶碗	鉢	90%	16.9	6.1	6.3	5Y7/1	灰白	
26-29	1214	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	鉢	90%	16.1	7.0	5.5	N7	灰白	
26-30	1215	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	鉢	40%	(16.5)	(6.9)	5.4	N6~灰		
26-31	-	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	鉢	40%	(16.6)	(7.2)	5.8	25Y5/1	黄灰	
26-32	1216	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	鉢	60%	(15.8)	7.0	6.2	5Y6/1	灰	
26-33	131	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	鉢	70%	15.7	7.3	5.4	N6~灰		
26-34	132	2区	C-7	S001	遺構1層	山茶碗	鉢	30%	(15.0)	(7.1)	6.3	25Y6/1	灰白	
26-35	133	2区	C-8	S001	遺構第1層	山茶碗	鉢	98%	14.7	6.0	4.3	5Y6/1	灰	
26-36	-	2区	C-7	S001	遺構第1層	山茶碗	鉢	40%	-	6.7	(2.0)	7.5Y87/4	にじみ黄	悪善
26-37	134	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	鉢	98%	15.4	8.4	5.4	5Y6/1	灰	
26-38	-	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	鉢	30%	(15.2)	(7.4)	5.2	NS~灰		
26-39	135	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	鉢	90%	16.3	8.0	5.8	NS~灰		
26-40	136	2区	C-7-8	S001	遺構12層	山茶碗	鉢	70%	16.2	7.4	6.0	NS~白		
26-41	137	2区	D-8	S001	遺構第2層	山茶碗	鉢	40%	(15.8)	6.9	5.9	N7	灰白	
26-42	138	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	鉢	98%	15.7	8.0	5.5	5Y6/1	灰	
26-43	139	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	鉢	98%	15.4	8.0	6.0	5Y6/1	灰	
26-44	1310	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	鉢	40%	(15.6)	6.9	5.4	N6~灰		
26-45	1311	2区	C-8	S001	遺構1層	山茶碗	鉢	30%	(15.6)	(7.7)	5.7	N6~灰		
26-46	1312	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	鉢	75%	15.5	7.0	5.9	10Y6/1	灰	
26-47	1313	2区	C-8	S001	遺構1層	山茶碗	鉢	70%	15.2	6.4	5.0	N7~灰白		悪善
26-48	1314	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	鉢	70%	(14.4)	6.5	5.3	7.5Y6/1	灰	
27-49	141	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	鉢	80%	16.6	8.4	6.1	10Y6/1	灰	
27-50	142	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	鉢	80%	14.9	7.2	5.9	N6~灰		
27-51	143	2区	C-8	S001	遺構第1層	山茶碗	鉢	70%	16.6	7.0	6.2	N6~灰		
27-52	144	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	鉢	50%	(15.6)	7.0	5.3	NS~灰		
27-53	145	2区	C-7	S001	遺構第1層	山茶碗	鉢	50%	(15.1)	6.8	4.7	25Y6/1	黄	
27-54	146	2区	D-8	S001	遺構第1層	山茶碗	鉢	80%	(15.1)	6.6	5.3	7.5Y6/1	灰	
27-55	147	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	鉢	35%	(14.6)	(7.4)	5.3	7.5Y6/1	灰	
27-56	148	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	小皿	65%	9.9	5.2	2.8	N6~灰		
27-57	-	2区	C-8	S001	遺構第1層	山茶碗	小皿	30%	(8.6)	(4.0)	2.3	25Y7/1	灰	
27-58	149	2区	D-8	S001	遺構第2層	山茶碗	小皿	70%	9.8	6.0	2.5	N6~灰		
27-59	1410	2区	D-6	S001	遺構第2層	山茶碗	小皿	99%	8.2	4.7	2.0	N6~灰		
27-60	1411	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	小皿	100%	7.7	4.0	2.0	5Y6/1	灰	
27-61	1412	2区	D-8	S001	遺構第2層	山茶碗	小皿	65%	8.6	5.0	1.8	5Y7/1	灰白	
27-62	1413	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	小皿	60%	8.6	(3.6)	1.3	25Y4/1	黄	
27-63	1414	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	小皿	90%	8.5 ~ 9.3	4.7	1.4 ~ 2.0	5Y6/1	灰	
27-64	1415	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	小皿	80%	8.4	4.3	1.7	25Y6/1	黄	
27-65	1416	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	小皿	90%	9.3	5.0	1.8	N6~灰		
27-66	151	2区	C-8	S001	遺構第2層	山茶碗	片口鉢	25%	(31.9)	-	(9.8)	25Y5/1	黄	
27-67	-	2区	C-8	S001	遺構第1層	山茶碗	蜜	(15%)	-	(13.0)	(6.7)	5Y6/1	灰	
27-68	152	2区	C-8-9	S001	遺構第1層	山茶碗	蜜	(10%)	(42.9)	-	(13.6)	N7~灰白		

第9表 上層遺構・包含層出土遺物觀察表2（土器・陶磁器）

桜岡 番号	国版 番号	調査 区	グリッド	遺構名	層位	種類	形種	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	厚さ (cm)	色調	備考
31-108	15-3	2区	D-7	上層混合層	山茶碗	碗	50%	(14.0)	(6.0)	4.5	N7/ 灰白	墨書き	
31-109		2区	C-7	上層混合層	山茶碗	碗	35%	-	6.0	(3.3)	N7/ 灰白	墨書き	
31-110	15-4	3区	D-3	上層混合層	山茶碗	碗	55%	(15.2)	7.0	6.0	N6/ 灰		
31-111	15-5	2区	C-8	上層混合層	山茶碗	小盤	80%	8.1	4.1	2.5	N6/ 灰		
31-112	15-6	2区	C-8	上層混合層	山茶碗	小盤	70%	7.6	4.1	1.8	N6/ 灰		
31-113	15-7	2区	C-7B	上層混合層	山茶碗	小盤	80%	7.5	4.6	1.8	23Y8/1 灰白		
31-114	15-8	2区	C-8	上層混合層	山茶碗	小盤	50%	(8.8)	6.1	2.0	5Y8/1 灰白		
31-115	15-9	3区	D-5	上層混合層	山茶碗	小盤	99%	8.5	5.2	2.0	5Y7/1 灰白		
31-116	15-10	2区	C-7B	上層混合層	山茶碗	小盤	60%	8.1	5.0	2.3	N7/ 灰白		
31-117		2区	D-8	上層混合層	山茶碗	小盤	45%	(7.5)	4.8	1.6	N6/ 灰		
31-118	15-11	2区	B-8	上層混合層	山茶碗	小盤	75%	7.8	4.3	2.2	N6/ 灰		
31-119	15-12	2区	C-9	上層混合層	山茶碗	小盤	70%	8.5	4.6	1.5	N7/ 灰白	2枚組	
31-120		2区	C-8	上層混合層	山茶碗	小盤	40%	(9.0)	(5.1)	1.4	10Y8/1 灰白		
31-121	15-13	2区	D-7	上層混合層	山茶碗	小盤	99%	7.4	4.2	1.2	N6/ 灰		
31-122		2区	C-9	上層混合層	山茶碗	鉢	15%	-	(11.9)	(5.5)	N6/ 灰		
31-123		3区	D-5	上層混合層	山茶碗	鉢	15%	-	(11.6)	(5.0)	5Y6/1 灰		
31-124	15-14	2区	C-9	上層混合層	灰釉陶器	?	10%	-	-	(3.6)	23Y7/1 灰白		
31-125		2区	C-9	上層混合層	貿易陶器	合子	10%	(6.2)	-	1.5	釉 75Y7/7 明細灰	青白地	
31-126		2区	C-6	上層混合層	貿易陶器	碗	5%	-	(5.7)	(2.1)	釉 5Y6/2 オリーブ灰	青地	
31-127	2, 3区	C-7D5	TP3	上層混合層	貿易陶器	皿	15%	(11.6)	-	(2.1)	釉 10Y6/2 オリーブ灰	青地	
31-128		2区	D-7	上層混合層	貿易陶器	碗	5%以下	(16.0)	-	(2.8)	釉 10Y5/2 オリーブ灰	青地	
31-129		2区	C-8	上層混合層	陶器	小盤	30%	(9.6)	(5.2)	2.1	釉 25Y7/4 浅黄	漸け美濃	
31-130	15-15	2区	D-7	上層混合層	陶器	甕	9%以下	-	-	(6.6)	釉 75Y4-3 姫オリーブ	青地	
31-131	15-16	2区	C-8	上層混合層	土器	伊勢鍋	5%以下	(26.0)	-	(21.4)	75Y8/2 灰陶		

第10表 上層遺構・包含層出土遺物觀察表3（土錘・瓦）

桜岡 番号	国版 番号	調査 区	グリッド	遺構名	層位	種類	形種	残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	色調	備考
32-132	15-17	2区	C-9	上層混合層	土製品	軒丸瓦	10%	(6.7)	11.6	(2.4)	N7/ 灰白		
32-133		3区	D-4	上層混合層	土製品	丸瓦	5%	(6.8)	(5.8)	(1.8)	23Y7/2 黄茶		
32-134		2区	C-8	上層混合層	土製品	平瓦	25%	(11.5)	(6.8)	2.9	N7/ 灰白		
32-135	15-18	3区		神土	土製品	土鍋	80%	4.4	1.8	1.8	75Y7/1 灰白		
32-136	15-19	2区	C-9	上層混合層	土製品	土鍋	100%	5.2	3.4	3.4	N5/ 灰		

第11表 上層遺構・包含層出土遺物觀察表4（錢貨・銅製品）

桜岡 番号	国版 番号	調査 区	グリッド	遺構名	層位	種類	形種	残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
24-23	15-12	3区	D-5	S001	遺構第1層	金属製品	錢貨	70%	2.5	-	0.1	「天豐元寶」
32-137	15-20	3区	D-6		包含層	金属製品	不明	100%	(4.4)	0.4	0.2	銅鋳品

第12表 上層遺構・包含層出土遺物観察表5(木製品)

地図番号	測量番号	調査区	グリッド	遺物名	層位	種類	形状	側面	断面	本取り	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
25-24	16-12	3区	D-4	S801	遺構第3層	容器・食事具・復物	漆碗	ケヤキ	蘆木取り 板口	高台深7.2 漆高3.8	0.8	黒漆		
25-25	165	3区	D-5	S801	遺構第3層	器具の一部	器具の一部	スギ	板口	(9.2)	(7.2)	2.3		
25-26	164	3区	D-5	S801	遺構第3層	容器	曲物底板	スギ	板口	(32.2)	(6.4)	0.5	径(34.0)	
25-27	168	3区	D-5	S801	遺構第3層	板材	イヌマキ属	追板口	(99.7)	167	4.3			
28-69	16-34	2区	D-8	S801	上層包含層	容器・食事具・復物	漆碗	ケヤキ	蘆木取り 板口	漆径8.0 漆高8.0	1.4	0.4	黒漆	
28-70	167	2区	C-8	S801	遺構第1層	容器	曲物底板	スギ	板口	(146)	4.8	0.5		
28-71	171	2区	C-7	S801	遺構第1層	土木材	杭	クヌギ箆	芯持材	(35.3)	径32×4.0			
28-72	171	2区	C-7	S801	遺構第1層	土木材	杭	サカキ	芯持材	(31.6)	径32			
28-73	169	2区	C-7	S801	遺構第1層	土木材	杭	クリ	裏柑頭材	(89.9)	129	5.6		
28-74	171	2区	C-7	S801	遺構第1層	土木材	杭	クスノキ料B	芯持材	(53.5)	径34×4.0			
28-75	171	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	アワブキ	芯持材	(61.6)	径35×3.7			
28-76	171	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	アワブキ	芯持材	(61.9)	径35×3.8			
28-77	171	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	クスノキ料A	芯持材	508	径28			
28-78	171	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	クスノキ料A	芯持材	(297)	径46			
28-79	171	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	ネジキ	芯持材	(31.4)	径37			
28-80	171	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	クスノキ料A	芯持材	(406)	径35			
28-81	172	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	クリ	芯持材	400	径46×5.5			
28-82	172	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	シャンパンボ	芯持材	(380)	径40			
29-83	172	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	スダジイ	芯持材	(57.5)	径39×4.6			
29-84	172	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	トネリコ属	芯持材	(44.3)	径57×6.6			
29-85	172	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	クリ	削材	(30.1)	102	58		
29-86	172	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	スダジイ	芯持材	(49.7)	径38×4.0			
29-87	172	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	クリ	芯持材	(66.0)	径38			
29-88	172	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	スダジイ	芯持材	(403)	径61			
29-89	172	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	クリ	芯持材	(68.7)	径41×4.5			
29-90	181	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	サカキ	芯持材	(81.5)	径39			
29-91	181	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	コジイ	裏柑頭材	(37.8)	6.5	4.1		
29-92	181	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	クリ	芯持材	590	径47			
29-93	181	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	二葉松類	芯持材	(23.7)	径6.0×6.5			
29-94	181	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	クリ	芯持材	(65.4)	径53×6.1			
30-95	181	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	クスノキ料A	芯持材	(73.4)	径36×3.9			
30-96	181	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	アワブキ	芯持材	(82.9)	径37			
30-97	181	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	スダジイ	芯持材	(606)	径34			
30-98	181	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	クリ	芯持材	(74.0)	径31			
30-99	182	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	クスノキ料B	芯持材	(840)	径30×3.6			
30-100	182	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	スダジイ	芯持材	(52.3)	径35×3.7			
30-101	182	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	クリ	芯持材	(44.3)	径34			
30-102	182	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	スダジイ	芯持材	(53.7)	径32×3.6			
30-103	182	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	コジイ	芯持材	(37.7)	径36			
30-104	182	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	ヤマダクラ	芯持材	(37.0)	径41			
30-105	182	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	クリ	芯持材	(450)	径5.3×5.8			
30-106	182	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	シャンパンボ	芯持材	(332)	径45			
30-107	182	2区	C-8	S801	遺構第1層	土木材	杭	アワブキ	芯持材	(837)	径31×3.4			

2 下層の出土遺物

(1) 遺物の出土状況

この時期の遺構としたSD12からは奈良・平安時代の土師器が、またSD10・SD11・SX03・SX04からは弥生時代後期の土器が出土している。特にSD10は、弥生土器が集中して出土している。なお、前述したが、中世の遺構であるSD01から弥生土器や古墳時代の土師器が多く出土しているが、包含層からの流れ込みと考えた。この他、下層の包含層とした3区を中心広がる第7層(鉄分を含む黒褐色シルト土層)・第8層(鉄分を含む褐色シルト土層)・第9層(鉄分を少量含む暗褐色シルト層)及び1区を中心とした第10層(褐色土混じりの灰黄褐色シルト層)から弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の土器が出土している。以下、古墳時代～奈良・平安時代のものと弥生時代以前のものとに分けてその概要を述べる。

(2) 古墳時代から古代の出土遺物

包含層及び遺構から出土したものをいくつか図示したが、その多くを占める土師器はほとんどが細片で、また磨滅しており、形を復元できたものは少なかった。遺構に伴うものとしては、SD12とした自然流路かと考えられる溝状遺構からのものがある。奈良・平安時代の遺物は、どちらかというと1区の包含層から出土しており、古墳時代のものは3区の包含層から出土している。

SD12(第33図)

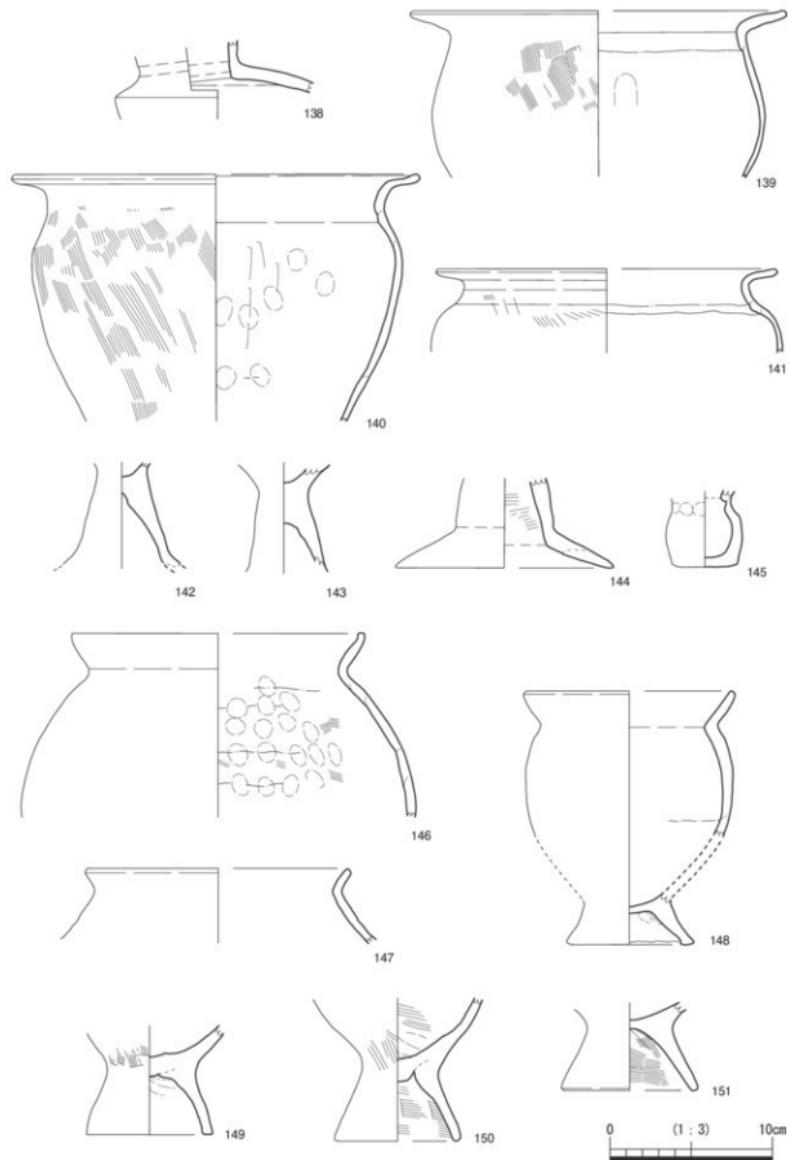
土師器(139・140) 139は口縁部が横方向に開くタイプの長胴壺である。胴部上位に最大径を持つ形となる。推定口径23.0cm、推定胴部最大径20.4cmを測る。口縁部はナデ調整であり頭部の内側には、接合痕が残る。胴部外面には斜位のハケ目調整が見られ、内面はナデ調整で指頭圧痕が見られる。焼成は良好であり、橙色を呈する。140も口頭部が屈曲して横方向に開くタイプの長胴壺である。胴部下半から底部を欠損するが、口径25.2cm、胴部最大径22.9cmを測るやや大型のものである。口縁端部はわずかに上方に屈曲し、肥厚する。胴部最大径を肩近くに持ち、肩部分がやや膨らむものである。口縁部は横ナデ、頭部下半から胴部外面は斜位のハケ目調整が見られる。内面はヘラ状工具による横方向のナデ調整かと思われ、指頭圧痕が見られる。焼成は良好であり、橙色を呈する。いずれも静岡県中西部を中心に分布する長胴壺であり、奈良時代後半頃のものかと考えられる。

包含層(第33図)

須恵器(138) 138は、1区の包含層から出土した平瓶である。頭部から肩部にかけての破片である。肩部部分は丸身を持ち、やや径の大きい頭部が中心から離れて接合されている。肩部と胴部の境の稜はあまり鋭いものではない。全体的に回転ナデ調整が施されており、口縁部から肩部外面には、灰オーリーブ色の釉を被っている。奈良時代頃のものかと考えられる。

土師器(141～151) 141は推定口径21.0cmの長胴壺である。口縁部が強く横に開くタイプのものである。胴部最大径をその上位に持つものと考えられる。全体的に磨滅が激しい。口縁部は横ナデで、胴部外面には斜め方向のハケ目調整が見られる。胴部内面はナデ調整である。肩部と頭部の境付近内面には、接合痕が見られる。奈良時代後半頃のものかと考えられる。

142～151は古墳時代の土師器であり、146が3区のSD01の下層から出土している他は、3区のD2及びD5グリッドの古墳時代の包含層とした土層から出土している。142・143・144は高坏の脚部である。いずれも基部から裾部に向かって緩やかに開き、途中で外に強く屈曲して裾部が大きく聞く形のものである。全体に磨滅が激しく、調整がはっきりしないが、142は外面はナデ調整、脚内面は板状のものによるナデかと思われる。143は全体的に磨滅が激しく、はっきりしないが、ナデ調整かと思われる。144は内面に横方向のハケ目が見られる。外面ははっきりしないが、ハケ目調整の後ナデか。142～144の高坏については、古墳時代中期のものと考えられる。145はミニチュアの壺型土器であり、底部は平



第33図 SD 12 及び下層包含層出土遺物実測図（須恵器・土師器）

第13表 下層構造・下層包含層出土遺物観察表1（土器）

神奈 奇号	国版 番号	調査 区	グリッド	遺構名	部位	種類	形種	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	厚高 (cm)	色調	備考
33-138		1区	A-11	下層包含層 (排水溝)	須志器	平瓶	壺	(5%)	-	-	(4.8)	7.5Y5/2 地オリーブ	
33-139		1区	C-11	SD12	土師器	壺	(5%)	(21.0)	-	-	(10.3)	GYR6/6 棕	須志器大径(26.1)
33-140	19-1	1区	C-11.12	SD12	遺構第1層	土師器	壺	40%	25.2	-	(15.2)	GYR6/4 地ぶい根	須志器大径22.9
33-141	19-2	1区	C-12	下層包含層	土師器	壺	(10%)	(21.0)	-	-	(5.1)	GYR4/2 地黒	
33-142	19-3	2区	D-4	SD01	遺構第2層	土師器	高杯	(10%)	-	-	(6.4)	10Y3R3-3 浅黄褐	
33-143	19-4	2区	D-5	SD01	遺構第2層	土師器	高杯	(10%)	-	-	(6.6)	7.5YR7/4 地ぶい根	
33-144	19-6	3区	D-5	下層包含層	土師器	高杯	(10%)	-	(13.4)	-	(5.2)	GYR7-6 棕	
33-145	19-5	3区	D-5	下層包含層	土師器	小型壺	80%	-	4.9	(4.7)	7.5YR7/4 地ぶい根		
33-146	19-7	3区	D-2	SD01	遺構第3層	土師器	壺	(20%)	(18.0)	-	(11.3)	7.5YR6/4 地ぶい根	須志器大径(23.3)
33-147		3区	D-2	下層包含層	土師器	壺	(10%)	16.0	-	-	(4.4)	7.5YR7/4 地ぶい根	
33-148		3区	D-5	下層包含層	土師器	台付壺	40%	(13.0)	7.8	(15.6)	10Y3R7/2 地ぶい根		
33-149	19-8	3区	D-2	下層包含層	土師器	台付壺	(10%)	-	7.8	(6.7)	7.5YR7/4 地ぶい根		
33-150	19-9	3区	D-5	下層包含層	土師器	台付壺	(10%)	-	7.8	(8.6)	10Y3R6-3 地ぶい根		
33-151	19-10	3区	D-2	下層包含層	土師器	台付壺	(10%)	-	7.8	(5.4)	GYR6/3 地ぶい根		

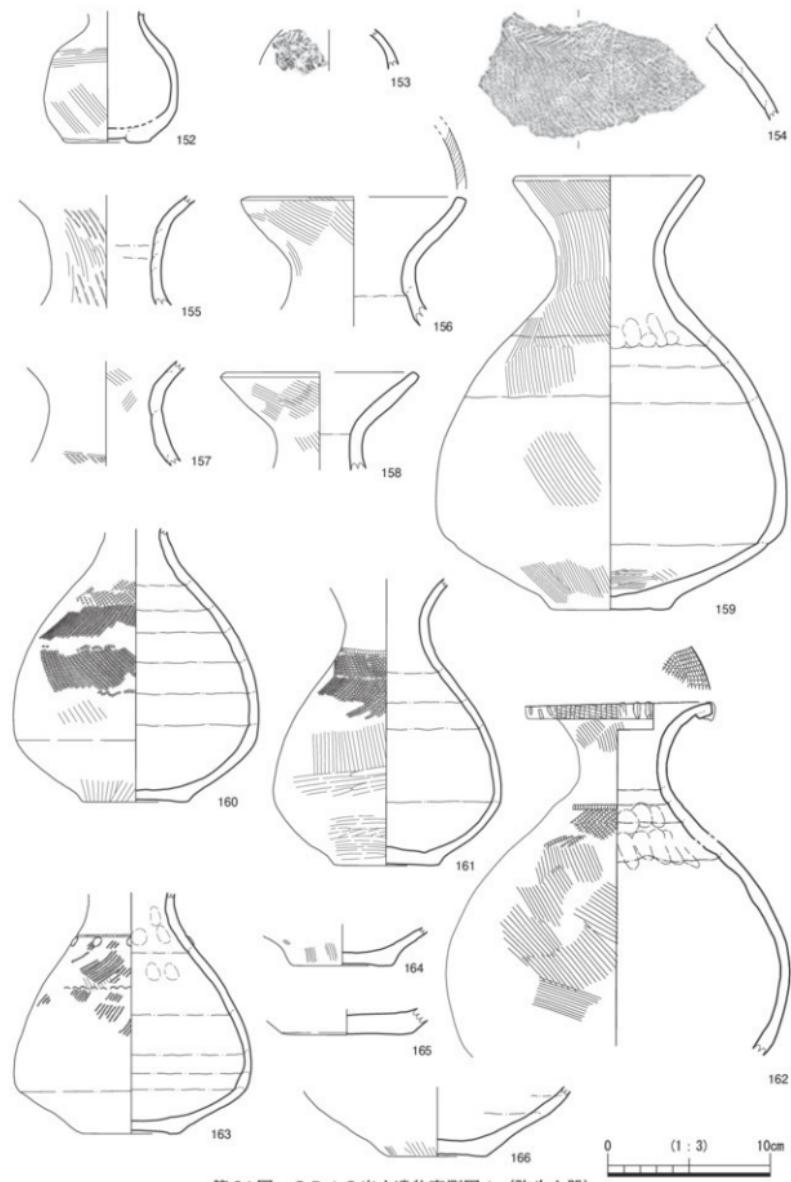
底を呈し、胴部はやや膨らむ。頸部がすぼむ形を呈するが、口縁部を欠く。全体にナデられており、頸部外面に指頭圧痕が見られる。頸部内側が窪んでおり、口縁部との接合痕が残る。前述の高杯と同様、比較的大きな砂粒を含む。古墳時代中期頃のものと考えられる。146は推定口径18.0cm、胴部最大径24.3cmを測る壺である。口縁部は外上方に開き、端部が内側に肥厚する。胴部は球形に膨らんでいる。口縁部は横ナデ、胴部外面はハケ目調整後ナデ、内面は横位のハケ目調整の後ナデ、指頭圧痕が見られる。大粒の白色粒子を含む胎土である。147は壺の口頭部片である。口縁部は短く直線的に外上方に開く。全体に磨滅が激しく、調整ははっきりしない。大粒の白色・灰色粒子を多く含む胎土である。148は小型の台付壺である。推定口径13.0cmを測る。台部について胴部と接合できなかったが、出土状況や胎土の状況から同一個体と考え、図示した。口縁部は直線的に外上方に開き、胴部は丸味を持つ。台部は外下方に張り出し、下端部内側が摘みだされている。磨滅が激しく調整ははっきりしないが、ナデ調整かと思われる。149～151は台付壺の台部である。149は台部の裾径7.8cmを測り、やや内湾気味に下方に開く。端部は平坦に仕上げられている。全体的に磨滅が激しいが、底部との境付近外面にはハケ目、内面には横方向のハケ目がかすかに見られる。内面中央には胴部との接合痕が観察できる。150は台部の裾径7.8cmを測るものであり、直線的に外下方に開く。台部の端部は丸く納められる。胴部下部は内湾気味に外上方に立ち上がる。全体的に磨滅は激しいが、胴部下部外面縦のハケ目、内面には横位のハケ目が見られる。また、台部外面はナデ、内面には横位のハケ目が見られる。内面には胴部との接合痕が見られる。151は台部裾径7.8cmを測るものである。直線的に外下方に開き、端部は方形に近い形となる。台部外面及び底部内面は磨滅により調整ははっきりしないが、台部内面には横位のハケ目が見られる。146～150は古墳時代前期のものと考えられる。151は古墳時代初期のものと考えられるが、あるいはもう少し古くなるものかもしれない。

(3) 弥生時代以前の出土遺物

遺構(SD10・SD11・SX03・SX04)及び包含層出土の弥生土器を抽出して図示した。いずれの土器も、埋没環境に起因するためか、土器表面の風化・磨耗が著しく、文様・調整方法等の観察が困難なものが多い。

本項で記述する土器は、一般的に菊川式と呼ばれる当該地域に一般的な弥生時代後期の土器群である。壺・甕・高杯の3器種が認められた。

壺は肩部が張らない下彫れの形態を有するもので、単純口縁と折り返し口縁のものが確認された。折り返し口縁は、内面及び口唇部、肩部に櫛刺突文や縄文を施すことが一般である。肩部の施文は、上端を横位の櫛刺突文で区画し、以下に櫛刺突羽状文や縄文を展開するもので占められること、頸部との接合部外面に段を持ついわゆる「有段羽状文」は皆無であることなど、当該地域の特徴を良く示している。



第34図 SD10出土遺物実測図1 (弥生土器)

ると判断できる。

壺は、菊川式に典型的な台付きのものに加え、当該地域に特徴的とされる、平底を呈すると推定される折り返し口縁を有するものが一定量確認されている。

高坏は当該地域では組成比率が低いと考えられているものであるが、2点を確認できた。ただし、形態や調整方法など、個体差も著しく定型化したものとは考えにくいことから、これまでの認識を改めるまでは至らないと判断される。

以下、遺構別に記述する。

S D 1 O (第34・35図)

溝状遺構から壺と壺が出土している。壺15点、壺12点を図示した。いずれも当該地域の弥生後期に一般的に認められる形態を有するもので、明らかな搬入品等は確認していない。

遺構覆土上層から出土したものが大半であること、形状をとどめるものは破片の移動が少なく潰れた状態で出土していること、溝の大半が埋投した段階でごく短期間のうちに投棄された可能性があること等から、比較的一括性が高いものと判断される。壺の施文方法、頸部の形態などから菊川式の中段階(弥生時代後期中葉)に相当すると考えられる。

壺は胴部最大径を下位に持つ下彫れの形態を有する当該期の一般的な壺の形態を有するもので占められる。口縁部は内湾気味に聞く単純口縁を有するものと、ラッパ状に大きく聞き、折り返し口縁を有するものの二者が認められる。頸部はやや短頭化が進んだものが認められ、肩部には上端を櫛刺突文で区画した文様を施すものが主体を占める。

壺は、胴部中位及びやや上位に最大径を持つ台付きの形態が主体となる一方で、口縁部外面に粘土紐を付加し、折り返し口縁としたものが少量認められる。後者は、本遺跡が立地する菊川流域に一定量組成が認められる形態であり、平底となる可能性がある。

壺(152～166) 152は小型品である。胴部中位に最大径を持ち、球形に近い形態を有する。胴部に比してやや大きな底部はほとんど突出しない。底部は、ドーナツ状の外周内面に粘土を充填しているため、裏面は外周が環状となり、中央がくぼむ。胴部外面は無文で、胴部下半を斜め、肩部を横方向のやや粗い刷毛により調整する。直立気味に立ち上がる口頭部は欠損する。

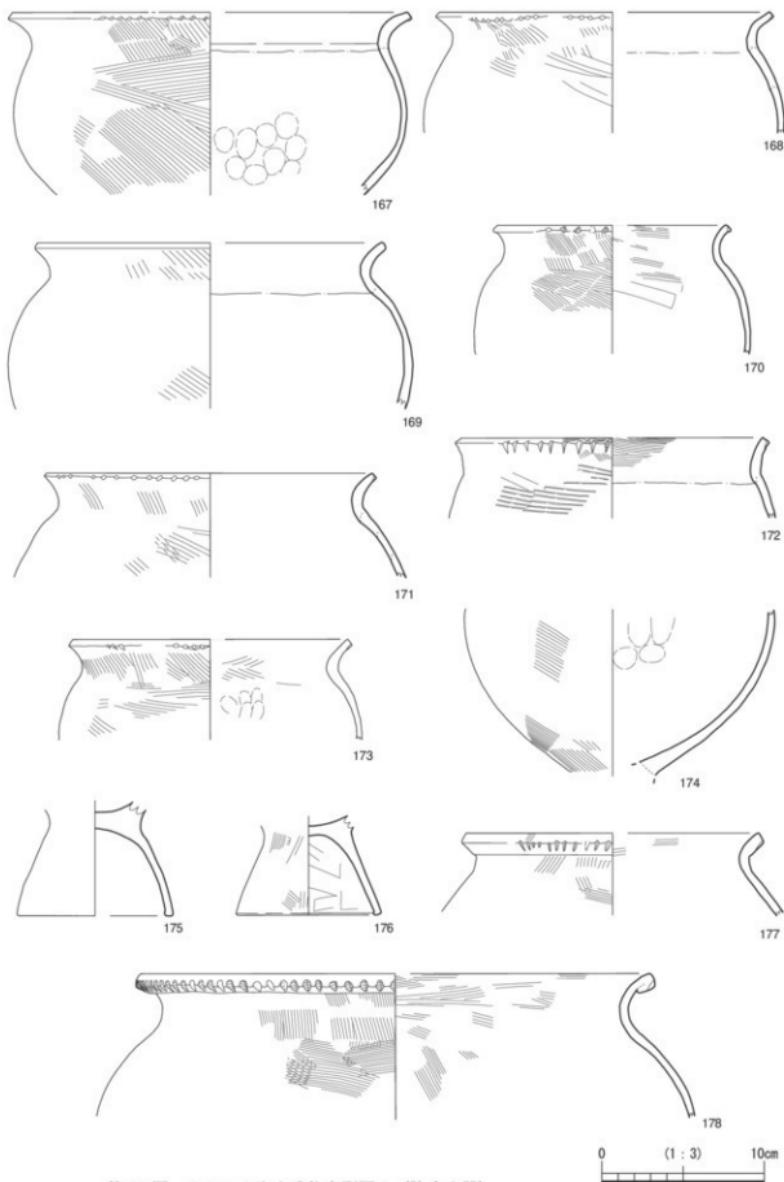
153は小型品の肩部破片である。湾曲が強いため、丸みが強い胴部となる可能性が高い。外面には櫛刺突羽状文が2段確認できる。内面はナデにより調整している。

154は肩部から胴部上半の破片である。外面は胴部上半を斜位の刷毛調整した後、肩部に上端を櫛刺突文で区画した2段の櫛刺突羽状文を施す。内面はナデ調整しているが、成形時の粘土紐の単位が明瞭に残されている。なお、上端の破断面は成形時の粘土紐の接合面になっていると推測され、やや内傾した面を形成している。

155・157は頸部破片である。いずれもやや短めの頸部で、155は口縁部がラッパ状に大きく聞くことから、口縁端部は折り返し口縁である可能性が高い。外面を粗い刷毛調整、内面は頸部をナデ、口縁部を横刷毛調整しているが、磨耗により詳細な観察は困難である。なお、頸部内面には成形時の粘土紐の接合痕が残されている。

157は肩部に上端を横位の櫛刺突文で区画した櫛刺突羽状文が1段確認できる。器壁の磨耗が著しく、調整方法の観察は困難である。

156・158は口頭部破片である。短い頸部から内湾気味に聞く単純口縁を有し、口縁部外面は斜位のやや粗い刷毛調整を行う。156は口縁部外面を斜め刷毛、内面をナデ調整し、上方に向けて面を持つ口唇部は刷毛工具による斜位の調整が確認できる。なお、頸部内面には成形時の粘土紐の接合痕が明瞭に観察できる。



第35図 SD10出土遺物実測図2（弥生土器）

158は156よりも細頭を呈し、やや直線的な口縁部を有する。口唇部は上外方に向けた面を形成する。口縁部外面は刷毛、頭部は刷毛後、磨き調整を施していると考えられるが、磨耗が著しく、磨きの単位の観察は困難である。159は、胴部下位に最大径を持つ下膨れを呈し、肩部がわずかに丸みを帯びる胴部を有するものである。短い直立した頭部から直線的に聞く口縁部は単純口縁を有する。口唇部は上外方に向けた面を持つ。胴部下半から滑らかに突出する底部は、裏面外周が接地し、中央がわずかにくぼむことから、ドーナツ状の外周の内側に粘土を充填して成形したものと推測される。ただし、他の同様の成形技法による底部とは中央のくぼみが少なく、底面はほぼ平坦となっている。外面は刷毛調整を行うが、通常施される肩部の施文は認められない。内面は下半部を刷毛、上半部はナデを主体に調整し、肩部付近には指頭痕を残す。

160は胴部下位に最大径を持ち、肩がわずかに丸みを帯びる。やや細めの頭部を有するが口縁部は欠損する。底部は裏面中央がわずかにくぼむ。胴部外面は粗い刷毛調整後、肩部に櫛刺突羽状文を2段施し、その下位の胴部上半に羽状となる結節縄文を2段施す。なお、櫛刺突羽状文の上端に横位の櫛刺突文の区画の可能性がある痕跡がわずかに認められるが、器壁の磨耗が著しく断定は困難である。内面はナデにより調整されるが、成形時の輪積み痕が残されている。

161は胴部下位に最大径を持ち、肩がわずかに丸みを帯びるが、160に比べ胴部の張りが弱く、細身の胴部となる。やや細い頭部からラッパ状に聞くが口縁部は欠損する。胴部下半から滑らかに突出する底部は、裏面中央がわずかにくぼみ、内面は中央がやや盛り上がる平坦な底面をなす。胴部外面は粗い刷毛調整後、胴部下半は横方向を基調にしたヘラ磨き、肩部から胴部上半には上端を櫛刺突文で区画した羽状縄文を施す。内面はナデ調整を行うが、成形時の輪積み痕が残されている。

162は丸みが強い胴部を持ち、細い頭部からラッパ状に聞く折り返し口縁を有する。胴部下半を欠損する。外面は刷毛調整後、肩部に上端を櫛刺突文で区画した3段の櫛刺突羽状文を施す。また、口縁部は、口唇部に継縫、口縁部内面に2段の櫛刺突羽状文を施す。なお、口唇部には3本一単位の棒状浮文を5箇所に貼付する。内面はナデ調整を行い、肩部付近にはロ頭部の接合の際に残された輪積み痕及び指圧痕が顕著に認められる。

163は胴部下位の低い位置に最大径を持ち、他に比べ丸みが少ない直線的な胴部上半から頭部へとつながる。底部は裏面がわずかにくぼむ。外面には肩～胴部上半に上端を櫛刺突文で区画した結節縄文を2段施す。また、文様帶上端には10個の円形浮文が等間隔に貼付される。

164～166は底部破片である。いずれも裏面がわずかにくぼむもので、外面には刷毛調整が確認できる。

164はやや薄く成形されており、やや小さい底部の底面は中央がわずかにくぼむが、内面は丁寧にナデ調整されており、平滑に整えられている。外面の底部立ち上がり付近に継刷毛が認められる。

165はやや大きめの底部となる。中央がわずかにくぼむが、内面は丁寧にナデ調整されており、平滑に整えられている。底部の大きさに起因して、底部内面に明確な平坦面が形成されている。

166はやや小さい底部で底面は中央が明確にくぼみ、外周は成形時のドーナツ状の輪台部が残されている。上外方に内湾気味に聞いて胴部下半につながる。磨滅が著しく、調整方法の観察は困難であるが、底部外面の立ち上がり部分に継刷毛が認められる。

甕(167～178) 167～173は口頭部から胴部で、いずれも台付甕になるものと推測される。口径が胴部最大径を上回る167以外は、胴部中位やや上に最大径を有する。外面は、口頭部に継方向の刷毛調整を施した後、胴部に右下がりの刷毛調整を施す。また、器壁の磨滅により観察が困難な169を除きすべて口唇部下端に刻みを確認できる。刻みはいずれも右側に傾斜して施しているが、172はやや強めに刻んでいる。

174は最大径を中位に持つ胴部下半部にあたる。下半部は丸みを帯びている。台部との接合部で剥離

しており、接合状況を観察することができる。外面に右下がりの刷毛調整を施し、内面には指圧痕を残す。

175・176は台部である。僅かに内湾気味に開く。端部は面を持ち、内側に成形時の粘土のはみ出しが認められる。175は磨耗が著しく、調整方法の観察は困難である。底面には炭化物の付着が認められる。176は、外面を刷毛、内面をナデ調整する。

177・178は折り返し口縁を有するもので平底の形態になる可能性がある。177は口縁部外面に薄い粘土紐を付加し、やや幅広の折り返し部となる。口唇部は明瞭な面取りを行い、下端部に刻みを加える。器壁の磨耗が著しく詳細な観察は困難であるが、胴部外面及び口縁部内外面に刷毛調整が確認できる。

178は特大品である。口縁部外面にやや厚い粘土紐を付加し、折り返し部としている。口唇部は弱い面を持ち、下端部に刷毛状工具による刻みを施す。外面は口頭部を縱刷毛後、肩部に横刷毛調整を行う。内面は口縁部を横刷毛、胴部を斜めの刷毛調整を行う。

S D 1 1 (第36図)

壺2点を図示した。いずれも台付壺である。形状を知りうる土器が壺2点のみの出土であることから時期は判然としないが、弥生後期中葉ないしこれと前後する時期のものと推測される。

甕(179・180) 179は胴部中位やや上に最大径を持ち、肩部に少し張りがあるものである。滑らかに括れた頭部から緩やかに聞く口縁部にいたる。口唇部は刷毛調整による強い面取りによって下端部に粘土のはみ出しが生じ、そこに刻みを加えている。外面は頭部を縱方向の刷毛調整後、胴部は横方向を基調とした刷毛調整を施している。内面は口縁部を横刷毛、胴部をナデにより調整する。

180は口径と胴部最大径が同程度の小型品である。頭部から短く聞く口縁部にいたる。口唇部は面取りを行い、下端部に刻みを施す。外面は頭部を縱方向の刷毛後、胴部は横方向を基調とした刷毛調整を施している。内面は口縁部・胴部ともに横刷毛調整しているが、調整工具が異なり、口縁部はやや細かい刷毛、胴部は粗い刷毛調整となっている。

S X O 3 (第36図)

壺1点を図示した。台付壺である。形状を知りうる土器が壺1点のみの出土であることから時期は判然としないが、弥生後期中葉ないしこれと前後する時期のものと推測される。

甕(181) 181は大型品である。胴部中位やや上に最大径を持つ肩部に張りを持つ。肩部から強く聞く口頭部を有する。弱い面を持つ口唇部の下端には刻みを加える。外面は頭部を縱方向の刷毛後、胴部は横方向を基調とした刷毛調整を施している。内面は口縁部を横刷毛、胴部をナデ調整している。

S X O 4 (第36図)

壺2点を図示した。いずれも台付壺である。形状を知りうる土器が壺2点のみの出土であることから時期は判然としないが、弥生後期中葉ないしこれと前後する時期のものと推測される。

甕(182・183)

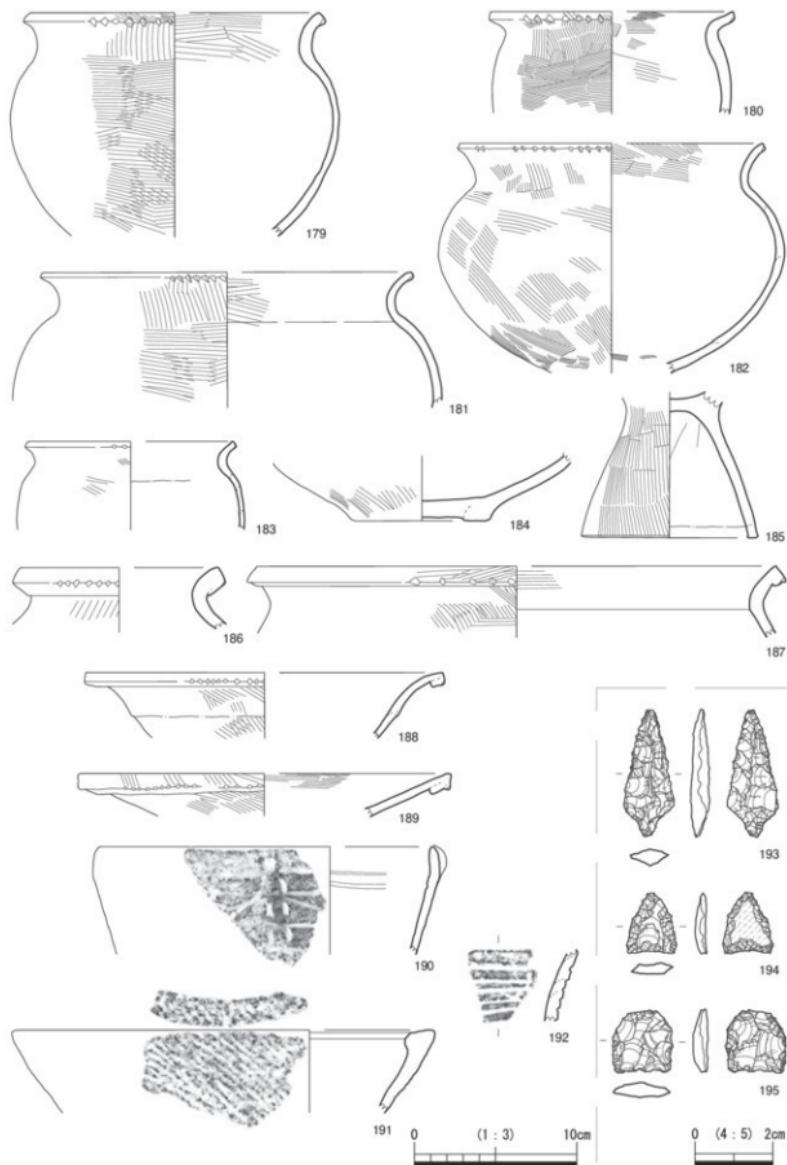
182は胴部中位に最大径を持ち偏球形に上下につぶれた胴部を有する。口唇部は面取り後、下端部に刻みを加える。外面は頭部を縱基調の刷毛、胴部は右斜めを基調とした刷毛により調整する。内面は口縁部を横刷毛、胴部をナデ調整する。

183は小型品である。肩部がやや張った胴部に短く外反する口頭部を有する。口唇部は面取り後、下端部に刻みを加える。外面に刷毛調整が確認できるが、磨耗が激しく調整方法の観察は困難である。

包含層(第36図)

壺2点、壺2点、高坏2点を図示した。弥生後期中葉ないしこれと前後する時期のものと推測される。

壺(184・186) 184は底部破片である。底部外周をドーナツ状に成形後、内面に粘土塊を充填し底部をしているため、裏面中央がくぼむ。外面を刷毛、内面をナデにより調整する。底部の一部は成形時の粘土紐接合部で剥離している。



第36図 SD 11・SX 03・SX 04・下層包含層出土遺物実測図（弥生土器・縄文土器・石器）

186は口径の4分の1程度の破片を図上で推定復元した口頭部の破片である。一般的な壺に比べ口径が著しく小さいことから、短頭壺の口頭部破片と判断した。一般的な壺の肩部以下に短い頭部を附加したような形態を有すると推測される。頭部に短く開く口縁部が付加され、口縁部外面には厚く幅広の粘土紐を附加して折り返し口縁としている。口唇部は面取り後、下端部に刻みを施す。磨耗が著しいが、頭部外面に継刷毛が観察できる。

甕(185・187) 185はやや高さのある台部で、ほぼ完存する。台部はわずかに内湾気味に開き、端部は面取りされ、内側に僅かに粘土のはみ出しが認められる。外面は継基調の刷毛、台部内面はナデにより調整する。なお、器の磨耗が著しく詳細な観察は困難であるが、台部上面すなわち、底部内面は刷毛調整が確認できる。

187は折り返し口縁を有する大型品の口頭部破片である。口縁部外面に幅狭の粘土紐を付加して折り返し口縁としている。口唇部は刷毛による面取り後、下端部に刻みを加えている。外面は頭部を継刷毛後、胴部を横刷毛、内面は口縁部を横刷毛調整している。

高坏(188・189) いずれも口縁部の破片である。188はやや深めの坏部から上外方に外反して開く口縁部を有する。坏部と口縁部の接合部の内外面にはわずかな段差が認められる程度で、中遠地域で一般的に認められる高坏に比べつくりが稚拙な印象を受ける。口縁部外面にはやや厚めの粘土紐を付加し、折り返し口縁としている。口唇部は面取り後、下端部に刻みを加えている。外面は刷毛、内面はナデにより調整している。

189は折り返し口縁壺の口縁部破片の可能性もあるが、口縁部が直線的に開くことから高坏の口縁部破片と判断した。坏部を欠損するが、坏部との接合部から鈎状に直線的に開く口縁部を有する。口縁部外面にやや幅広の粘土紐を付加し、折り返し口縁としている。口唇部は刷毛による面取り後、下端部に刻みを加える。内外面ともに刷毛調整を行う。いずれも、中遠地域で定型化された高坏とは形状・調整方法等が異なる上、口縁部の破片であるため、詳細な時期の特定は困難である。

下層包含層からは、弥生土器の他、それ以前の時代の遺物として、縄文時代の土器片と石器が出土している。

縄文土器(第36図)

深鉢(190～192) 190は深鉢の口縁部片である。口縁部はやや外上方に向かって開き、口縁端部は内湾気味となる。外面には刺突による縦2列の文様があり、その上の口縁端部外面には粘土帯を貼り付けている。刺突の周辺には、沈線で区画された磨り消し縄文が見られる。後期の加曾利B2式並行のものと考えられる。191も深鉢の口縁部片であり、外上方に開く形を呈する。口縁端部は内側に大きく肥厚し、平坦面を作り出す。口縁部外面と口縁端部の平坦面には縄文が施文される。中期の曾利Ⅱ式か曾利Ⅲ式にあたるものかと考えられる。192も深鉢の口縁部片である。外反気味に外上方に開く。口縁端部は内側にやや傾く平坦面をなす。外面には横方向に平行する沈線が、現状で5本見られる。中期初頭から前葉の山田平Ⅲ式あるいはⅣ式にあたるものかと考えられる。

石器(第36図)

石鎌(193～195) 193は頁岩製の有茎鎌である。長さ325cm、幅1.31cm、厚さ0.51cmを測る。基部が突出しており、凸基有茎鎌に分類される形態である。194も頁岩製であり、茎を持たない鎌である。長さ1.51cm、幅1.28cm、厚さ0.29cmを測る。基部が直線に近い形となり、平基無茎鎌に分類される形態である。195も頁岩製のものであり、茎を持たない鎌である。先端部を欠くが、残存長1.57cm、幅1.51cm、厚さ0.38cmを測る。全体的に五角形に近い形を呈し、基部が直線に近い形となる。平基無茎鎌に分類される形態のものである。

第14表 下層遺構・下層包含層出土遺物観察表2（土器）

桟岡 番号	国版 番号	調査 区	グリッド	遺構名	層位	種類	器種	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	器高 (cm)	色調	備考
34132	20-1	2区	C-9	SD10	遺構第1層	泥牛土器	小型壺	90%	-	5.4	(80)	2.5 Y 7/1	灰白	
34153	1区	C-10	SD10	遺構第1層	泥牛土器	壺	(5%)	-	-	-	(24)	7SYR6-4	にぶい黄緑	
34154	1区	C-10	SD10	遺構第1層	泥牛土器	壺	(5%)	-	-	-	(59)	10YR7-3	にぶい黄緑	
34155	20-2	2区	C-9	SD10	遺構第1層	泥牛土器	壺	(5%)	-	-	(66)	7SYR6-4	にぶい黄緑	
34156	20-3	2区	C-9	SD10	遺構第1層	泥牛土器	壺	(20%)	(138)	-	(79)	7SYR6-4	にぶい黄緑	
34157	20-4	1区	C-10	SD10	遺構第1層	泥牛土器	壺	(20%)	-	-	(64)	10YR7-3	にぶい黄緑	
34158	20-5	1区	C-10	SD10	遺構第1層	泥牛土器	壺	(10%)	(116)	-	(60)	2.5Y7-3	淡黄	
34159	20-6	2区	C-9	SD10	遺構第1層	泥牛土器	壺	80%	11.2	7.2	267	10YR7-2	にぶい黄緑	
34160	20-7	2区	C-9	SD10	遺構第1層	泥牛土器	壺	80%	-	6.4	(16)	10 Y R 6-4	にぶい黄緑	
34161	20-8	2区	C-9	SD10	遺構第1層	泥牛土器	壺	80%	-	6.4	(17)	10YR6-4	にぶい黄緑	
34162	21-1	2区	C-9	SD10	遺構第1層	泥牛土器	壺	30%	11.0	-	(217)	10YR4-1	褐灰	
34163	21-2	1区	C-10	SD10	遺構第1層	泥牛土器	壺	60%	-	6.0	(148)	10YR8-3	浅黄褐	
34164	21区	C-9	SD10	遺構第1層	泥牛土器	壺	(10%)	-	6.0	(23)	7SYR7-4	にぶい黄緑		
34165	2区	C-9	SD10	遺構第1層	泥牛土器	壺	(5%)	-	8.2	(16)	10YR7-3	にぶい黄緑		
34166	2区	C-9	SD10	遺構第1層	泥牛土器	壺	(10%)	-	6.0	(43)	10YR6-4	にぶい黄緑		
35-07	23-3	2区	C-9	SD10	遺構第1層	泥牛土器	台付壺	(5%)	(243)	-	(112)	10YR8-2	灰白	
35-08	2-4	1区	C-10	SD10	遺構第1層	泥牛土器	台付壺	(5%)	208	-	(74)	7SYR7-4	にぶい黄緑	
35-09	2-5	2区	C-9	SD10	遺構第1層	泥牛土器	台付壺	(5%)	(212)	-	(302)	10YR6-2	灰黄褐	
35-170	2区	C-9	SD10	遺構第1層	泥牛土器	台付壺	(5%)	(146)	-	(79)	10YR5-2	灰黄褐		
35-171	2-6	2区	C-9	SD10	遺構第1層	泥牛土器	台付壺	(5%)	204	-	(64)	7SYR6-6	棕	
35-172	2区	C-9	SD10	遺構第1層	泥牛土器	台付壺	(5%)	(186)	-	(49)	5 Y 3-1	オリーブ黒		
35-173	2区	C-9	SD10	遺構第1層	泥牛土器	台付壺	(5%)	(174)	-	(62)	7SYR5-4	にぶい褐		
35-174	2-7	2区	C-9	SD10	遺構第1層	泥牛土器	台付壺	(10%)	-	-	(102)	10YR6-4	にぶい黄緑	
35-175	2-9	2区	C-9	SD10	遺構第1層	泥牛土器	台付壺	(20%)	-	6.0	(70)	5YR6-4	にぶい黄緑	
35-176	2-10	1区	C-10	SD10	遺構第1層	泥牛土器	台付壺	(25%)	-	8.9	(61)	10YR7-4	にぶい黄緑	
35-177	2区	C-9	SD10	遺構第1層	泥牛土器	壺	(5%)	(186)	-	(51)	7SYR7-6	棕		
35-178	2-8	2区	C-9	SD10	遺構第1層	泥牛土器	壺	(5%)	(320)	-	(89)	5YR6-6	棕	
36-179	2-11	1区	B-11	SD11	遺構第1層	泥牛土器	台付壺	(5%)	(178)	-	(137)	10YR5-3	にぶい黄緑	
36-180	2-2	1区	B-11	SD11	遺構第1層	泥牛土器	台付壺	(5%)	(149)	-	(62)	7SYR4-3	褐	
36-181	2-3	1区	C-11	SX3	遺構第1層	泥牛土器	台付壺	(5%)	(227)	-	(83)	10YR3-2	黑褐	
36-182	2-4	1区	C-11		下層包含層	泥牛土器	台付壺	30%	190	-	(141)	10YR6-2	灰黄褐	
36-183	2-5	1区	C-11		下層包含層	泥牛土器	小型台付壺	(10%)	(130)	-	(54)	7SYR5-4	にぶい褐	
36-184	1-1C	A-11B-11L2			下層包含層	泥牛土器	壺	(20%)	-	8.5	(40)	10YR6-2	灰黄褐	
36-185	2-6	1区	B-10		下層包含層	泥牛土器	台付壺	(30%)	-	10.9	(90)	10YR7-3	にぶい黄緑	
36-186	1-1C	B-11			下層包含層	泥牛土器	短颈壺	(5%)	(123)	-	(38)	2.5Y7-2	灰黄	
36-187	1区	B-10			下層包含層	泥牛土器	壺	(5%)	(320)	-	(44)	7SYR6-6	棕	
36-188	2区	C-10			下層包含層	泥牛土器	高环	(5%)	(222)	-	(40)	2.5Y8-2	灰白	
36-189	1区	B-12			下層包含層	泥牛土器	高环	(5%)	(230)	-	(26)	7SYR6-2	灰黄	
36-190	2-7	2区	B-9		下層包含層	泥牛土器	深钵	(5%)	(204)	-	(66)	7SYR3-2	加瑪	
36-191	2-8	2区	C-9	SD10	遺構第1層	绳文土器	深钵	(5%)	(260)	-	(51)	7SYR5-4	にぶい褐	
36-192	2-9	2区	D-8	SH01	遺構第2層	绳文土器	深钵	(5%)	-	-	(43)	7SYR4-2	灰褐	

第15表 下層遺構・下層包含層出土遺物観察表3（石器）

桟岡 番号	国版 番号	調査 区	グリッド	遺構名	層位	器形	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
36-193	22-10	3区	D-2	SD01	第1層	石鏡	(2.25)	131	0.51	18	頁岩	
36-194	22-11	2区	C-8		F層包含層	石鏡	(1.51)	128	0.29	0.6	頁岩	
36-195	22-12	1区	B-10		F層包含層	石鏡	(1.57)	151	0.38	1.2	頁岩	

第5章　まとめ

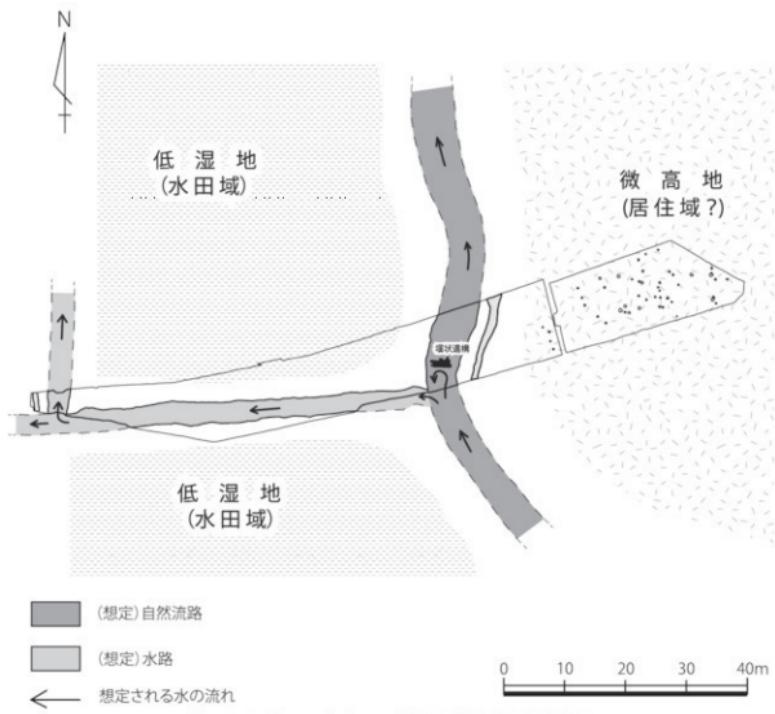
今回の海戸田遺跡の調査で得られた成果について簡単にまとめてみたい。今回の調査で明らかにされたことの一つに、中世初頭の水利施設と考えられる遺構群がある。出土遺物から12世紀末から13世紀初め頃の水路と考えられる溝状遺構と自然流路に設けられた堰状遺構が発見されている。第4章の遺構の部分でも述べたが、これらは一体の施設と考えることができ、自然流路内の堰状遺構は、水路に取水するために、自然流路の水位を上げる目的で設けられたものということになる。当然、これらの施設は、菊川中流域のこの一帯の土地利用のために設けられた灌漑施設の一部をなすものであろう。こうした検討をする前に、まず遺構の構造や工法について検討し、そこから開発を進めた集団を考え、その当時のこの地域の状況を見てみることとする。

堰状遺構の構造と工法について

自然流路である S R O 1 に設けられた堰状遺構はどのような工法を用いて作られていたのであろうか。各地の遺跡から発見された堰状遺構をみると、その構造は流路に横切る形で縱杭を打ち、そこに横木を渡す。その横木に上流側に斜めに杭等の材が打ち込まれる。形としては杭と横木が屋根のような三角形を呈し、流れに対し対応できる構造となっている例が多い。こうした木組みの間に、植物や土、礫等を充填して、水を堰き止めている。こうした例で著名なのが、時代は古墳時代前期のものであるが、愛媛県松山市古照遺跡がある。こうした例を参考にしながら、海戸田遺跡の堰状遺構をみると、横木に細かい枝木を並べて、その上に土を置きさらに横木と枝木の層、土の層と交互に積み重ねている。横木を支える形の縱杭は、下流側には見られず、上流側に2列の縱杭を流れに直交する形で打ち込んでいる。これらの杭は枝木と土の層に打ち込まれており、横木を支えるというよりは、盛り上げた枝木と土の層の崩れ防止の役目をもつていると考えられる。枝木の層は少なくとも3層認められ、土の層は混合土である。そこにまた、この施設の手前に多量の木の葉の層を確認しているが、調査時には流れ込んで溜まったものと理解して取上げたが、あるいは並べられた細かい枝木の先についていたものであった可能性がある。となれば、この遺構には葉のついたままの枝木が使われていた可能性がある。第4章では、その状況から海戸田遺跡の堰状遺構は「敷葉工法」の技術を用いて造られたものではないかと考えた。「敷葉工法」とは、土と植物を交互に積み上げて盛土し、丈夫な堤等をつくる弥生時代から続く古代の土木技術である。なお、樹種同定は、杭列の杭のみにしか行っていないが、かなり多種類の樹木が使われており、近隣の雑木林のものを伐採して、材としている状況が窺われる。こうした状況からみると、堰状遺構の工事はそれほど大掛かりなものではなく、この付近一帯の水田を耕作する人々が行ったものと考えられる。しかしながら、その工法は、水の流れに対して強固なものとするため、古来からの「敷葉工法」の技術を応用する形になったと考えられる。

想定される水路の配置と堰状遺構

トレンチ状に東西に掘られた今回の調査で検出された遺構から当時のこの一帯の状況を考えてみる。この付近一帯は、段丘裾となる東側に向かって高くなり、菊川が流れる西方向に向かって徐々に低くなっている。自然流路とした S R O 1 は東側の微高地を回り込む形で、北側の段丘裾を東西方向、西に向かって流れる吉沢川の方向へ流れていたと想定される。こうした状況の中で、この自然流路を境として、南北方向に広がる沖積地である低湿地を水田に利用していたのではないかと考えられ、そのための灌漑用の水路が S D O 1 等の溝状遺構であるといえる。また、東側の微高地上には小穴遺構が広がるが、これ



第37図 海戸田遺跡周辺中世初頭期水路配置想定図

らについては、一括して中世のものと考え、柱穴の可能性も考えたが、建物としてまとまるものはなかった。しかし、微高地上に広がる点から、柱穴である可能性も捨てきれず、とすれば、この微高地一帯には、低湿地部の水田を営む集団の居住エリアがあつたとも考えられる。今回の調査で検出された遺構のあり方から想定したものが⁵、第37図である。自然流路に構築された堰の位置等から水路の配置のあり方、そして生産エリア(水田)と居住(?)エリアを想定してみた。古代末から中世初めの時期、この一帯は、想定されるような形で灌漑施設を設け、開発が進められたものと考えられる。

古代末から中世の開発の背景

古代末のこの時期、この東遠地域にも多くの武士團が成立している。元来、遠江国の大羽官牧がこの地にあり、それが荘園制の進展とともに、笠原牧や相良牧の私牧の成立をみている。これらの牧の周辺には、勝間田・相良・新野・横地・内田・浅羽氏等の武士團が成立している。これらの武士團は徐々に農村に根をおろし、在地領主としての性格を強めていくことになる。この付近一帯では、菊川の東岸部一帯を根拠地にする横地氏や菊川西岸部一帯を根拠地とする内田氏がいる。海戸田遺跡が所在するこの吉沢地区一帯の開発にあたっては、横地氏との関連を考えていくことが必要と考えられる。海戸田遺跡の出土遺物についても、横地氏の支配下で操業されたと考えられる皿山窯の製品が多く出土しているこ

ともそうしたことの一つの表れと考えられる。無論、菊川を挟んで所在する潮海寺との関係も考えいく必要がある。

今回の調査においては、こうした古代末から中世の遺構・遺物以外にも弥生時代や古墳時代から奈良・平安時代の遺物も多く出土している。弥生時代後期には海戸田遺跡の東側の段丘上に赤谷遺跡や称宜屋敷遺跡等の集落が営まれる。そうした集団もこの海戸田遺跡が広がる沖積地を開発していたものと考えられる。その痕跡と考えられるのが、今回検出された溝状遺構やそこにまとめて置かれた弥生土器群等であろう。その後の時代の遺物の出土も見られ、この一帯の土地利用は続いているものと考えられる。そうした流れの中で、古代末から中世初めの時期に、莊園制の進展、武士團の成立、そしてそうした武士團の在地領主化が進行する。この一帯についても横地氏らの在地領主化した武士團が、その私領の開発と拡大を図っていたものと思われる。そうした痕跡が海戸田遺跡に残されていたことになる。

以上、かなり雑駁に、今回の調査で得られた成果について検討してみた。海戸田遺跡の所在する、菊川中流域の沢水加川等によって形成された沖積地の開発という視点で考えてみた。今回の調査で検出された水路と考えられる溝状遺構、それに取水するために自然流路に設けられた堰状遺構等を手掛かりとして、人々の営みの様相をわずかではあるが得ることができたということで、今回の調査のまとめとする。

参考文献一覧

- 菊川町文化財保護委員会 「菊川町の生い立ち…その地形と地質について…」
- 古照遺跡調査本部・松山市教育委員会 「古照遺跡」松山市文化財調査報告書IV 1974.3
- 菊川町教育委員会 「昭和60年度埋蔵文化財発掘調査報告書 千駄ヶ原遺跡群1地点」菊川町埋蔵文化財報告書第8集 1986.3
- 静岡県教育委員会 「静岡県の窯業遺跡 本文編」静岡県文化財調査報告書第42集 1989.3
- 菊川町教育委員会 「平成元年度埋蔵文化財発掘調査報告書 原段Ⅱ・Ⅲ遺跡」菊川町埋蔵文化財報告書第21集 1990.3
- 静岡県 「静岡県史 資料編3 考古三」 1992.3
- 菊川町教育委員会 「高田大屋敷遺跡 第8次発掘調査報告書(排水路北部)」菊川町埋蔵文化財調査報告第25集 1993.3
- 松井一明 「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』No.25 静岡県考古学会 1993.11
- 塚本和弘 「皿山古窯跡群の成立と終末」『向坂鋼二先生還暦記念論集 地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会 1994.3
- 菊川町教育委員会 「善福寺遺跡発掘調査報告書」菊川町埋蔵文化財調査報告書第29集 1994.3
- 静岡県 「静岡県史 通史編1 原始・古代」 1994.3
- 菊川町教育委員会 「後久遺跡発掘調査報告書」菊川町埋蔵文化財報告書第32集 1995.3
- 中世土器研究会 「概説 中世の土器・陶磁器」 有限会社真陽社 1995.12
- 大川清・鈴木公雄・工楽善通編 「日本土器辞典」 雄山閣出版株式会社 1996.12
- 第7回東日本埋蔵文化財研究会山梨大会実行委員会・山梨県考古学協会 「治水・利水遺跡を考える－人は水とどのようにつきあってきたか－ <第I分冊 資料編>・<第II分冊 発表要旨・紙上発表編>」
- 第7回東日本埋蔵文化財研究会 1998.2
- 佐野静代 「平野部における中世居館と灌漑水利 －在地領主と中世村落－」『人文地理』第51巻第4号
- 社団法人人文地理学会 1999
- 安保堅史・藤田龍之・知野泰明 「発掘記事にみる治水・利水技術の変遷に関する研究」『土木史研究』第21号 社団法人土木学会 2001.5
- 河合 修 「青灰色のうつわ」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第8号 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001.10
- 菊川町教育委員会 「県営牧の原農業用水203号支線農道の改良工事に伴う発掘調査 皿山古窯跡群－第6次調査－」菊川町埋蔵文化財報告書第67集 2003.3
- 菊川町教育委員会 「里遺跡」菊川町埋蔵文化財報告書第74集 2004.6
- 菊川シンポジウム実行委員会 「菊川城館遺跡群国指定記念シンポジウム資料集 陶磁器から見る静岡県の中世社会 <発表要旨・論考編>」 2005.11
- 菊川市教育委員会 「皿山古窯跡群－第7次調査－」菊川市埋蔵文化財報告書第4集 2006.2
- 菊川市教育委員会 「柿宜屋敷遺跡調査報告書 平成17年度」菊川市埋蔵文化財報告書第3集 2006.2
- 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 「法明寺古墳 平成19・20年度(主)吉田大東線緊急交通改善事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第199集 2009.3
- 帝京大学山梨文化財研究所 「帝京大学山梨文化財研究所研究報告第14集 特集「治水と利水の考古学」」 2010.5
- 高知県教育委員会・財團法人高知県文化財團埋蔵文化財センター 「花宴遺跡 南安芸道路建設工事に

伴う発掘調査報告書Ⅱ(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ)』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第115集 2010.12

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『大道西遺跡 一級河川男井戸川広域基幹河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人群馬県埋蔵文化財発掘調査報告書第517集 2011.3

東海土器研究会『渥美窯 編年の再構築』第2回東海土器研究会 2013.11

付編 菊川市海戸田遺跡から出土した木材の樹種

鈴木 三男(東北大学植物園)

はじめに

海戸田遺跡は菊川市吉沢に所在する遺跡であり、中世の遺構として自然流路と溝状遺構が検出されている。自然流路(S R O 1)に設置された多数の木材からなる堰があり、これらの構造材を中心に樹種の同定を行った。

その結果、表1及び以下に示す27タイプの樹種が同定された。これら同定に用いたプレパラートは静岡県埋蔵文化財センターに保管されている。

1 同定された樹種

1. アカマツ *Pinus densiflora* Siebold et Zucc. マツ科

図版 I-1a ~ 1c(プレパラート番号15548)

年輪幅の広い針葉樹で晩材部を中心に垂直樹脂道が散在する。早材から晩材への移行は不明瞭、放射組織は単列と中央に水平樹脂道を持つ紡錘形があり、いずれも背が低い。分野壁孔は大きな窓状、放射仮道管の内壁は鋸歯状に肥厚する。これらの形質からマツ科マツ属のうち、複雑管束亜属(二葉松類)のアカマツの材と同定した。

出土材は自然流路S R O 1に作られた堰の継杭1点である。

2. クロマツ *Pinus thunbergii* Parl. マツ科

図版 I-2a ~ 2c(プレパラート番号15552)

年輪幅の広い針葉樹で晩材部を中心に垂直樹脂道が散在する。早材から晩材への移行はやや明瞭、放射組織は単列と中央に水平樹脂道を持つ紡錘形があり、いずれも背が低い。分野壁孔は大きな窓状、放射仮道管の内壁は鋸歯状に肥厚するが歯先は鋭くなく、丸みを帯びる。これらの形質からマツ科マツ属のうち、複雑管束亜属(二葉松類)のクロマツの材と同定した。

出土材は自然流路S R O 1に作られた堰の継杭2点である。

2'. 二葉松類(マツ属複雑管束亜属) *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科

材の基本構造は上記のアカマツ、クロマツと一致するが、細胞壁の分解が進んで内部構造の保存が悪いため、両者の区別点である放射仮道管内壁の鋸歯状突起が充分に観察できないため、いずれとも判定できないものである。出土材は自然流路S R O 1に作られた堰の継杭2点と杭3点である。

3. イスマキ属 *Podocarpus* マキ科

図版 I-3a ~ 3c(プレパラート番号15474)

年輪が比較的広い針葉樹で、垂直樹脂道、水平樹脂道を欠く。晩材部は幅狭く、早材から晩材への移行は緩やかである。断面が扁平な樹脂細胞が年輪内に均一に分布し、量は比較的多い。樹脂細胞の水平壁は薄く平滑。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、分野壁孔はトウヒ型~ヒノキ型で1分野1~2個。これらの形質からマキ科イスマキ属の材と同定した。

静岡県地方では沿岸部にイスマキ *Podocarpus macrophyllus* (Thunb.) Lambert が自生し、イスマキとナギ *Podocarpus nagi* (Thunb.) Zoll. et Moritzi が生垣や庭園にしばしば植栽される。いずれの材も硬く粘りがあり、腐朽・水湿に対する保存性がたいへん良い。出土材は溝状遺構 S D O 1 から出土した整形板1点である。

4. スギ *Cryptomeria japonica* (Linn.f.) D.Don ヒノキ科

図版 II-4a ~ 4c(プレパラート番号15507)

年輪が明瞭な針葉樹材で、早材から晩材への移行は急である。晩材部は早材部より幅狭い。樹脂細胞が晩材部を中心に分布し、ルーズに接線方向に並ぶ傾向がある。樹脂細胞の水平壁は薄く平滑で、時にやや数珠状に肥厚する。樹脂細胞内部には黒褐色の物質がある。放射組織は柔細胞からなり、背は低~高い。分野壁孔はスギ型で通常1分野2~1個ある。これらの形質からヒノキ科(旧スギ科)のスギの材と同定した。

スギは青森県から九州屋久島の降水量の多い地域に天然分布する我が国特産の針葉樹で、巨木となり、最も重要な木材資源である。静岡県地方には古来天然杉林が広く分布し、木材も大量に利用されてきている。本遺跡出土材は S D O 1 から出土した曲物と農具の一部と思われるもの、S R O 1 から出土した板状製品の3点である。スギ材が S R O 1 の堰には使われていないことが注目される。

5. クスノキ科 A Lauraceae A

図版 II-5a ~ 5c(プレパラート番号15520)

小型の道管が密度少なく均一に分布する散孔材。年輪内の大きめの道管の接線径は70~80ミクロン程度、輪郭は丸みを帯びる。道管の穿孔は單一と横棒の少ない(10本以下)階段状。道管側壁の壁孔は階段状になる傾向を持つ。木部柔組織は周囲状、時に橋型に膨らんで精油成分を持つ油細胞となる。放射組織は2列、背が低い紡錘形、上下辺の細胞が時に膨らんで油細胞となる。

道管穿孔が階段状と單一の両方があり、油細胞を持つことからクスノキ科の材であることが分かる。日本には多数のクスノキ科の属と種がある。多くは常緑で暖帯に分布するが落葉性のものもあり、本州北部の温帯まで分布する種もある。材構造は互いに類似し、大きな道管と大きい油細胞を豊富に持つクスノキを除いては個々の属、種を区別することは難しい。「クスノキ科 A」としたものは、道管が太く(70~80ミクロン程度)、輪郭は丸みを帯びるに対し、次の「クスノキ科 B」としたものは道管が細く(23~30ミクロン程度)、輪郭が角張っていることで区別した。「クスノキ科 A」に該当するものとしてカゴノキ、ヤブニッケイ、ハマビワ、シロダモなどが当たる。一方、「クスノキ科 B」にはクロモジ属の多くの種などが該当する。これら全ての樹種も材構造には変異があり、道管径も個体及び部位による変異があり、必ずしも明確に区別できるものでは無いが、出土材には少なくとも2種類のクスノキ科の材が含まれていると言える。

クスノキ科 A とした出土材は S R O 1 の堰の縦杭3点、杭5点である。これらの杭の残存径は3~6cmほどであることから、この地域では最も普遍的なクスノキ科の樹木であるヤブニッケイ、シロダモなどが考えられる。

6. クスノキ科 B Lauraceae B

図版 II-6a ~ 6c(プレパラート番号15481)

クスノキ科 A よりひとまわり小型の道管が均一に分布する散孔材。年輪内の大きめの道管の接線径は23~30ミクロン程度、輪郭は角張っている。道管の穿孔は單一と横棒の少ない(10本以下)階段状。道管側壁の壁孔は階段状になる傾向を持つ。木部柔組織は道管の周囲状。油細胞は希である。放射組織は2列、背が低い紡錘形、油細胞は少ない。

出土材はクスノキ科 A 同様、S R O 1 の縦杭1点と杭2点である。

7. アワブキ *Meliosma myriantha* Siebold et Zucc. アワブキ科

図版 III-7a ~ 7c(プレパラート番号15476)

梢円形ないしは角の丸い多角形の小道管が単独あるいは放射方向に数個複合して密度低く均一に分布する散孔材で、周囲状木部柔組織が目につく。道管の壁はやや厚く、穿孔は多くは單一で横棒が少ない

階段状が混じる。放射組織は1-6細胞幅の異性で、非常に背が高く、構成細胞は大振りで、全体として粗雑である。これらの形質からアワブキ科のアワブキの材と同定した。

アワブキは本州～九州の山野に自生する落葉小高木で薪炭材にされる。出土材はS R O 1の堰の縦杭2点と杭5点である。残存資料の直径は3～5cmほどで、近くに生えているアワブキの株から萌芽枝等を伐り取って利用したものと思われる。

8. ヤマザクラ *Cerasus jamasakura* (Siebold ex Koidz.) H.Ohba バラ科

図版 III-8a～8c(プレバラート番号15482)

丸い小道管が単独あるいは放射方向あるいは斜め方向に数個複合して比較的密度高く均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は大振りの小孔紋で交互状、内壁にらせん肥厚がある。木部柔組織は散在状で、放射組織は1-4細胞幅くらいの同性にやや近い異性、構成細胞は大振りである。これらの形質からバラ科のサクラ属のヤマザクラの材と同定した。

ヤマザクラは東北地方南部から九州の温帯から暖帯に広く分布する落葉高木で、幹径60cm、樹高10m以上になる。材はやや堅く緻密で保存性、耐朽性がよく、加工も容易で優れた広葉樹材である。当遺跡出土材はS R O 1の堰の縦杭と杭の2点である。

9. ケヤキ *Zelkova serrata* Thunb. ニレ科

図版 III-9a～9c(プレバラート番号15515)

丸～楕円形の大道管が年輪はじめに1層に並び、孔圈外では薄壁多角形の小道管が多数集まって塊状～波状の紋をなす環孔材で、道管の穿孔は單一、道管相互の壁孔はおおぶりの小孔紋で交互状、小道管内壁には顯著ならせん肥厚がある。放射組織は1-8細胞幅ほどで背は余り高くなく、上下辺にまれに大型の結晶細胞をもつ。これらの形質からニレ科のケヤキの材と同定した。

ケヤキは本州北端から四国、九州の全域の平地～山地帯に広く分布する落葉高木で、時に幹が3mに達する巨木となる。材は肌目や粗で坚硬、強韌、弾力があり、加工性良く、時に美しい空が出る。大型建築物の構造材、彫刻材、漆器木地等の特用の他、家具、器具などあらゆる用途がある。本遺跡出土材の漆椀2点ともケヤキであった。

10. クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科

図版 IV-10a～10c(プレバラート番号15541)

年輪のはじめに円～卵形の大道管が3層ほどに並び、そこから順次径を減じ、晩材部では薄壁多角形の小道管が周間状仮道管や木部柔組織と共に集まって火炎状の紋をなす環孔材である。道管の穿孔は單一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状にやや隙間を開けて配列する。らせん肥厚はない。木部柔組織は周間状及び単細胞幅の独立帶状で晩材部で目立つ。放射組織は単列同性で背は低い。道管・放射組織間壁孔は不定形の楕円形で大振り、横状にきちんと並ぶことはない。これらの形質からブナ科のクリの材と同定した。

クリは北海道石狩低地周辺から九州鹿児島県までの温帯から暖帯に広く分布する落葉高木で、幹径1m以上、樹高30mほどとなる。成長は早く、材質は堅く、割裂が容易で心材は耐久力つよく水湿に特に強い。大材が得られるので大型建築物から一般の家屋の大黒柱や土台回り、屋根葺き材(くれこば)などに用いられるほか、家具、農具、などさまざまな部分に用いられ、また水湿に強いことから土木用材や鉄道枕木などの特用があった。本遺跡出土材はS R O 1の堰縦杭15点と杭1点、それにミカン割り材1点である。

11. コジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky ブナ科

図版 IV-11a～11c(プレバラート番号15518)

年輪の始めに丸い大型の道管が間隔を置いてあり、そこから放射方向に揺らぎながら2～4個の大～

中道管が並び、その外側では小道管が火炎状に配列する放射孔材で、年輪界はやや明瞭である。道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は丸い小孔紋で交互状、木部柔組織は散在状及び単接線状である。放射組織は單列同性と集合放射組織の2型がある。道管-放射組織間壁孔は楕円形でしばしば縦に並ぶ。これらの形質からブナ科シイ属のコジイの材と同定した。スダジイからは集合放射組織が存在することで区別される。

コジイ(別名ツラジイ)は関東地方南部以西の暖地に分布する常緑高木で、照葉樹林の主要な要素である。スダジイが海岸部に多いのに対し、これは内陸部に多い。樹高20m幹径1mの大木となり、材はやや堅硬で緻密、割裂容易であるが肌目は粗く保存性は低い。本遺跡出土材はSR01の堰の縦杭6点と包含層から出土した板材1点である。

12. スダジイ *Castanopsis sieboldi* (Makino) Hatusima ブナ科

図版IV-12a～12c (プレパラート番号15485)

クリ、コジイによく似た材で、年輪の始めに大～中型の丸い道管が間隔を置いて配列し、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管、周囲状仮道管、木部柔組織が集まって火炎状となる環孔材で、年輪はやや明瞭である。木部柔組織は接線状で晩材部でよく目立つ。道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状である。放射組織は單列同性である。これらの形質からブナ科シイ属のスダジイの材と同定した。

スダジイは東北南部以南～九州屋久島までの照葉樹林帯に広く分布し、特に海岸部に多い。樹高20m、幹径1m以上となる常緑広葉樹で、海岸部に生育する個体は幹は直立せず、下部から大枝を出して大きな樹冠を形成する。材はコジイ同様、やや堅硬で緻密であるが、肌目粗く、保存性が低い。本遺跡出土材はSR01の堰の縦杭7点と杭1点で、コジイの用材と変わらない。

13. コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科

図版V-13a～13c (プレパラート番号15531)

年輪の始めに丸い大道管が1～数層配列する環孔材で、孔圈外では丸い単独小道管が緩く放射方向に配列する。道管の穿孔は單一、らせん肥厚はない。木部柔組織は接線状で孔圈外でよく目立つ。放射組織は単列同性と複合状で、複合放射組織内には大きな結晶細胞が混じる。これらの形質からブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節の材と同定した。

クヌギ節には東北中部以南から九州までの全国に広く分布するクヌギ *Quercus acutissima* Carr. と関東北陸以西から九州北部まで分布するアベマキ *Quercus variabilis* Blume があり、これら両者の材構造は互いによく似ていて識別は困難である。两者とも暖帶性の落葉高木で、幹径60cm、樹高20m以上になり、二次林や集落周辺に多い。材はやや堅硬、木理は粗く、割裂自在で、ミカン削り材をつくりやすい。本遺跡出土材はSR01の堰の縦杭1点と杭3点である。

14. コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

図版V-14a～14c (プレパラート番号15532)

年輪の始めに丸い大道管が1～数層並び、そこから順次径を減じて晩材部ではクリ同様、薄壁多角形の小道管が多数集まって火炎状となる環孔材で、道管の穿孔は單一、木部柔組織は2-3細胞幅の独立帯状で晩材部でよく目立つ。放射組織は単列同性と複合状があり、道管-放射組織間の壁孔はいびつな楕円形で縦に長くならない。以上の形質からコナラ属コナラ亜属のうち、コナラ節の材と同定した。

コナラ節には全国の山野に普通で特に二次林に多いコナラ *Quercus serrata* Thunb.、青森県から九州の温帯から暖帯に分布するナラガシワ *Quercus aliena* Blume、全国の温帯に多いミズナラ *Quercus mongolica* Fish. var. *grosseserrata* Rhed.、暖帯、温帯から亜寒帯にあるカシワ *Quercus dentata* Thunb.などがあり、静岡県地方ではコナラが普通にあり、山地上部に行くとミズナラが出現し、カシワが希に

あるがナラガシワは余り見かけない。コナラは幹径60cm、樹高15mくらいになる落葉高木で、材はやや堅硬で肌目は粗く、割裂容易で、建築材、各種器具材、特に柄物、細工物など、特に薪炭材に用いる。本遺跡出土材はS R O 1の堰の縦杭1点である。

15. ウバメガシ *Quercus phillyraeoides* A. Gray ブナ科

図版 VI-15a ~ 15c (プレバラート番号15563)

中(～小)型の丸い道管が緩く放射方向にゆらぎながら配列する放射孔材で、年輪は目立たない。道管の穿孔は單一、道管放射組織間壁孔は柵状になる。木部柔組織は接線状で1-数細胞層である。放射組織は單列同性と集合状である。これらの形質からブナ科コナラ属コナラ亜属の常緑のウバメガシの材であることが分かる。アカガシ亜属からは道管径が小さくことと集合状放射組織を持つことで区別される。

ウバメガシは関東地方南部以西、四国、九州の沿岸部に生える常緑亜高木～低木で、幹の根元径30cm、樹高2～8m程度になる。材は極めて硬くて重く、割裂、折損困難である。本遺跡出土材はS R O 1の堰の縦杭1点である。

16. ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

図版 VI-16a ~ 16c (プレバラート番号15522)

断面梢円形の単独あるいは2個放射方向に複合した道管が均一に散在する散孔材で、年輪界は目立たない。年輪始めにある道管はやや太く、そこから年輪界に向かって順次少しづつ道管径が小さくなり、年輪界附近ではかなり小さくなる。道管の穿孔は單一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状に配列する。らせん肥厚はない。放射組織は單列異性で道管との壁孔は交互状に密にあり、蜂の巣状となる。これらの形質からヤナギ科ヤナギ属の材と同定した。

ヤナギ属は低木～高木になる落葉樹で、我が国には非常に多くの樹種があり、材構造は互いに近似していて樹種の区別は出来ない。木材は一般に軽軟で、割裂自在、耐朽性に劣る。箱物などの利用がある。当遺跡出土材はS R O 1の堰の縦杭1点と包含層出土の杭1点である。

17. ヌルデ *Rhus javanica* L. var. *roxburghii* (DC.) Rheder ウルシ科

図版 VI-17a ~ 17c (プレバラート番号15517)

年輪始めに丸い中型の道管が並び、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が複合した塊が散在する環孔材。木部柔組織は周囲状で晩材部では連合翼状となる。道管の穿孔は單一、放射組織は1-2細胞幅の異性で、接線面では細長く見える。これらの形質からウルシ科のヌルデの材と同定した。

ヌルデは北海道南部～九州沖縄までの全国の山野に広く分布する落葉小高木で、幹径20cm、樹高10m程度になる。材は比較的柔らかく、木理は粗、耐朽性、保存性は中くらい、切削加工は容易で、小細工もの、釣りの浮き、下駄材などの用途がある。当遺跡出土材はS R O 1の杭1点である。

18. ハゼノキ *Toxicodendron succedaneum* (L.) O.Kuntze. ウルシ科

図版 VI-18a ~ 18c (プレバラート番号15536)

中型の丸い道管が単独あるいは2個放射方向に複合して均一に密度低く散在する散孔材で、年輪界は目立たない。道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状である。木部柔組織は隨伴状だが目立たない。放射組織は1-3細胞幅で同性に近い異性、背は低く、接線断面では比較的綺麗な紡錘形になる。これらの形質からウルシ科のハゼノキの材と同定した。

ハゼノキは関東地方南部以南西の暖地に生育する落葉高木で、しばしば植栽されている。樹液にはウルシオールがあり、かぶれを起こす。当遺跡出土材はS R O 1の堰の縦杭1点と包含層出土の杭1点である。

19. クマノミズキ *Cornus macrophylla* Wall. ミズキ科

図版 VII-19a ~ 19c (プレパラート番号15562)

丸い小道管が単独で均一に分布する散孔材で、年輪は不明瞭である。木部柔組織は散在状で量は少ない。道管の穿孔は多数の横棒からなる階段状である。放射組織は3-5細胞幅位の典型的な異性で單列の翼部が目立つ。これらの形質からミズキ科のクマノミズキの材と同定した。

クマノミズキは青森県以南の本州、四国、九州の温帯下部に広く分布する落葉高木で、幹径40cm、樹高15mほどになる。葉や樹形がミズキとよく似ているが、葉が対生すること、花期は初夏でミズキより一月ほど遅く、また、実が秋に熟することで区別できる。材はかなり重くやや硬くて強いがヤマボウシのように強靭ではない。材はミズキ同様、家屋の梁材に用いられる他、各種器具材、柄類などミズキ同様の用途がある。当遺跡出土材はS R O 1の壠の縦杭1点と杭1点である。

20. サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科

図版 VII-20a ~ 20c (プレパラート番号15502)

薄壁で多角形の微細な道管が均一に分布する散孔材で、年輪は全く目立たない。道管はほぼ単独で、穿孔は横棒の多い階段状である。木部柔組織は散在状で目立たない。放射組織はほぼ單列の異性で、背は比較的高く、平伏細胞と背の大変高い直立細胞からなる。これらの形質からツバキ科のサカキの材と同定した。

サカキは関東南部以西～九州、琉球に分布する照葉樹林を特徴づける常緑小高木で、幹径20cm、樹高8mくらいになる。材は坚硬で肌目はやや粗く、強靭で割裂困難であり、萌芽枝がまっすぐによく伸びることから柄物に重用される。各種柄物、杵、天秤棒、舟の棹、櫓等に用いられる。当遺跡出土材はS R O 1の壠の縦杭5点である。

21. エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科

図版 VII-21a ~ 21c (プレパラート番号15564)

年輪始めには道管は少なく、やや離れた早材部では薄壁で梢円～多角形の小道管が単独あるいは2～数個放射方向に複合したものが均一に分布する散孔材で、年輪界に向けて道管径は小さくなる。道管の穿孔は横棒が10本前後の階段状である。木部柔組織は短接線状で晩材部で目立つ。放射組織は1～3列の異性で、平伏細胞と背の大変高い直立細胞からなる。これらの形質からエゴノキ属のエゴノキ属の材と同定した。

エゴノキ属には北海道の南部～九州にかけての山野に普通に生える落葉小高木のエゴノキ *Styrax japonica* Siebold et Zucc.、北海道～九州の温帯に多いハクウンボク *Styrax obassia* Siebold et Zucc.、本州～九州の温帯に分布するコハクウンボク *Styrax shiraiana* Makinoがあり、菊川市附近の山野にはエゴノキが普通にあり、出土材もエゴノキであることが考えられる。材はやや硬く枯りがって緻密で、玩具などの用途がある。当遺跡出土材はS R O 1の壠の縦杭2点である。

22. シャシャンボ属 *Vaccinium* ツツジ科

図版 VIII-22a ~ 22c (プレパラート番号15503)

断面多角形の微細な道管が均一に分布する散孔材。道管はほとんどが単独、ごく希に2-3個放射方向に複合する。道管内壁にはらせん肥厚があり、穿孔は單一と横棒が10本程度の階段状が混じる。木部柔組織は散在及び短接線状で比較的多い。放射組織は單列と4-5細胞幅の多列、前者は直立細胞のみからなり、後者の多列部は平伏細胞、單列部は方形、直立細胞からなる。多列放射組織の分布は均一ではなく、接線面で斜めの縦の列に集まる。これらの形質からツツジ科のシャシャンボの材と同定した。

シャシャンボは関東地方南部以南西の暖地に生える常緑小高木～低木で、菊川市周辺の山野に自生する。材は強靭緻密で枯り強い。当遺跡出土材はS R O 1の壠の縦杭3点である。

23. ネジキ *Lyonia ovalifolia* (Wall.) Drude var. *elliptica* (Siebold et Zucc.) Hand.-Mazz. ツツジ科
図版 VIII-23a ~ 23c (プレバラート番号15505)

断面丸みを帯びた小道管がほぼ単独で均一に分布する散孔材で、年輪界は全く目立たない。道管の穿孔は横棒が10本以上の階段状、本部柔組織は散在状である。放射組織は1-3列の異性で、背は高くは無い。これらの形質からツツジ科のネジキの材と同定した。

ネジキは東北南部～九州の温帯～暖帯に分布する落葉小高木で、材は堅硬緻密だが、木目がねじれるので細工には向かない。当遺跡出土材は S R O 1 の壙の杭1点である。

24. トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科

図版 VIII-24a ~ 24c (プレバラート番号15486)

丸～楕円の単独あるいは2個複合した大道管が年輪始めに数層に配列し、晩材部では厚壁で内腔が円形の小道管が単独あるいは2～数個主に放射方向に複合したものがまばらに散在する環孔材。道管側壁の壠壁は微細な小孔紋で交互状に密にある。道管の穿孔は單一。本部柔組織は周囲状及び翼状で晩材部で目立つ。放射組織は1-2列の背が低い同性である。これらの形質からモクセイ科のトネリコ属の材と同定した。

トネリコ属には温帯～亜寒帯の湿地に多い落葉高木のヤチダモ *F.mandshurica* Rupr. var. *japonica* Maxim.、温帯の山地に多い落葉高木のシオジ *F. platypoda* Oliv.、温帯～暖帯の山野によく見かける落葉小高木のマルバアオダモ *F.sieboldiana* Blumeなど多くの種があるが、材構造での種の区別は出来ない。静岡県地方にはヤマトアオダモ *F. longicuspis* Siebold et Zucc.、マルバアオダモ、シオジなどがある。当遺跡出土材は S R O 1 の壙の杭1点である。

25. モチノキ属 *Ilex* モチノキ科

図版 IX-25a ~ 25c (プレバラート番号15535)

薄壁多角形の微細な道管が主に放射方向に多数が複合したものが密度低く均一に分布する散孔材で、年輪界は全く目立たない。道管の穿孔は横棒の多い階段状、本部柔組織は目立たない。放射組織は1～6細胞幅ほどで、單列放射組織は直立細胞のみからなる。多列放射組織の多列部は平伏細胞、上下辺は直立細胞からなり、背が高い。以上の形質からモチノキ科のモチノキ属の材と同定した。

モチノキ属の木属には多数の種があり、静岡県地方には常緑高木になるモチノキ *I. integra* Thunb.、ナナミノキ *I. chinensis* Sims、クロガネモチ *I. rotunda* Thunb.など、常緑小高木のイヌツゲ *I. crenata* Thunb.、ソヨゴ *I. pedunculosa* Miq.、落葉小高木のアオハダ *I. macropoda* Miq.など多数の種があるが個々の種を区別するのは困難である。いずれも材は堅硬緻密で均質、仕上がりが良く器具材などに用いられる。当遺跡出土材は S R O 1 の壙の杭1点である。

26. ガマズミ属 *Viburnum* レンブクソウ科

図版 IX-26a ~ 26c (プレバラート番号15545)

薄壁で断面多角形の微細な道管が均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は横棒が多数の階段状である。放射組織は單列と2-4細胞幅ほどの多列がある。單列放射組織は直立細胞のみからなる。多列放射組織の單列部は直立細胞からなり、多列部は平伏細胞からなる。これらの形質からレンブクソウ科(旧スイカズラ科)のガマズミ属の材と同定した。

ガマズミ属には常緑小高木のサンゴジュ *V. odoratissimum* Ker-Gawler var. *awabuki* (K.Koch) Zabel や落葉低木のガマズミ *Viburnum dilatatum* Thunb.など多数の種があるが材構造での識別は困難である。ガマズミの材は硬く緻密で粘りがあり、丸木に樹皮がついたままげんのうの柄などに用いられる。当遺跡出土材は S R O 1 の壙の杭1点である。

2 S R O 1 の壇状構造の構築材

当遺跡から出土した木材96点の樹種を調べたが、そのうちの82点は自然流路 S R O 1 の壇状構造の構築材であり、あとは S R O 1 から出土したその他の木材5点、 S D O 1 から出土した杭、曲物、漆塗など6点、その他から出土した漆椀など3点である。この82点の内訳を見ると表2となる。この表では当時の人びとが区別して用いていたわけでは無いと推定されるスダジイとクリ、アカマツとクロマツと二葉松類、クスノキ科AとB、をそれぞれ合計して示してある。

最も多いのがクリで16点、ついでシイ類が14点ある。そしてクスノキ科が11点、マツ類が8点、サカキ(6点)、アワブキ(5点)、クヌギ節(4点)、シャシャンボ(3点)と続き、エゴノキ属、クマノミズキ、ヤマザクラ(以上2点)、それにウバメガシ以下1点出土の樹種が8種類続く。即ち、82本の構造材に実に20もの樹種群を用いていることになる。クリは縄文時代から現在まで非常に利用されてきた木材の一つで、特に材質が適していることから土木用材には重用されてきており、当遺構での利用はその表れと言える。アカマツ、クロマツは近世以降に増えた樹種で、特に東海地方では海岸砂丘の緑化と山地丘陵の二次林化で爆発的とも言える増加があった。当遺跡はそれより以前の時代ではあるが、人文活動の活発化により中世でもかなり松林が増加していたことが窺え、水湿に強い材質を活かした土木用材への利用は既に行われていたと言える。

一方、これら2樹種に比肩するほどシイ類の利用が多いが、これは少なくとも材質が土木用材に適していたからとは言いがたい。シイ類は腐朽しやすく、また水湿に強いとは言えない土木用材には不向きである。それにもかかわらず、少なからず使われたのは身近に豊富に生育していたからと考えるのが妥当だろう。そして、クスノキ科、サカキ(6点)、アワブキ、クヌギ節、シャシャンボと続く実に様々な樹種はいずれもが農村内外や農家廻り、そして近くの里山に普通に生えている、多くは「雑木」である。これはこの壇状構造が、きちんとした土木水利計画に基づいて建設されたものではなく、遺跡周辺の人びとが水利のために手近にある樹木を伐りだして作った簡便な施設であったことを思わせる。それにしても実に多様な木材を利用していることに改めて驚く。

表1 海戸田遺跡出土木製品の樹種1

No.	プレバラ ト No.	取上番号	辨番番号	樹種	類別	遺存時期	調査区	遺構	部位	備考
1	15615	TKT206	25-04	セヤキ	漆椀	縄文時代	3区	S001	直横第1層	
2	15629	TKT219		アワブキ	杭	縄文時代	3区	S001	直横第1層	
3	15674	TKT226	25-27	イヌマキ属	漆油板	縄文時代	3区	S001	直横第1層	
4	15612	TKT227	25-36	スギ	曲物	縄文時代	3区	S001	直横第1層	
5	15607	TKT280	25-35	農具の一部?	農具	縄文時代	3区	S001	直横第1層	
6	15626	TKT281	25-32	アワブキ	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	
7	15617	TKT289	25-07	モクダ	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	又掘孔正彌丸
8	15669	TKT301		クスノキ科 A	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
9	15628	TKT302		クヌギ節	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
10	15663	TKT303		アワブキ	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
11	15606	TKT304	28-71	クヌギ節	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
12	15602	TKT305	28-72	モカキ	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
13	15655	TKT306		二葉松類	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
14	15641	TKT307		ヤマツリ属	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
15	15609	TKT308	28-73	タリ	垂柳樹材	縄文時代	2区	S001	直横第1層	又掘孔正彌丸
16	15631	TKT309		クスノキ属	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	又掘孔正彌丸
17	15641	TKT310		タリ	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
18	15481	TKT362	28-24	クスノキ科 B	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
19	15633	TKT386		二葉松類	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
20	15667	TKT391		二葉松類	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
21	15645	TKT392		ガマズミ属	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
22	15610	TKT393	28-09	タリ	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	又空洞
23	15660	TKT394		アワブキ	木柵	縄文時代	2区	S001	直横第1層	
24	15668	TKT395		クヌギ節	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	前部机
25	15538	TKT394		スダジイ	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
26	15635	TKT495		モクノキ属	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
27	15479	TKT496	28-75	アワブキ	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
28	15481	TKT497	28-26	アワブキ	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
29	15487	TKT498	28-77	クスノキ科 A	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
30	15488	TKT499	28-28	クスノキ科 A	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
31	15605	TKT500	28-79	モクダ	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
32	15493	TKT501	28-80	クスノキ科 A	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
33	15620	TKT502		クスノキ科 A	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
34	15621	TKT503		クスノキ科 A	杭	縄文時代	2区	S001	直横第1層	同上
35	15608	TKT502	28-81	タリ	面柵	縄文時代	2区	S001	直横第1層	中央左部机

表2 海戸田遺跡出土木材の樹種2

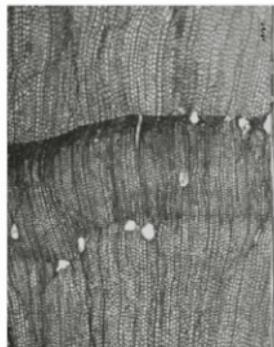
No.	ブレバラートNo.	取上番号	解説番号	樹種	細別	指定時期	調査区	遺構	部位	備考
36	15962	TKT1963		クマノミスキ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	現中央部杭
37	15963	TKT1964		アヌキ属	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
38	15969	TKT1965	28-62	シカクシボ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
39	15919	TKT1966	29-82	タガヤクシ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
40	15941	TKT1967	タリ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト	
41	15948	TKT1968	デカラマツ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト	
42	15989	TKT1969	29-84	トネリコ属	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
43	15913	TKT1970	29-85	タリ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
44	15950	TKT1971		サカキ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
45	15955	TKT1972		モミ属	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
46	15911	TKT1973	29-86	スギ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
47	15939	TKT1974		エゾノキ属	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
48	15964	TKT1975		エゾノキ属	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
49	15942	TKT1976	29-87	タリ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
50	15925	TKT1978		シカクシボ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
51	15978	TKT1979	29-88	スギジ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
52	15942	TKT1980		クスノキ科 A	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
53	15956	TKT1981		クスノキ科 A	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
54	15964	TKT1982	29-89	タリ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
55	15966	TKT1983	29-90	サカキ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
56	15947	TKT1984		タリ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
57	15957	TKT1986		スギジ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
58	15914	TKT1990	28-70	スギ	板叶材	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
59	15932	TKT1991		コナラ属	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
60	15923	TKT1992		クロマツ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
61	15949	TKT1993		タリ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
62	15946	TKT1994		タリ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
63	15947	TKT1995	29-91	コジイ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
64	15999	TKT1997	29-92	タリ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
65	15966	TKT1998		サカキ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
66	15963	TKT1999		ウバメガシ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
67	15955	TKT2000		コジイ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
68	15922	TKT2001		ヤナギ属	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
69	15954	TKT2002		タリ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
70	15952	TKT2003		クロマツ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
71	15948	TKT2004	29-93	エゾノキ属	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
72	15961	TKT2005		サカキ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
73	15936	TKT2006		ハゼノキ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
74	15924	TKT2007		サカキ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
75	15930	TKT2008		コジイ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
76	15918	TKT2009		コジイ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
77	15934	TKT2010		コジイ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
78	15975	TKT2011	29-94	タリ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
79	15941	TKT2012	30-05	クスノキ科 A	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
80	15476	TKT2013	30-06	アワブキ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
81	15980	TKT2014	30-07	スギジ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
82	15943	TKT2015	30-09	クスノキ科 B	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
83	15900	TKT2016	30-08	タリ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
84	15949	TKT2018	30-100	スギジ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
85	15996	TKT2019	30-101	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト	
86	15945	TKT2020	30-102	スギジ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
87	15901	TKT2021	30-103	コジイ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
88	15940	TKT2022		タリ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
89	159482	TKT2023	30-104	ヤツザクラ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
90	159491	TKT2024	30-105	タリ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
91	15903	TKT2025	30-106	シカクシボ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
92	15910	TKT2026	30-107	アワブキ	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
93	15937	TKT2027		オナガ属	板机	縄文時代	2区	C-9	近代理	
94	15947	TKT2028		エゾノキ属	板机	縄文時代	2区		遺構第1層	阿ト
95	15969	TKT2029		イヌマキ属	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト
96	15943	TKT2032		ヤナギ属	板机	縄文時代	2区	S803	遺構第1層	阿ト

表3 S R O 1 の埋状構造の構築材一覧

※ S R O 1 西試掘坑北壁の杭を含む

樹種名	板机	机	合計
タリ	15	1	16
スギジ+コジイ	13	1	14
クスノキ科 A+B	4	7	11
松類	5	3	8
サカキ	5	1	6
アワブキ	2	3	5
クスギ属	1	3	4
シカクシボ	3		3
エゾノキ属	2		2
クマノミズキ	1	1	2
ヤマザクラ	1	1	2
ウバメガシ	1		1
ガマズミ属		1	1
コナラ属	1		1
トネリコ属	1		1
スルデ		1	1
ホシキ		1	1
ハゼノキ	1		1
モチノキ属		1	1
ヤナギ属	1		1
总计	57	25	82

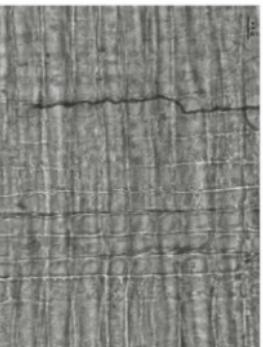
写真図版 I



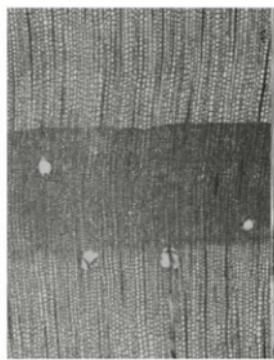
1a. アカマツ 15548 木口×30.



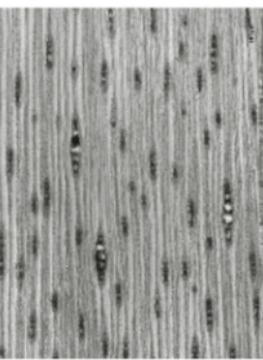
1b. 同 板目×60.



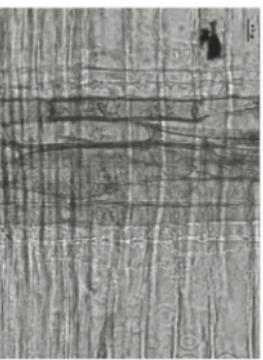
1c. 同 柱目×240.



2a. クロマツ 15552 木口×30.



2b. 同 板目×60.



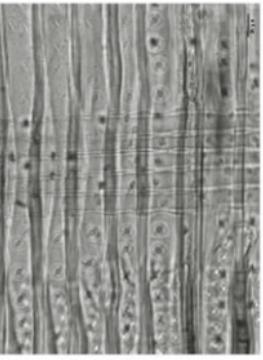
2c. 同 柱目×240.



3a. イヌマキ属 15474 木口×30.

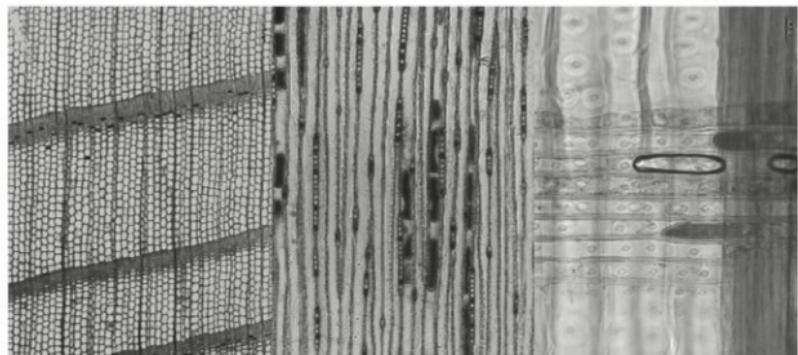


3b. 同 板目×60.



3c. 同 柱目×240.

写真図版 II



4a. スギ 15507 木口×30.

4b. 同 板目×60.

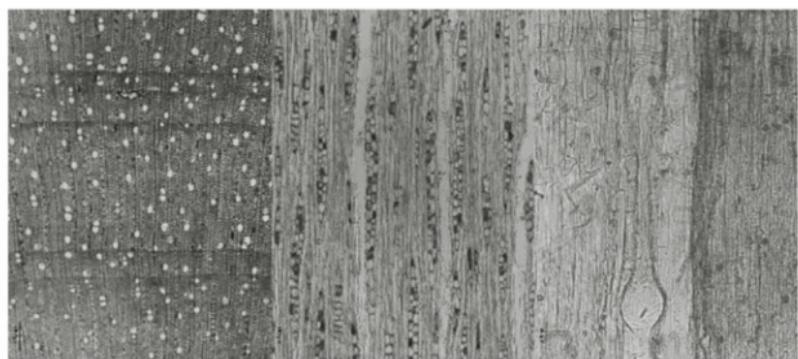
4c. 同 柱目×240.



5a. クスノキ科 A 15520 木口×30.

5b. 同 板目×60.

5c. 同 柱目×120.

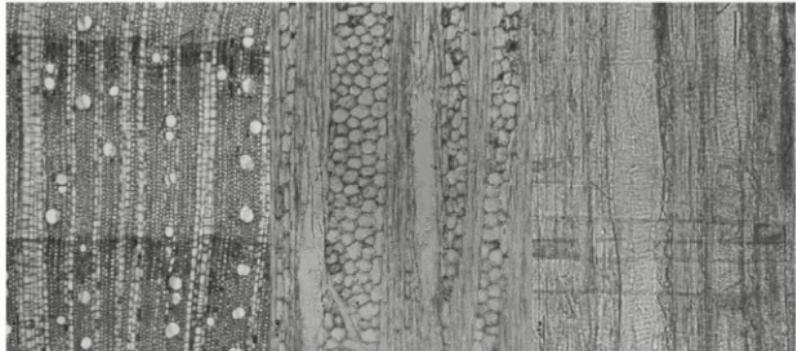


6a. クスノキ科 B 15481 木口×30.

6b. 同 板目×60.

6c. 同 柱目×120.

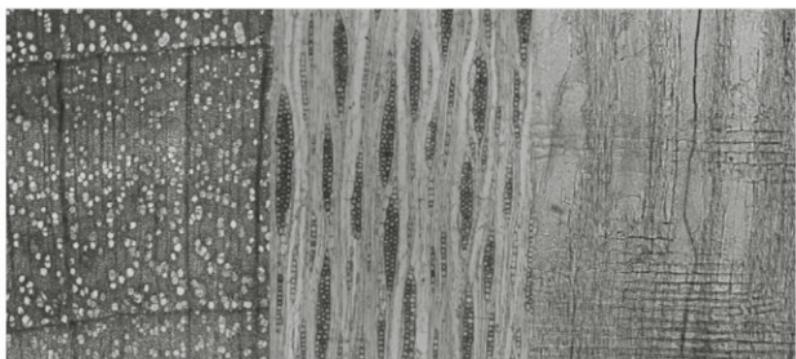
写真図版III



7a. アブキ 15476 木口×30.

7b. 同 板目×60.

7c. 同 柱目×120.



8a. ヤマザクラ 15482 木口×30.

8b. 同 板目×60.

8c. 同 柱目×120.

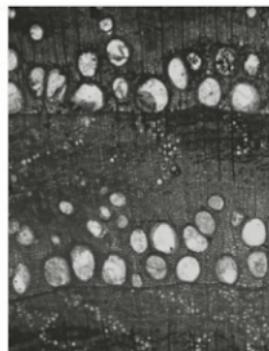


9a. ケヤキ 15515 木口×30.

9b. 同 板目×60.

9c. 同 柱目×120.

写真図版IV



10a. クリ 15541 木口×30.



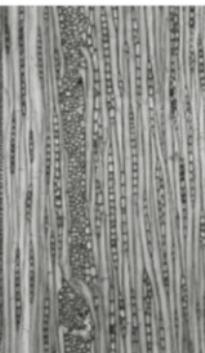
10b. 同 板目×60.



10c. 同 桩目×120.



11a. コジイ 15518 木口×30.



11b. 同 板目×60.



11c. 同 桩目×120.



12a. スダジイ 15485 木口×30.

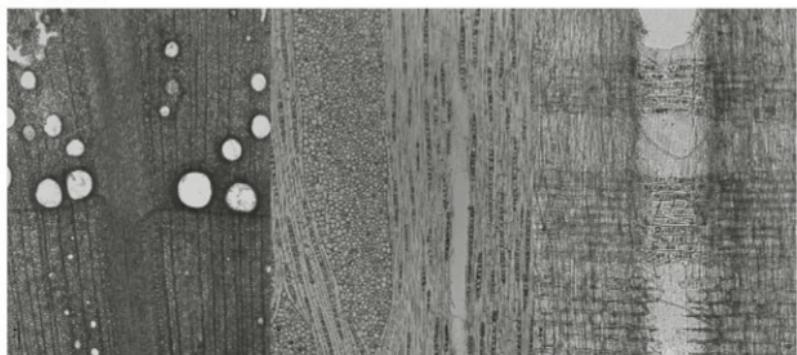


12b. 同 板目×60.



12c. 同 桩目×120.

写真図版V



13a. クヌギ節 15531 木口×30.

13b. 同 板目×60.

13c. 同 柱目×120.



14a. コナラ節 15532 木口×30.

14b. 同 板目×60.

14c. 同 柱目×120.

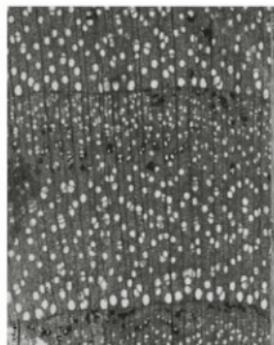


15a. ウバメガシ 15563 木口×30.

15b. 同 板目×60.

15c. 同 柱目×120.

写真図版VI



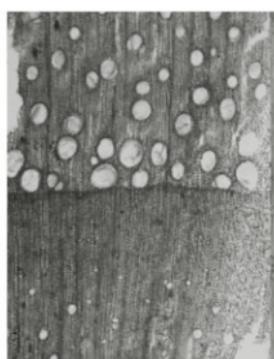
16a. ヤナギ属 15522 木口×30.



16b. 同 板目×60.



16c. 同 桩目×120.



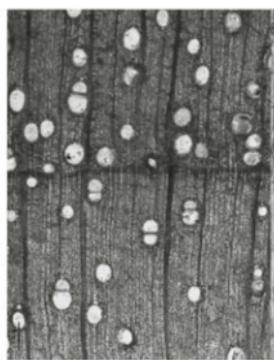
17a. ヌルデ 15517 木口×30.



17b. 同 板目×60.



17c. 同 桩目×120.



18a. ハゼノキ 15536 木口×30.

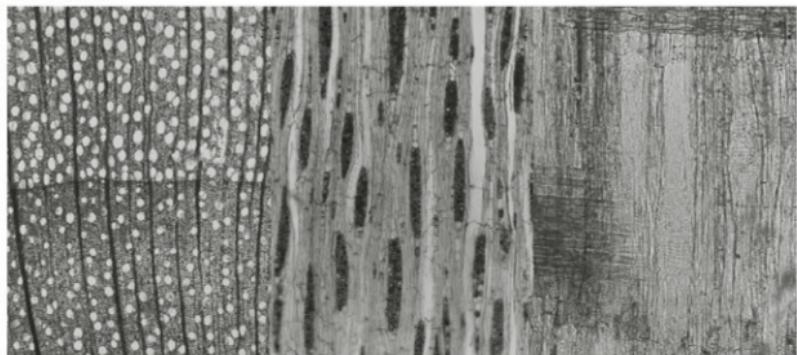


18b. 同 板目×60.



18c. 同 桩目×120.

写真図版VII



19a. クマノミズキ 15562 木口×30. 19b. 同 板目×60.

19c. 同 柱目×120.



20a. サカキ 15502 木口×30.

20b. 同 板目×60.

20c. 同 柱目×120.



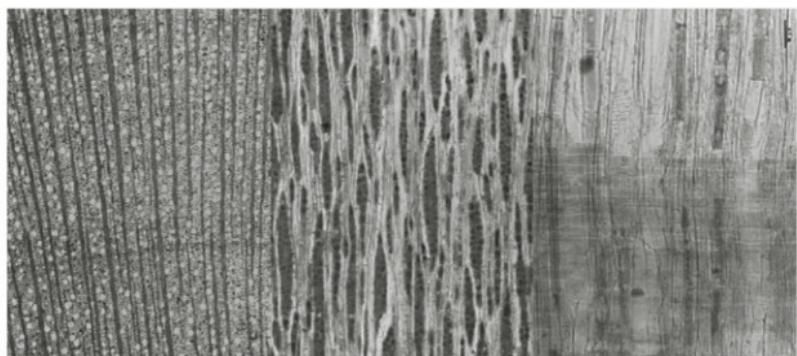
21a. エコノキ属 15564 木口×30. 21b. 同 板目×60.

21c. 同 柱目×120.



22a. シャシャンボ 15503 木口×30. 22b. 同 板目×60.

22c. 同 桩目×120.



23a. ネジキ 15505 木口×30.

23b. 同 板目×60.

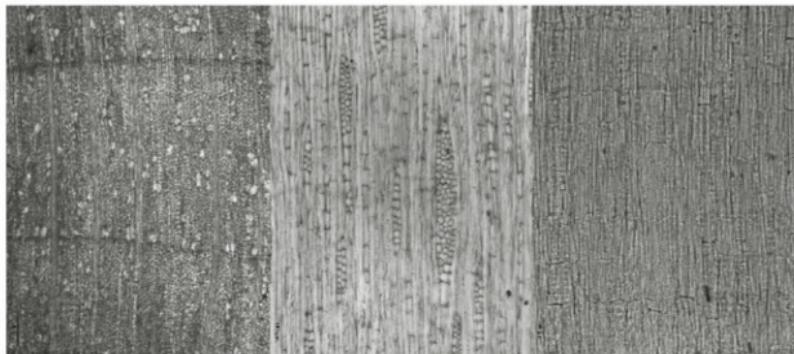
23c. 同 桩目×120.



24a. トネリコ属 15486 木口×30. 24b. 同 板目×60.

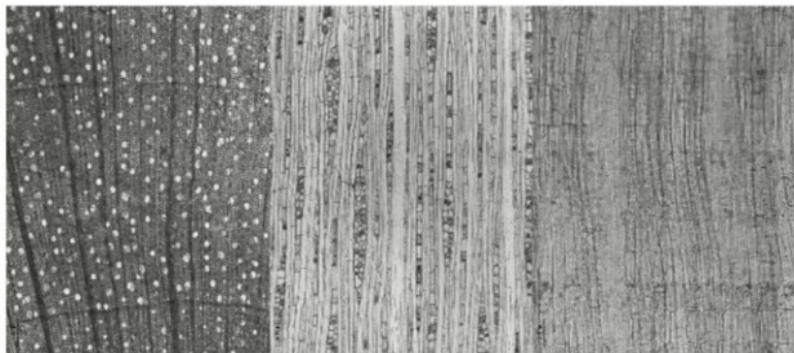
24c. 同 桩目×120.

写真図版IX



25a. モチノキ属 15535 木口×30. 25b. 同 板目×60.

25c. 同 柱目×120.



26a. ガマズミ属 15545 木口×30. 26b. 同 板目×60.

26c. 同 柱目×120.

写 真 図 版



1 海戸田遺跡遠景（南西より）



2 海戸田遺跡遠景（北東より）

図版2



1 3区全景（南西より）



2 3区SD01（北東より）



1 3区SD01土層堆積状況（東より）



2 3区完掘状況（西より）

図版4



1 2区全景（西より）



2 2区S R O 1（南東より）



1 2区 S R O 1 壕状遺構（北東より）



2 2区 S R O 1 壕状遺構（西より）

図版 6



1 2区SD10 (西より)



2 1区SD10 (西より)



3 1区下層遺構全景 (西より)



1 1区全景（南西より）



2 1区SX04（焼土遺構）（西より）

図版 8



1 2区 S R O 1 出土山茶碗集合写真



2 上層遺構・包含層出土貿易陶磁器（青磁・青白磁・白磁）



3 上層遺構・包含層出土国内産陶器（瀬戸美濃・常滑・志戸呂）

図版9



1 3区SD01土器出土状況（北東より）



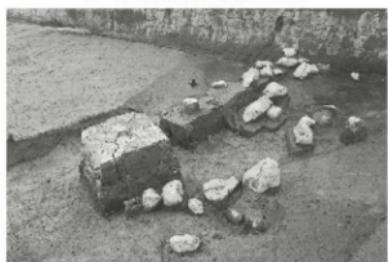
2 3区SD01漆椀出土状況（北東より）



3 3区SD03土層断面（南より）



4 3区SD04（北東より）



5 3区SD06・07北側石列（南東より）



6 3区SD06・07南側石列（北東より）



7 2区SR01土器出土状況（南西より）



8 2区SD05土層（北東より）

図版 10



1 2区SR01堆状遺構の杭列（東より）



2 2区SR01堆状遺構（北より）



3 2区SR01堆状遺構（北西より）



4 2区SR01堆状遺構（1層目）（東より）



5 2区SR01堆状遺構（2層目）（東より）



6 2区SR01堆状遺構（2層目）（南より）



7 2区SR01堆状遺構（3層目）（東より）

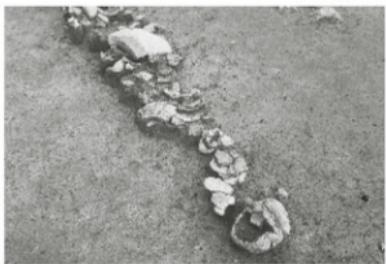


8 2区SR01堆状遺構（3層目）（南より）

図版 11



1 1区小穴遺構 (SP17~19) (東より)



2 2区SD10遺物出土状況1 (北西より)



3 2区SD10遺物出土状況2 (北西より)



4 1区SD10遺物出土状況3 (北より)



5 1区SX01完掘状況 (南西より)



6 1区SD12遺物出土状況 (北西より)

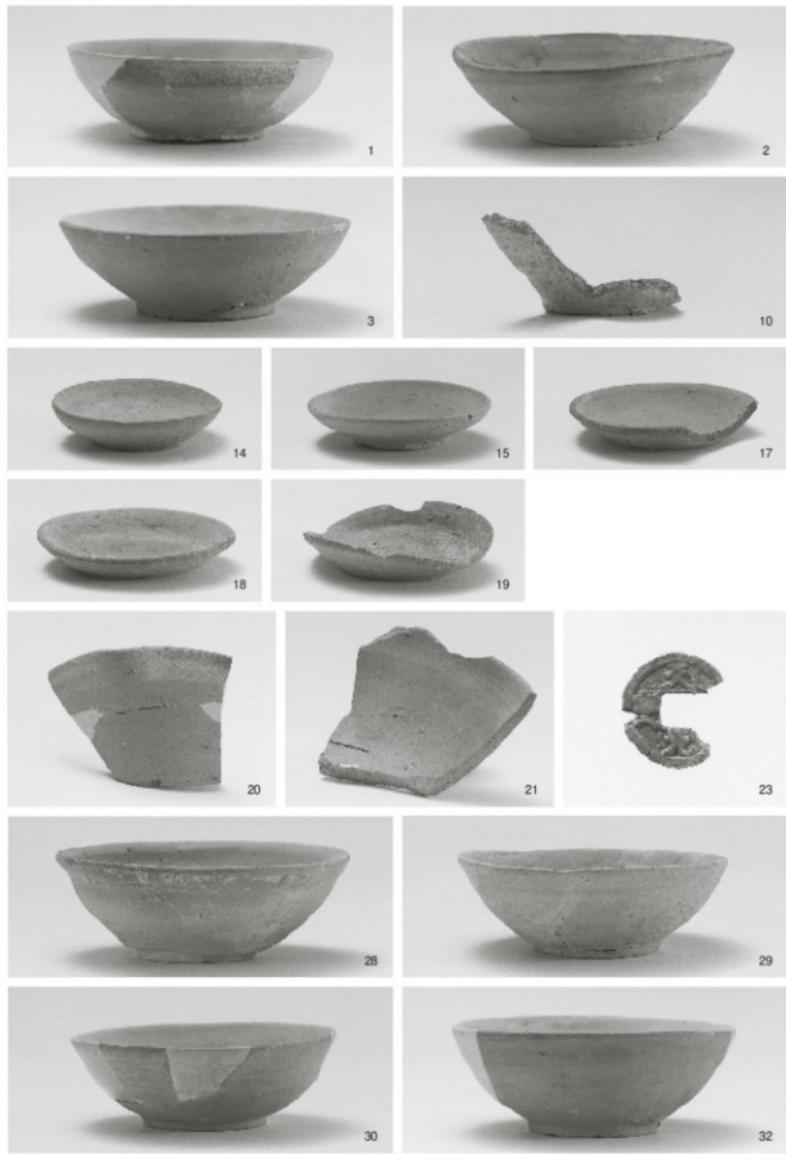


7 1区SD13遺物出土状況 (北東より)



8 1区SX03遺物出土状況 (南より)

図版 12



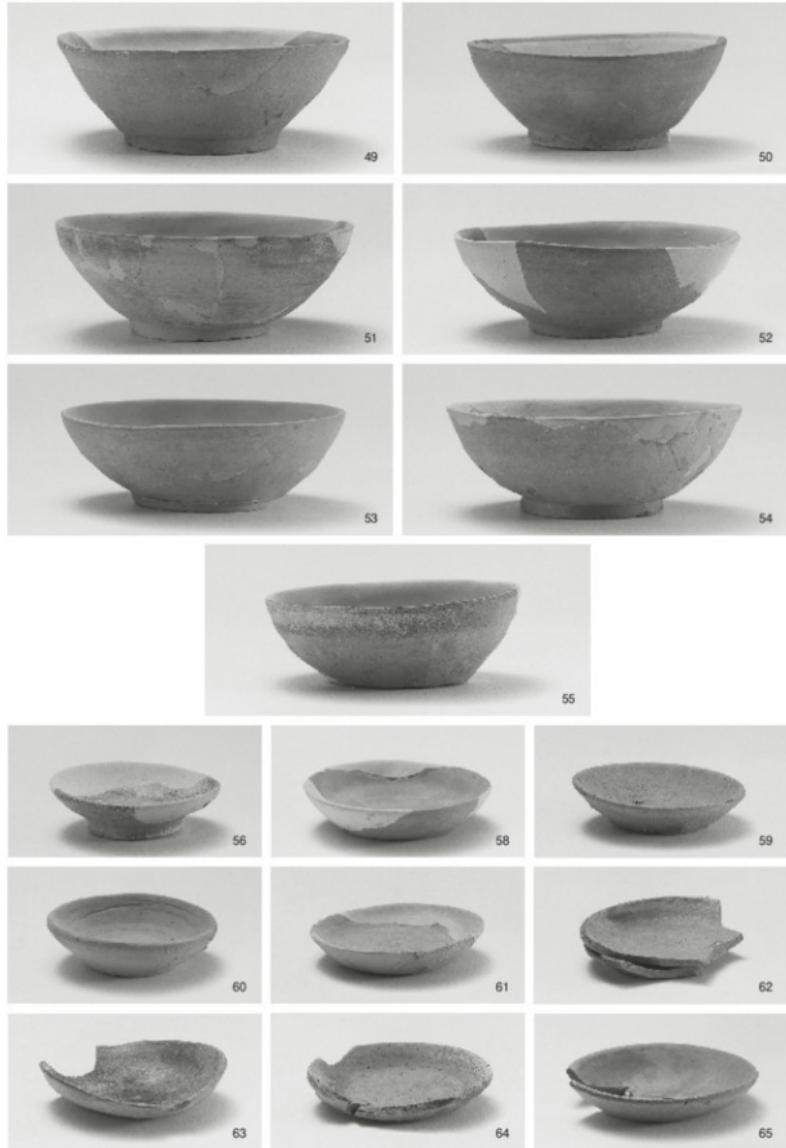
出土遺物 1 (山茶碗・錢貨)

図版 13



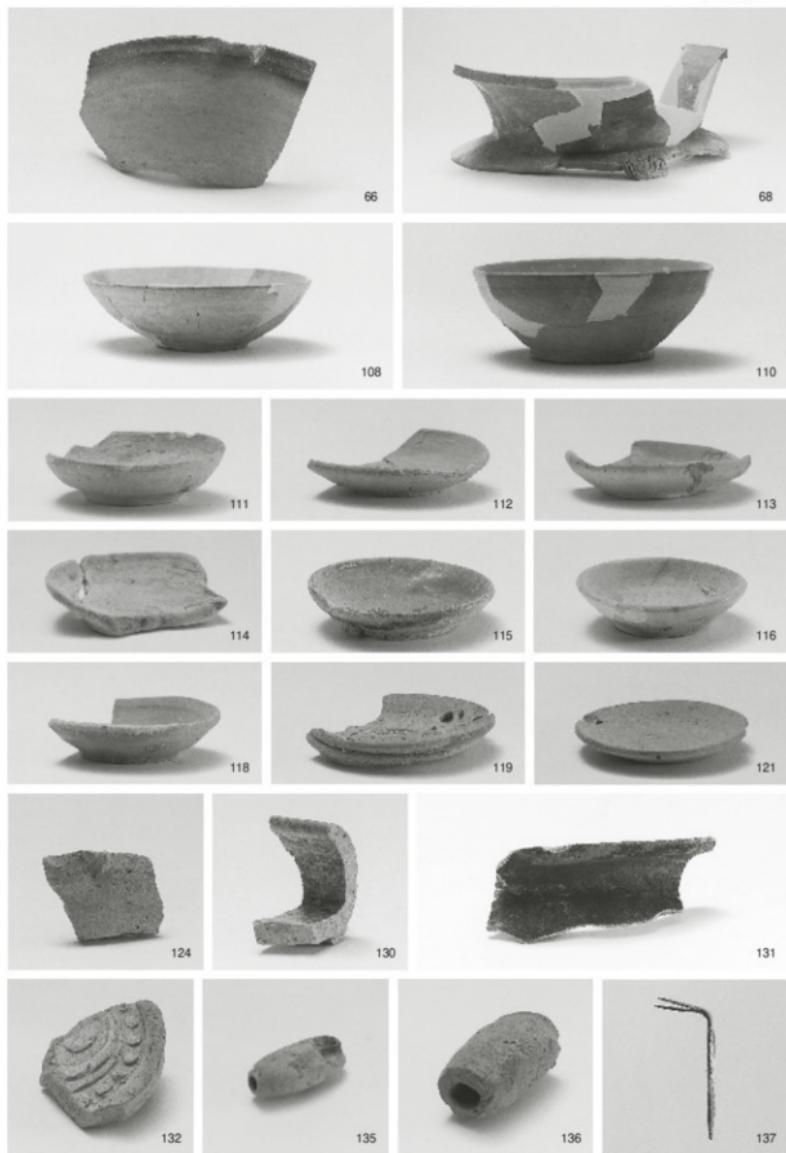
出土遺物 2 (山茶碗)

図版 14



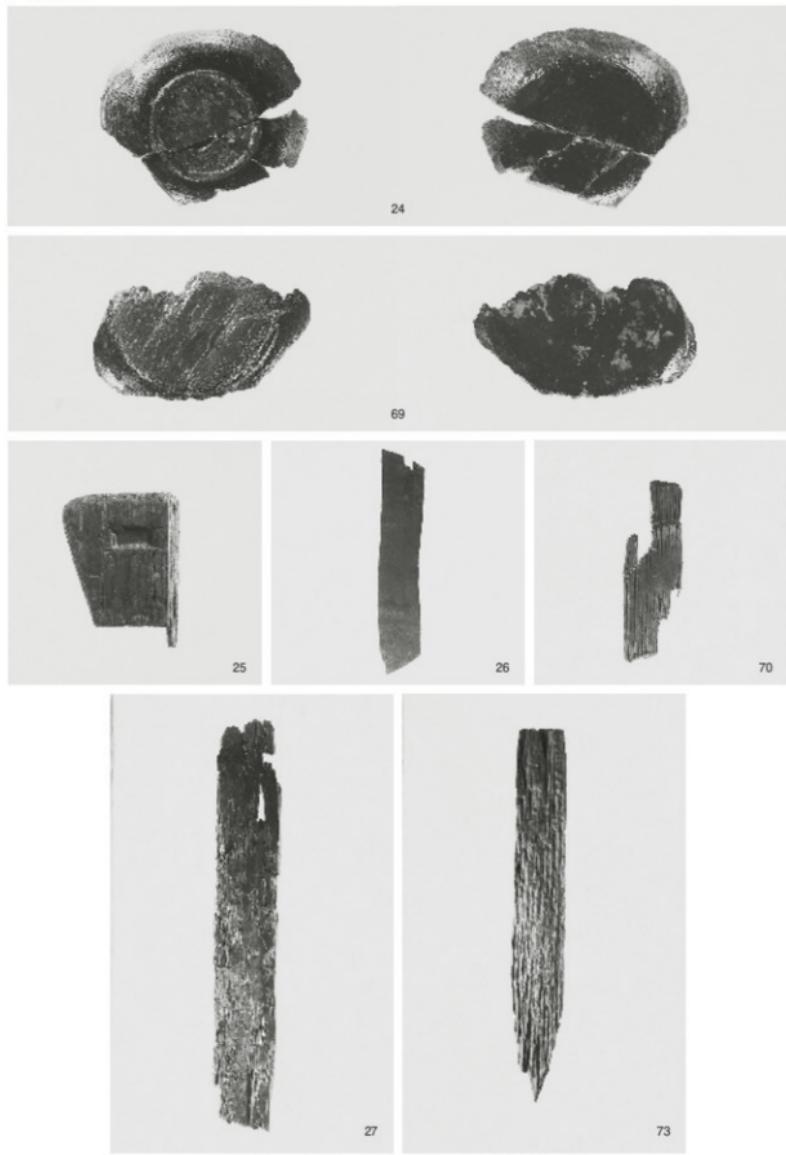
出土遺物 3 (山茶碗)

図版 15

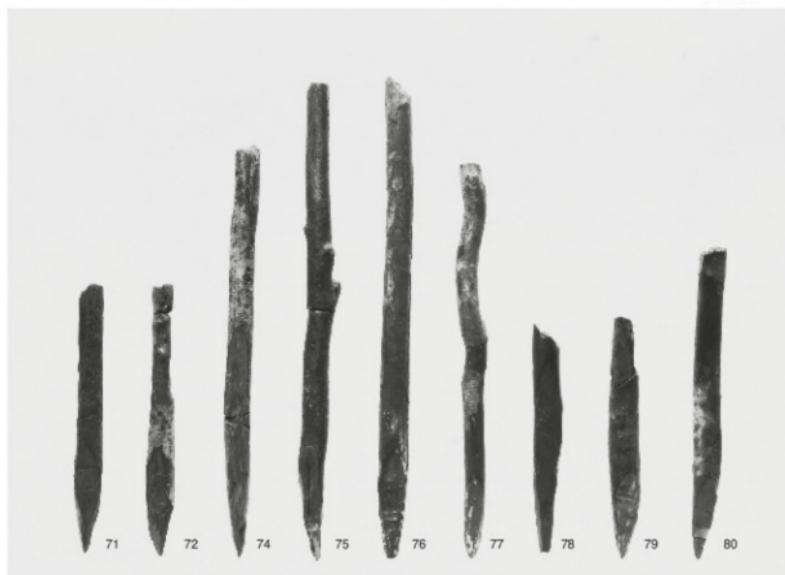


出土遺物 4 (山茶碗・陶器・土師器・瓦・土錘・銅製品)

図版 16



出土遺物 5 (漆椀・農具・曲物・板状木製品・杖)



出土遺物 6 (杭)

図版 18



出土遺物 7 (杭)

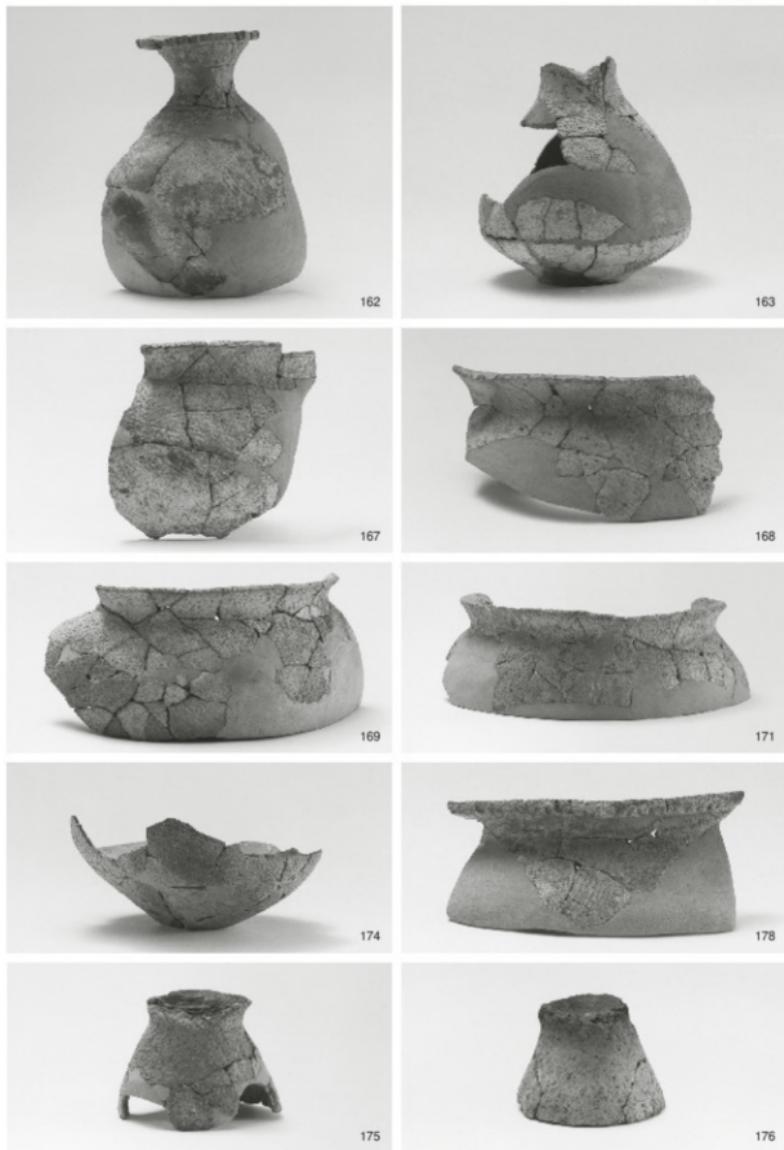


出土遺物 8 (土師器)

図版 20

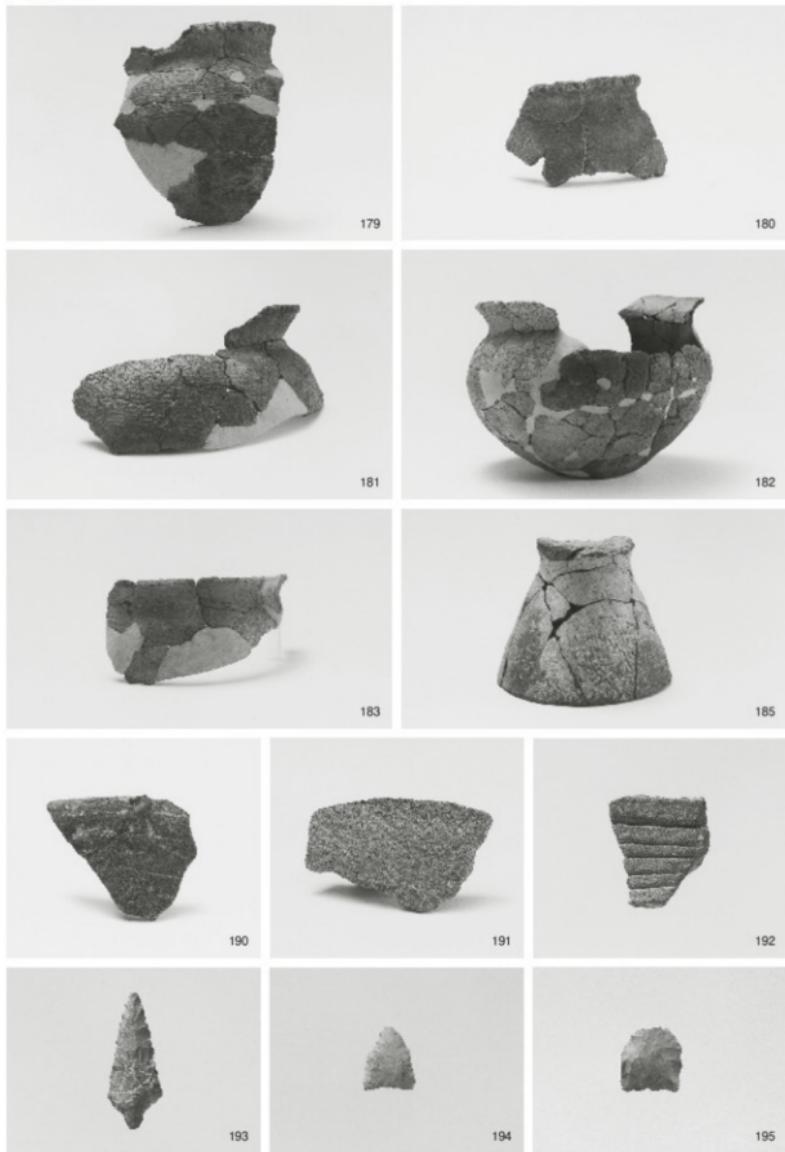


出土遺物 9 (弥生土器)



出土遺物 10 (弥生土器)

図版 22



出土遺物 11 (弥生土器・縄文土器・石器)

報 告 書 抄 錄

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第49集

海 戸 田 遺 跡

平成24・25年度（主）吉田大東線社会资本整備総合交付金
(県道道路改築) 及び平成26年度（主）吉田大東線防災・
安全交付金（県道道路改築）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成27年3月31日発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL 054-262-4261(代)
FAX 054-262-4266

印 刷 所 株式会社 三創
〒422-8047 静岡県静岡市駿河区中村町166-1
TEL 054-282-4031